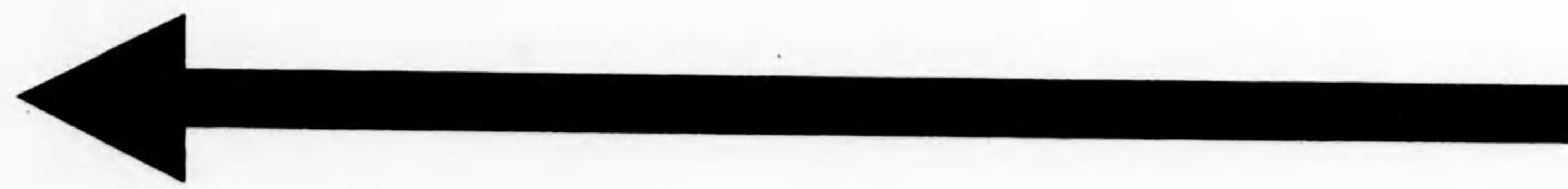


特 258

321



始



佛
教
大
系

正法眼藏第四

(中)

特

321

特 258
321



△辨、より下、
向、下、二、字、アリ
△辨、向、上、二
字、ナシ

正法眼藏佛向上事

佛向上事

【義雲頌著】 第二十六佛向上 千聖不携

仰之高矣、鑽之堅、佛祖依前、曾不傳、滴水非涓、納天月、大千界、外幾三千、

【面山述贊】 第二十六佛向上 述云、透脫想解、解於佛見法見者、是稱佛向上、

經說佛頂、亦說非如來、夾山揮劍、石霜奪土、共導人於此也、贊言 釋迦彌勒、是

他奴、奴亦從來非模樣、故雪消融、今夜雨、千峯定、新有、蘇、

【開解】 正法眼藏佛向上事卷開解 佛向上……一切を超えて外にある様に思ふで無い、其境界の上に、

直にある向上なり、凡情想解の佛見法見を脱解するを云、佛經には八佛頂と云、祖師では彼無國土、

何處逢彼とも云ひ、又撥塵見佛時如何、直須揮劍と云、これみな佛向上の事なり。

【那一寶】 佛向上 那一寶曰、見是非見、見不能及、語是非語、語不能及、如來非如來、這裏

體得而可有語話分、如是識得佛向上、親嫡嗣なり、向上向下順行逆行、三世十方師資一圓にして

古今通貫の佛祖位、是佛向上眼目なり。

高祖筠州洞山悟本大師は、潭州雲巖山無住大師の親嫡嗣なり、如來より三十
八位の祖向上なり、自己より向上三十八位の祖なり。



△那、り下割云、如來ハ洞山ノ
△辨、り下割云、ナヲ異本ニ
ニハニ作ル

△辨、那、聞下割云、今所引同傳燈會元末語無待字、其時洞山聞也我字上有待字、則此僧聞也

△辨、佛向上以下廿二字も下ニ在リ
△那、も下割云、佛向上ニ到リテ
△辨、す下割云、コノ向上ノ事ハ

【開解】 高祖……此方の祖師ゆゑに高祖と云、悟本大師は大宗證號なり○如來向下……自己よりとは、洞山祖の自己よりと云ふこと、順逆に數へる○大師の傳は出傳燈十五。

【私記】 とは、參本いはく、而今四十餘字、參究佛向上事、即是、と參本は漢譯なるをしかあれば一、みな佛向上事なり、算數の會をなすことなけれ、如來をみることなけれ、自己を認むることなけれ

大師有時示衆、云體得佛向上事、方有些子語話分、僧便問、如何是語話、大師云、語話時聞黎不聞、僧曰、和尚還聞否、大師云、待我不語話時、即聞

【開解】 これこの僧……佛向上と不聞、語話を問ふは意あり。

【私記】 とは、影室いはく、是は佛向上事の上に語話と、不語話と、聞與不聞談するなりと語話時は、聞黎不聞これなり、不語話時は、即不聞これなり

いまいふところの佛向上事の道、大師その本祖なり、自餘の佛祖は、大師の道を參學しきたり佛向上事を體得するなり、まさにしるべし佛向上事は、在因にあらず果滿にあらず、しかあれども語話時の不聞を體得し參徹することあるなり、佛向上にいたらざれば、佛向上を體得することなし、語話にあらざれば、佛向上事を體得せず、相顯にあらず相隱にあらず、相與にあらず相奪にあらず、このゆゑに語話現成のとき、これ佛向上事なり、佛向上事現成のとき聞黎不聞なり、聞黎不聞といふは、佛向上事自不聞なり、すでに語話

時聞黎不聞なり、しるべし語話それ聞に染汗せず、不聞に染汗せず、このゆゑに聞不聞に不相干なり、不聞裏藏聞黎なり、語話裏藏聞黎なりとも、逢人不逢人、恁麼不恁麼なり

【開解】 いまいふ佛向上の道取は、大師が初めなりと云ふこと○在因……菩薩の修行路にあらず、如來地の果滿にもあらず、因果を超える佛向上なり○語話時不聞……佛向上の語話の時は不聞なり、説時黙、言辭相寂滅で、語中に語がない、道火不燒口酒と説いて醉はぬ、これ語話が其儘不聞なり○佛向上に、當人が佛向上の人に成らねば知られぬ○相顯……世俗諦を超えたもの○相隱……正義諦をも越えて、隠れて何にも無いと云でなし○相與ふの宗門の放行して與ふるにも非ず○把住して芭蕉の如く汝無拄杖子、吾奪汝拄杖子、と云ふ様に手前へ取るでもなし、なせにこの佛向上事は對治門を超えたものゆゑに、このゆゑに……上をみな括つて對治の辭を出した、語話は未正語で、洞山の語で、洞山を超えて居る、口似醉人、有不是有、無不は無、或時は佛性有と云ひ、或時は佛性無と云ふ、この佛向上事現成の時は、無聞無説、眞般若で、一法も説底の法無く、聽く底の法なし、故に聞黎不聞全體未正語を聞く底の道理なし○聞黎云規範、亦云正行○佛向上事自不聞……向ふに不聞と云ふ法ありて對するでなし、聞黎が即不聞、不聞が即聞黎なり、在吾三昧吾亦不知自不聞なり、聞黎の外に不聞なし○語話時聞黎不聞とは語話がやはり聞黎聞黎が語話でこの外に聞うやうなし○語話それ……佛向上の語話と云ふはそれは本未正語のゆゑに不有不無、聞底の法無く能所が無いから不染汚、出息不涉衆緣、○不聞に……不聞底の法が無いから染汚なし、入息不居陰界なり、このゆゑに佛向

清水無三、でにノ字、
△辨、那、り下割云、是以△那、し下割云、コノ△辨、那、なり下割云、此時

上の語話は聞不聞にあづからず、いろはつさはらず○不聞裡に……盡虚空遍法界が不聞になる、この時は不聞斗りて闇黎は滅れる、寂滅を談する門には諸法みな寂滅と云ふ處○語話の時……遍界がすべて語話で、舌覆大千、この時は一向語話斗りになる、闇黎が立たぬ、こゝろは般若に須菩提問佛曰、如來得菩提否、佛言如來不得菩提菩提即如來、如來即菩提故とある、この意なほ法が二つないゆゑに、闇黎が語話、語話が闇黎なり○逢人……不聞闇黎と一法計り推しつくねて不自由なことで無から、世俗諦に向ひ語話の時は逢人恁麼如是なり、又勝義諦不聞の時は不逢人不恁麼なり。

【私記】とは しかあれどもとは、なほしかしあればといはんがごとし、因果一如の佛向上事なれば、語話時の不聞を體得し參徹するなり、體得參徹、ともにをのれにえたるをいふなり、佛向上事にあらざる、佛向上なきをもて、いたらざれば、體得することなしといへり、語話にあらざる佛向上事あらざれば、體得せずといへり、影室いはく、此語話の道理をはなして、佛向上といふ義あるべからずと佛向上事のあらはるとき、語話かくるるにあらず、語話をあたゆるとき、佛向上事をうばふにあらずれば、隱顯與奪にあらずといへり」彼此隱顯にあらざるをもて、語話現成のときこれ佛向上事なり、佛向上事現成のとき闇黎不聞なり」ここをもて闇黎不聞といふは、佛向上事自不聞なりといへり、佛向上事のほかに不聞なきを佛向上事のみづから不聞なりとはいへり、例せば佛向上事之家不聞といふほどのことなり、依主釋なり「聞不聞ともに語話に親切なるをもて、染汚せず、不相干なりといへり」闇黎の外不聞なく、語話の外闇黎なきを裡藏といへるなり、ゆゑに逢人不逢人恁麼不恁麼面目なり」【御抄】先佛向上事と云へば、佛より上に猶まさりたる事のあらむするか、乃至佛に取ても御くし頂上なむとの事を云程に心得、不可然、只今の佛法の所談、併是佛向上事なるべし世間の人上を云も、

強その人の頂上、かをなむとの事を云にあらざれども、たゞ其人の上の事を云をば、人上を云なむと名たり、又如來より三十八位祖向上也とあり、佛與祖差別あるべからざれば、題目には佛向上と云てこゝには祖向上とあり、自己より向上三十八位の祖也とあり、上も下も三十八位、祖向上也、向上三十八位の祖也と云云、是は所詮三十八位の祖、悉今の洞山に藏身する也、三十八位と云は、二十八祖より、六祖まで三十三祖青原より洞山まで五代都合三十八祖也、今の自己は洞山の自己也、此問答は佛向上事を體得して、些子の語話分あるべしと、大師被仰を僧如何是語話と問たるを大師答に語話時闇黎不聞と被仰を重僧和尚還問否と奉問に付て、大師待我不語話時即聞とうつくしう問答あるやうに聞ゆ、是は佛向上事の上に、語話と不語話と、聞與不聞談するなり、世間の問答の詞にあらず、語話も佛向上事なるべし、此理の上に、不語話の詞あるべし、語話時は闇黎不聞の道得あるべし、闇黎とは指今僧歎、又大師道の不語話を以て即聞と談する也、聞與語話非二、ゆへに此佛向上の詞洞山始て被示たる詞也、ゆへに大師その本祖也とは云也。

今の佛向上、まことに因果にあらざるべし、然而語話時の不聞と云事を體得し、參徹する事ある也と云也。

實佛向上にいたらざらむに、佛向上事を體得すべからざる條勿論也、此語話の道理をはなして、佛向上事と云義あるべからず語話と佛向上事とのあひか、相顯にあらず、乃至相奪に非とは云はるゝ也、彼が是に成と云義がなき時に、隱顯とも與奪にてもなき也、此道理は此佛向上にかぎるべからず、此法文の圖皆如此なるべし、闇黎とは指此僧歎。

闇黎不聞と云は、聞べきか不聞にあらず、佛向上の理か自不聞なる道理也。

是は上の語話時不聞の理を被釋なり、語話の詞聞に染汚せらるべからざる也、此語話がやがて聞なるゆへに、不聞に染汚すとは云はるゝ也、是は聞不聞に不相干なる道理なるべし。

是は不聞裏闇黎をかくし、語話裏に闇黎をかくすと云ふ、然者不聞與語話が、前後にへぬしになりたるときこゆ、但此不聞、此語話、闇黎、皆一物なればかくると可云歟、かくれすと可云歟、然而今詞のあらはるゝ分に付て談也、此不聞裏闇黎、語話裏闇黎のあはひか、逢人不逢人、恁麼不恁麼とは云はるゝ也、會不會、見不見程の道理なるべし。

【辨註】 辨曰、此語話とは別に密語眞語實語異語あるべからず、逢人時茶話飯談全無別語、如是事を體得するを是を語話現成の時節と云、是佛向上の事現成の時なりといへども闇黎不聞なり、雖非是隱一與奪所致、闇黎爲什麼不聞なるや。

辨曰、同途不同轍、然も闇黎一人のみにあらず、盡大地人語話時不聞なり、是佛向上事なり語話時爲什麼不聞、可聞語話ありや、是は不語即眞聞と云にはあらざるなり、語話時不聞、不語話時即聞、爲什麼恁麼なると參學すべきなり、亦復語話時も聞と不聞とあり、不語話時も聞と不聞とあり、畢竟語不語聞不聞共に吾にあらずといへども、汝にあらずらんや、人々各々不聞裡に藏身し、語話裡に藏身すといへども、逢人不逢人恁麼不恁麼あることを參究すべし。

【那一寶】 語話時の不聞を體得しとは、語話の時外に闇黎ありて不聞と云に非ず、語話の時語話のみなるが故に、語話時の不聞と云ふ、語話にあらざれば佛向上事を體得せずとは、語話を離れて佛向上事と云義あるべからず、故に語話と佛向上事と相顯に非ず、乃至相奪に非ず、彼此あることなし、故に語話現成の時佛向上事なり、佛向上事現成のとき闇黎不聞なりと云ふ、語話とは別に密語眞語眞語

異語あるべからず、逢人時茶話飯談、全無別語、如是事を體得するを語話現成の時節と云ふ、是佛向上事現成の時なりといへども闇黎不聞なり、闇黎爲什麼不聞なるや、不聞の宗旨を存取すべし。上文の佛向上事現成のとき闇黎不聞なりしの詞を打返して、闇黎不聞と云は、佛向上事自ら佛向上事不聞なり、すでに語話時闇黎不聞なり、可如此語話耳根を以て聞べからず、故に聞不聞に不相干なり、畢竟不聞の特別に闇黎なく、語話の特別に闇黎なし、是を不聞裡に闇黎を藏し、語話裡に藏闇黎と云ふ、藏と云て此を彼に藏すの義には非ず、たとへば逢人不逢人恁麼不恁麼會、不會見不見と云ふが如し、染汚聖礙の意にも可見。

闇黎語話時、すなはち闇黎不聞なり、その不聞たらくの宗旨は、舌骨に聖礙せられて不聞なり、耳裏に聖礙せられて不聞なり、眼睛に照穿せられて不聞なり、身心に塞却せられて不聞なり、しかあるゆるに不聞なり、これらを拈じてさらに語話とすべからず、不聞すなはち語話なるにあらず、語話時不聞なるのみなり、高祖道の語話時闇黎不聞は、語話の道頭道尾は、如藤倚藤なりとも、語話纏語話なるべし、語話に聖礙せらる。

【聞解】 闇黎語話……闇黎語話の時、手前で語話して手前で不聞、手前に妙用する、言辭相寂滅なり、佛の説法も終には一字不説と、闇黎不聞になつた、何にも説く底の法なし、祖師の一千七百則も畢竟闇黎不聞なり○不聞ならく……ならくとは、謂字を書す、先づ不聞といふ宗旨は、手前の口が舌骨で碍へられ、手前が手前に碍へらる、又手前の耳に碍えらる、向ふに聞くものありて不聞でなし、眼も不

△辨、骨下割
云、不啞故
△辨、裏下割
云、不雙故
△辨、睛下割
云、不盲故
△辨、心下割
云、獨體識
△辨、に下割
云、闇黎
△辨、ら下割
云、上三所レ云
ノ不聞△割、
割云、ノ舌骨
等
△辨、に下割
云、不聞が眞
聞

△辨、話下割云、即聞
△辨、那、す下割云、微但
△辨、は下割云、始終共ニ
△辨、も下割云、此二字衍
△辨、し下割云、コノ
△辨、る下割云、聖得即無
△辨、ナリ然レ
△辨、不聞ナ

聞、身心も碍ゆるとは、六根四大身心俱に不聞で、全體が不聞なる道理で、向ふに相手ありて不聞でなし、言辭相寂滅で外に聞く底の法なし○これらを……上に云、碍へられたを拈じて、佛向上の語話となす、これ不聞、語話では無い、一法の聞くべき無い、其れが語話ではない○語話時不聞で説の時黙で不聞舌頭斷不_{シテ}斷一切みな不聞なり○高祖道……語話の道取の頭道取の尾_{はじり}ともに藤の藤により語話と聞黎と二つない、ゆるに語話時聞黎不聞、手前の語話が手前の語話をまとう、ゆるに聞けぬ、語話が語話をまとうて二種の語なき故に不聞なり。

【私記】とは、語話の時も、不聞も、みな聞黎なり、ゆるに聞黎語話時、すなはち聞黎不聞といふ、影室いはく、その不聞たらくの宗旨はとて、不聞の姿を無盡にあかさんと「又いはく、六根皆不聞の道理なるべし」と舌骨は、なほ舌頭といはんがごとし、參本いはく、箇裡_ニ聖礙、皆共_ニ觸處透脱_ト舌骨を不聞につくるを、舌骨に聖礙せられて不聞なりといふなり」聖礙はひきくるまるをいふ「照穿は、くもりなくさつぱりとてるをいふ」塞却は、身心を不聞にてふさぎぬれば、縫罽披離なきなり「これらを拈じてさらに語話とすべからずとは、これらとは、上の舌骨等をさす、これらみな不聞面孔なれば、さらにあまれる語話あるべからず、ゆるに不聞すなはち語話なるにあらずといへり、それをこれにする比倫の論にあらざるなり」ここをもて語話時不聞なるのみなり、汝はこれ誰ぞ「語話の道頭道尾とは、語話のあとさきといふことなり」如藤倚藤とは、餘物まじりなきをいふなり」なりともとは、なほなればといはんがごとし、餘はしるべし」

【御抄】聞黎語話の理が、聞黎不聞なる也、聞黎も語話も、不聞も不各別ゆへに、又その不聞たらくの宗旨はとて、不聞の姿を無盡にあかざる、打任は不聞と云詞は、耳根に仰て云詞なり、今は舌骨耳裏眼睛身心等をあげて不聞也と被舉也、六根皆不聞の道理なるべし、又しかあるゆへに、不聞也と云へば、上に舌骨より身心に至まで、色々に被舉所をしかあるゆへにと云かと被心得たり、其分もなかるべきにはあらねども、只しかあるゆへに不聞也とは、上の詞を不奪とも只法の理が、しかあるゆへに不聞也と云はるべき也、是則即不中の道理なるべし。

彼是をあげて語話と云へば、喩になりたるやうにも聞ゆ、只不聞は不聞なるべし、語話とかならず談すべきにあらぬ道理也、語話時不聞なるのみ也と云ふ、聞黎語話時則聞黎不聞也とは、聞黎語話一なるゆへに聞黎不聞とは云也。

こゝには語話と、聞黎と、不聞と、三ある様にきこゆ、但是は語話の道頭道尾と云へば、首尾語話と云心地也、實にも語話と聞黎不聞不各別ゆへに、此道理は如藤倚藤の理なるべし、語話纏語話の理なり、語話に聖礙せらるゝなり。

【辨註】辨曰、佛向上事は六根六境所對歴々にして、然も亦不聞なることいかん、未了_ニ六根不具_{ナリ}故なり、下枯木成_レ示衆を以て看よ。

【那一寶】聞黎の外に可_レ聞語話ありて不聞と云に非ず、聞黎語話の時即聞黎不聞なり、その不聞ならくの宗旨は舌骨には味を知り、耳裡には聲を聞、眼睛裡に放_レ光、身心全體に充塞して不聞なり、しかある故に不聞なりとは法只如_レ是、故に六根六境所對歴々にして、聞不聞に染汚せられざる故に、不聞なり、上に所謂_レ聞不聞に不_ニ相于_ニなり。

高祖道の語話時聞黎不聞は語話と聞黎不聞と、彼此能所あるやうにきこゆれども、但だ是語話の道頭道尾にして、首尾共に語話と云ふ意なり、此道理は喩へば如_ニ藤倚_レ藤_ニなるべし、故に語話纏_ニ語話_一の

道理なるべし、語話に聖礙せらる、聖礙無聖礙なり。

僧いはく、和尚還聞否、いはゆるは和尚を擧して聞語話と擬するにあらず、擧問さらに和尚にあらず、語話にあらざるがゆゑに「しかあれどもいま僧の擬議するところは、語話時に即聞を參學すべしやいなやと咨參するなり、たとへば語話すなはち語話なりやと聞取せんと擬し、還聞これ還聞なりやと聞取せんと擬するなり、しかもかくのごとくいふとも、なんぢが舌頭にあら

問清本作聞
△辨、ま下割
云、此
△辨、那、議
下割云、思量
△辨、は下割
云、一切ノ
△辨、那、と
下割云、和尚
ヲ呼擧シテ
△辨、那、ば
下割云、日用
ノ
△辨、那、ち
下割云、佛向
上ノ
△辨、那、れ
下割云、日用
語話ノ上チ
△辨、く下割
云、異本ニな
リといへども
△辨、も下割
云、上ノ如ク
聞取ストイヘ
下此處ハ

【聞解】 擧和尚……洞祖を擧し出してお前はおき、なされたかと擬して問ふて來たでは無い、其の意は下文で知れる○擧するを聞く底で無い、これで能が立たぬ、又向ふの語話が語話でも無い、これで所が立たぬ、こゝは聞字が入用なり、語話は向の法で所也、聞と云ふ和尚とは、此の方で能なり、今は其の能所とを離れて聞○しかあれども……これから物の二つ並ばぬことを述る○語話の時に其のまゝ聞と云ふ道理を咨參するなり、それをたとへた、語話は即ち、やはり語話也と即聞せんと擬す、これは所聞なり、又還て聞否の還聞は還聞と即聞せんと擬する也、これは能聞なり、大括りは語話は語話で聞取し、還聞は還聞で聞取して語話と還聞と二つ並ばぬ、向ふに聞く底の語話が有れば、二つになる故にしか云ふなり○しかもかくのごとくなりといへども、語時との様に説いて、堅横に談するも、未正語なるゆゑに、舌頭に非らず、語滯立談するゆゑに、談も無く、不動舌頭なり。

【私記】 とは 和尚還聞否の五字、これ不立文字なるをもて、和尚を擧して、聞語話と礙するにあらずといへり、いふところは、和尚語話をきくやとたづねたる詞にあらず、聞處道得なりとなり、ゆゑに擧問さらに和尚にあらず語話にあらざるがゆゑにといへり」擧問とは、きくやと擧したる進歩をいふなり、和尚も語話も、莫動著なるをもてあらずといへり」語話時に即聞を參學すべしとは、語話も即聞も、放過せざるの宗なり、語話還聞の外閑事なきをきこへんとして、語話すなはち語話なり等といへるなり、ゆゑになんぢが舌頭にあらざるなり」

【御抄】 是は和尚還聞否とは、高祖に尋申たるやうに聞る所を、和尚を擧して聞語話と擬するにあらず、擧問さらに和尚にあらず、語話に非がゆへには、和尚に還聞否と、擧問にあらざるなり。如右云、和尚に擧問するには非れども、僧の擬議する所は、語話時に即聞を參學すべしや否と咨參する也となり、但倩案之此語話の道理を、即聞と云參學あるべしといはむ義尤あたるべき也。所詮今の話話還聞等の道理は、語話則語話也と聞取也、還聞これ還聞也と云、道理に可落居也。此理又如此と問答すれども、汝が舌頭にて云にはあらずと也、詮は佛向上の道得也、舌頭なり。

【辨註】 辨曰、此處脱簡あるか、文略にして不易見、爰に和尚還聞否と云は和尚を呼擧して、和尚聞語話なりやと擬するにあらず、今聞を擧すれども此きくは更に和尚の聞にはあらず、何者今何事も語話するにあらざる故に。

辨曰、以要言之、日用の語話を即佛向上の語話とし、其語話を還聞を向上の語話を還聞とせんや否と云となり、故に還聞んや否と點じて好し、如是見則兩箇の聞取の聞字を問の字に改めみるべきか、聞の字にても義通するか、師に聞取せんと擬するの義なり。

【那一實】 和尚を擧して聞語話と擬するに非ずとは、和尚は此語話を聞給ふやと擬聞するに非ず、擧

聞さらに和尙に非ず、語話にあらざるが故にとは、擧聞すれども此聞は更に和尙の聞には非ず、何者レ而今何事にも語話するにあらざる故になり。

以レ要言レ之、日用の語話を即佛向上の語話とし、其日用の語話を還聞を向上の語話を還聞とせんや否やと云となり、故に還聞んや否やと點じて、師より聞取せんと擬するの義なり、上の如く聞取するとも汝が舌頭の語話にはあらずとなり、聞取の聞義通するなり。

洞山高祖道の待我不語話時即聞、あきらかに參究すべし、いはゆる正當語話のとき、さらに即聞あらず、即聞の現成は、不語話のときなるべし、いたづらに不語話のときをさしおきて、不語話をまつにはあらざるなり

【聞解】 正當語話の時には、聞底の法無し、故に即聞にあらず○即聞……不語話とを即聞の現成とは、般若に般若波羅蜜は、無戲論、離言舌故にとある、これを即聞するを不語話を聞くと云○いたづらに語話をさしをきて別に不語話のときを待つに非ず、語話と不語話と二つない、これは語話不聞を承けて云、説の時黙じやから語話が其儘不聞なり。

【私記】 とは 語話も、不語話も、即聞も、ともに佛向上の消息のみ、十二時中は不語話のときにあらずることなし、しかあるをわきごとにして、別に不語話をまつにはなきなり、待不語話時とは、諸法は、不語話の百雜碎なるを待といふなり、相對無言獨立、餘はしるべし」

【御抄】 打任は語話時には即聞の道理あり、不語話時に不聞の道理なるべし、但是は凡塵の見なり、佛向上事の上には、今義あるべからず、詮は語話不語話非得失、不語話の全體を以て即聞と云べし、語

△辨、那、話
下割云、時

不語話をさし
をくの不の字
野なり

話又究盡の時、尤不聞の理あるべし、ゆへに高祖道は待我不語話時即聞と被仰也、此我は洞山事也、不語話の時刻と云、物のあらむするを、待やうに思べからず、ゆへにいたづらに不語話の時をさしをきて、不語話を待には非也とは云なり。

【辨註】 辨曰、語話の時爲什麼不聞なる、不語話時爲什麼即聞すや、是公案參究の様子なり。

辨曰、不語話の時をさしをきてとある不の字衍なるべし、いたづらに語話時に不語話の即聞あることをさしをきて、別に不語話の時を待にはあらざるなり、有語中無語、無語中有語、語話に語話なきことをさき、是不語話の即聞なり、語話時不語話の即聞あるべし、不字有也、不妨、前の谿聲山色篇の山河大地を山河大地と錯るべきにあらずの語勢なり。

【那一實】 語話の時爲什麼不聞なる、不語話時爲什麼即聞すや、即聞の外に語話ありやなしや、是公案參究の様子なり。

いたづらに語話時に不語話の即聞なることをさしをきて、別に不語話の時を待にはあらざるなり、當知有語中無語、無語中有語、語話に語話なきことをさき、是不語話の即聞なり、語話時不語話の即聞あるべし。

即聞のとき語話を傍觀とするにあらず、眞箇に傍觀なるがゆるるに、即聞のとき語話さりて一邊の那裏に存取せるにあらず、語話のとき、即聞したしく語話の眼睛裏に藏身して霹靂するにあらず、しかあればすなはちたとひ閻黎にても語話時は不聞なり、たとひ我にても不語話時即聞なる、これ方有些子語

△辨、那、話
下割云、ナ
△辨、に下割
云、ン
△辨、那、も
下割云、我ニ
ナモ

話分なり、これ體得佛向上事なり、たとへば語話時即聞を體得するなり、このゆるるに待我不語話時即聞なり、しかありといへども佛向上事は、七佛已前事にあらず、七佛向上事なり

【聞解】 即聞……語話で即聞する時一法一物にあらはれて無い、即聞が語話で向ふに法を聞く底がないから、語話を傍に観て相手に取るで無い、それを語話を相手に取り、そばみるは眞箇に傍観で物が二つならばから走では無いゆるるに○即聞……向上の時語話を聞く時語話が去り那裏のあちらの方に往いてかたづいて走して不語話と云ふで無い、こゝまでは、即聞について云ふ、物の二つ並ばんを云、異の方を破す○語話時……語話の時即聞が向上の語話の眼裏に藏身して能所一枚になりて霹靂し響くでは無い、語話の時即聞の道理があると也、こゝは一を破す○たとへ……向の開黎でもあれ語話時は不聞なり、説の時黙なるいへに、又能の我れでも、不語話の時節聞、默時説なる故に、如是合點するが方有語話分なり○已下今迄に出た意なり、不語の時即聞で體得すとは、無舌解語を明め得るなり○しかありといへども……佛向上と云つて、七佛の脇へ立ち去つて云ふことではなし、七佛の當體にあることなり。

【私記】 とは 即聞のとき、語話がわきにゐて見物してゐぬとなり、ゆるるに眞箇に傍観なるがゆるると機行奪市するなり」二物雙行にあらざれば、藏身して霹靂するにあらずといへり」語話時不聞のときは、たとひ開黎にても、我にても、語話時不聞なり」不語話時即聞のときは、たとひ我にても開黎にても不語話時即聞なり、一邊の那理に存取せる一法一塵なきなりこれとは、しばらく語話時不語話をさすなり、正當恁麼時に剩法あらざるをもて、これ方有些子語話分なり、これ體得佛向上事なり、

この作家の語言の不得物語未正をたとへるなり、語話時即聞を體得するときは、影室いはく是は理のひびく處を、とかく入ちがへて被釋なり、語話時不聞なる道理の上に、又語話即聞なる道理あるべき處を如く此被述なりと」語話時不聞も、即聞も、不語話時即聞も不聞も、方有些子語話分も、體得佛向上事も、みなともに窠白なき作家の言語なるをもて、體得佛向事といふも、體得語話時即聞といふも、ともに違背なき道理なれば、待我不語話時即聞と尊答あるなり、はやく尊答を謝しをはれり、佛向上事は、佛向上事、ざるをもて七佛以前事にあらず、七佛向上事なり」

【御抄】 即聞與語話のあはひを重委被釋也、詮は即聞と談するときは、語話と云物の傍観するにあらず、即聞の時は即聞の外にのこる一法あるべからず、眞箇の傍観といふべくは、即聞の時は即聞を傍観とし、語話時の語話を傍観とすべきなり。

即聞要語話のあはひを云に、即聞と談するとき、語話がさりて、一邊の那裏に存取せるに非ず、語話のとき、即聞したしく語話の眼睛裏に、藏身して霹靂するにあらずとは、所詮一が外にそはに又かくれてあるべきにあらず、即聞なる時は語話あるべからず、語話の時即聞又不可有、一法の無邊際道理を如此被釋也、藏身の詞は常に被引出、是が彼に藏身すると云義常事也、然而かゝる又一義もあるべきゆへに、如此被釋なり、所詮ともかくも、詞も面も替たるやうなれども、其理總不可違、是佛向上事の姿なるべし。

是は語話不語話開黎不聞等の詞あり、又本詞に、語話時開黎不聞とある所を、たとひ開黎にても語話時は不聞也と云なり、本の詞に不違、たとひ我にても不語話時即聞なりとあり、是又本詞に、待我不語話時即聞とあり、ゆへに此詞を方有些子語話分也、この理を體得佛向上事也と云なり。

語話時不聞とこそあるを、こゝには語話時即聞とあり、是は理のひく所を、とかく入ちがへて被釋也、語話時不聞なる道理の上に、又語話時即聞なる道理あるべき所を如此被述也、此上は上の詞に對して、待我不語話時即聞也とぞありたきやうに覺ゆれども、此理の上は語話時は即聞、不語話時は即聞ならむ、更不可有難事也。

是は佛向上と云へば、七佛已前はるかなる詞に思付たるを非爾、只七佛の上事也と云ふなり、乃至七佛と云へば、猶佛にかうぶらしめて云様にも心得つべし、草木山河大地の上に談せむも、佛向上事なるべし、されば奥にも、如何是佛向上事と問せられて、拄杖頭上挑日月と、答たる事もある也。

【辨註】 辨曰、此段寫誤するか不_レ易見あり、此書に霹靂の字往々有_レ之、皆動用し響き聞ゆるの義なり。

辨曰、是も不語話時即聞を體得するなりとあるべきを不の字脱するか、語話不語話聞不聞在_二其人_一耳。

辨曰、七佛已前の事にはあらず、然れども七佛向上と七佛已前事と前後際有るにあらず、前後一圓なり。

【那一寶】 不語話の即聞と云とき、語話を傍觀としりぞくるに非ず、即聞の時即聞の外に残る一法あるべからず、又真箇に傍觀と云ふべくは即聞の時は即聞を傍觀とし、語話の時は語話を傍觀とすべきなり、即聞と談する時語話をさりて、一邊の那裡に存取せるに非ず、語話の時即聞したしく語話の眼晴裡に藏身して、即聞霹靂するに非ず、霹靂字、書中往往有_レ之、響聞ゆる義に用ゆ。

開蒙に在ても我に在ても語話時不聞、語話時即聞と、語も聞もなき有語無語、聞不聞を回互して示し玉

ふ、故に語話時不聞なる道理の上に語話即聞を體得する道理もあるなり、この故に待我不語話時即聞なり、猶不聞の道理もあるべし、聞と不聞と看_二如何_一。

佛向上と云へば七佛已前はるかなることに思ふ、非_レ爾、七佛向上直に七佛の上と云ふことなり、故に七佛向上とは現前の山河大地なり、勿_レ蹉過_一。

高祖悟本大師示衆云、須知有佛向上人、時有僧問、如何是佛向上人、大師云、非佛、雲門云、名不得狀不得、所以言非、保福云、佛非、法眼云、方便呼爲佛、おほよそ佛祖の向上に佛祖なるは、高祖洞山なり、そのゆるは、餘外の佛面祖面おほしといへども、いまだ佛向上の道は、夢也未見なり、德山臨濟等には、爲説すとも承當すべからず、巖頭雪峰等は、粉碎其身すとも、喫拳すべからず

【開解】 非佛……この非字は是非に對するの非で無い、非心非佛非定相の非なり○雲門云……三十二相とも八十瑞好、三身とも名がつかぬ○保福云……三身の佛でも今は非なり、そでない○法眼云……すめたり、已下三四行は餘師の高祖に不_レ及を述ぶ。

【私記】 とは、非佛は、師の提唱あり「雲門の名不得狀不得所以言非は、非字を註釋したるにはあらざるなり、直に向上人を遷得するなり」保福の佛非といはれたも、佛も非もともに向上人の面孔なり「法眼の方便呼爲佛も、ほかに立つての、うはさにてはなし、餘はしるべし」

【御抄】 初は佛向上事とあり、今は佛向上人とあり、實にも佛向上の上に、佛向上人と云事あるべし、

△辨、那、見
下在字アリ
△那、德山臨
濟等には、巖
頭雪峰等はノ
句ナシ
△辨、には下
割云、此七字
妄通也
△辨、は下割
云、此六字妄
通也

此答に非佛と被仰、是は此人を嫌て非人と被仰歟と、此非は覺えたれども、佛向上の上の非、なにとしてか是非の非に混すべき、即心是佛の上の、非心非佛非定相佛の非なるべし、此大師の詞を後に、雲門保福法眼等、隨詞被下語、文に聞たり、非佛は猶凡見にもまがひぬべし、保福の詞に佛非とあり、是は是非の非にあらざる分、分明也、又方便を呼て爲佛とあれば、實事に對したる方便かと聞ゆ非爾、佛向上の方便也、助法にあらざるべし、其已下は大師を讚嘆御詞也。

【辨註】 辨曰、餘外の佛面祖面とは他の經師論師の類、又は汝分上を指すなり、德山臨濟等には巖頭雪峰等はの十三字、決定後世無眼子の妄加ならん、立洞濟稱已來兩家瞎禿子、互長宗我無明、故老僧常傷之而已、近閱防州瑠璃光寺、謄本則無斯文、老僧辨別果然符合矣。

【那一寶】 餘外の佛面祖面とは他の經師論師の類、又は汝分上を指すなり、三阿僧祇百大劫の修證のみにては證究すべからずとは、佛向上人は不墮功勳邊故なり、玄路の參學とは空王那畔の事なり、○夢也未見在なりの下に、德山臨濟等には、又巖頭雪峰等はの十三字妄加する本あり、是長宗我無明の做なり、影室本文、永正寺宗吾本、瑠璃光寺等の謄本にも斯文なし。

高祖道の體得佛向上事方有些子語話分、および須知有佛向上人等をば、たゞ一二三四五の三阿僧祇百大劫の修證のみにては、證究すべからず、まさに玄路の參學あるものその分ありぬべし、すべからく佛向上人ありとしるべし、いはゆるは弄精魂の活計なり、しかありといへども古佛を舉してしり、拳頭を舉起してしる、すでに恁麼見得するがときは、有佛向上人をしり無佛向上

り、清本作
△辨、那、佛
下割云、垂示
△辨、那、り
下割云、自己
△辨、那、摩
下割云、ノ道

人をしる、而今の示衆は、佛向上人となるべしとは、あらず、佛向上人と相見すべしとにあらざ、ただしばらく佛向上人ありとしるべしとなり、この關梶子を使得するがときは、まさに有佛向上人を不知するなり、無佛向上人を不知するなり、その佛向上人、これ非佛なり、いかならんか非佛と疑著せられんとき、思量すべし、佛より以前なるゆるゑに非佛といはず、佛よりのちなゆるゑに非佛といはず、佛をこゆるゆるゑに非佛なるにあらず、ただひとへに佛向上なるゆるゑに非佛なり、その非佛といふは、脱落佛面目なるゆるゑにいふ、脱落佛身心なるゆるゑにいふ

【聞解】 玄路の向上の玄路に參學ある者がこの佛向上を知るに分あり○いはゆる……佛向上人あることを知るべしとは洞山大師の人の爲に精魂を弄し、骨折り親切な活計じやから聞くべししるべしと也○古佛……牆壁瓦礫を舉して佛向上の人を知るべし○又人々手前の活拳頭を舉して知るべし○恁麼に古佛や拳頭を舉して知るべし如きは、一通り世俗諦に向ひて佛向人有ることを知る、正義諦によりては佛向上人無きことを知る、これ眞俗俱に向上人は有るなり般若に此意を説けり、我由世俗有得菩提不由正義、これ世俗では菩提有ることを知り、正義では知無ことを、兩方に菩提を知ることあるなり、三世諸佛不知有、狸奴白牯却て知有と云ふはこのこと、有無ともに佛向上人とはあれども、其の中に様子あり、坐觀究理すべし○佛向上人になるといへば手前が佛向上人でない、佛になると

運テ
△辨、那、今
下割云、大師
清本無にはノ
は
△那、す下割
云、修而不
對
△那、らす下
割云、不可
求外
△那、く下割
云、自爾トシ
テ
△那、り下割
云、不知是誰
△辨、なり下
割云、上ニ向
上人有無ヲ云
ソノ向上ノ人
ハ非佛ナリ
△辨、那、と
下割云、爾ガ
△辨、那、量
下割云、工夫
△辨、り下割
云、意ハ佛地

ニ在テ然モ無
所住ナル故ニ
下云

云へは衆生で佛ではない○相見と云ふも二つになる○關候子……この佛向上人ありと知る關候子錠ま
ひを使ふ人は○有佛の有佛向上人、不知、又無きことをも知らず、知不知有無を離れた堺なり、其人
は非佛なりこれが佛向上人なり○いかならんか非佛と疑著する時より思量して見よ○佛より已前で無
く、佛より以後でなければ、前後際斷なり、佛を超ゆるなれば中、其中でも無い、これで初中後を超
えて仕まふた、其人は佛面目も佛身心も脱落し、一つも似たものがない、なにも知れぬ。

【私記】 とは 弄精魂とは、佛向上人を、きもたましひにつくるなり、弄は自由にとりまはすなり
古佛を擧げてしり、拳頭を擧げてしるとは、影室いはく、此古佛拳頭知の道理、又佛向上事なるべ
しと、是なり、有佛無佛向上人なるをもて、有佛向上人をしり、無佛向上人をしるといへり相見も、
示衆も、須知有佛向上人に藏集するがゆゑに、ただしばらく佛向上人ありとしるべしといへり、ただ
しるのみにあらずまた不知するなり、前後是非をはずれて、佛向上なるゆゑに非佛なる道理を會得す
べし、佛向上面目なるをもて、佛面目佛身心を脱するなり

【御抄】 是は如文、大師御詞を、返々被讀嘆なり、玄路とは祖門の參學の事也。

是は高祖の須知有佛向上人の詞を重複擧也、佛向上の上人に人と云事あるべしと可知と也、又此弄精魂
の活計也とは、大師の弄精魂なるべし、乃至大師の弄精魂にてもあるべき也、古佛を擧げてしり、拳
頭を擧げてしるとは、此古佛拳頭知の道理、又佛向上事なるべし、此上には有佛向上人をしり(是は
詞なり)無佛向上人をしり(是は先師の
御詞なり)有は本の詞、無は先師の被釋御詞なり、實有佛向上人の上には、無
佛向上人の道理、尤あるべきなり。

如文、佛向上の外に又人ありて、後になるべしと云べきにあらず、佛向上の外に別人ありて、相見す

と云べからず、只佛向上人有としるべき道理なり。

關候子を使得するとき、有佛向上人を不知すと云道理あるべき也、佛向上の上の有無不知あるべき
理を被明也、此佛向上人を非佛と云べきと也、如此なればこそ、佛法の關候子とは云はるべけれ。

所詮造作の義をはなれたる、解脱の上佛向上の非佛如此いはるべき也。

如文、又如前云。

【辨註】 辨曰、此書に往々弄精魂と云は師家爲人の作略を云なり、上件の所謂は皆是匠師爲人の弄精
魂なり、言句下に死却することなけれ。

辨曰、人々誰是佛向上人なる識取せよとなり、此語不可錯解、佛向上人となるべしとはあらず、
自爾として佛向上人あり、不知是誰ぞ。

辨曰、前は自己の拳頭を擧げて佛向上人の有ることを知り、又佛向上人なきことを知る、今は其向
上の關候子を使得する底は佛向上人あることをしらす、佛向上人なきことをしらす、其佛向
上人これ非佛なりと次下の文にかゝるなり、然れば洞山古佛の意旨を見得するに、向上人の有と無と
をしる、其上にて此道理を使用し得るが如きは向上人の有無を知ることを要せず、不知するなり。

【那一寶】 弄精魂と云は師家爲人の作略を云ふ、上件の所謂は皆是匠師家爲人の弄精魂なり、言句下
に死却すること勿れ。

古佛とは遠く指すべからず、拳頭と交參すべし、佛向上人となるべしとに非ずとは、修行して到るに
非ず、佛向上人と相見すべしとに非ずとは、外に不可求、只且佛向上人ありとしるべし、人人誰是
佛向上人なる識取せよ、莫二蹉過一と。

前は自己の拳頭を舉起して佛向上人のあることを知り、又佛向上人なきことを知る、今は其向上の關
樞子を無礙に使得する底は佛向上人あることをも不_レ知、佛向上人なきことをも不_レ知、其佛向上人こ
れ非佛なりと次下の文にかゝるなり、然れば洞山古佛の意旨を見得するに向上人の有と無とを知る、
其上にて此道理を使用し得るが如きは、向上人の有無を知ることとを要せず、不知するなり。
佛向上なる故に非佛とは佛地に在て、しかも無所住なり、脱落とは佛前佛後、超佛等の思慮卜度を脱
落して、人人不可思議、無邊際之佛面目なり、佛身心なるなり。

東京淨因枯木禪師詞美尊 諱法成示衆云、知_レ有_レ佛祖向上事、方有_レ說話分、諸禪德且道、
那箇是佛祖向上事、有箇人家兒子、六根不具、七識不全、是大闡提無佛種性、
逢_レ佛殺_レ佛、逢_レ祖殺_レ祖、天堂收_レ不得、地獄攝_レ無門、大衆還識_レ此人、麼、良久曰、
對面不_レ仙陀、睡多饒_レ寐語。いはゆる六根不具といふは、眼睛被人換却木榿子
了也、鼻孔被人換却竹筒了也、鬪體被人借作屎杓了也、作麼生是換却底道理、
このゆるに六根不具なり、不具六根なるがゆるに、爐韜裏を透過して金佛と
なれり、大海裏を透過して泥佛となれり、火焰裏を透過して木佛となれり

【聞解】 東京……有箇人家兒子は譬喩なり、六根不具は能見所見無きを明す、能見の人が立たねば所
見の境はおのづからと混する也○七識……六識は、常に知る處、七識は傳奏識と云つて、六識は識の關
を往來して告げる故に、染汚意を云ふなり、今七識不全なれば、能知所知が無い○闡提……二種あり、一

△那、語下割
云、出_レ續傳燈
十二師章、
△辨、那、の
下割云、換却
△辨、り下割
云、換却_レ處
參學ノ要旨ナ
リ出_レ子會元
十四雲寶閣卷
傳

は善根を燒盡して佛種子を斷ず、これは悪い方なり、一は憐_レ愍_レ衆生、盡_レ衆生界、一切衆生涅槃に入らず
ば我亦不_レ入_レ涅槃、三途六道を居處として、菩提涅槃を求めず、佛見法見を混じた大闡提なり、今の觀
音地藏の境界是なり、今こゝに用ゆるものは、佛見法見の無きを取るなり○逢佛殺佛は佛見法見なきな
り○天堂……不思議なるゆるに天堂にも不收惡也、非思量で不_レ入_レ地獄、破戒比丘不_レ入_レ地獄、とはこ
ゝから云ふ○對面……此人は逢て見ても、すきと利根めかぬ智慧を超えた境界、たゞ睡多……夢中に夢
を説いてねごとが多い、衆生界が盡きぬ間はねむりはさめぬ○眼睛被人……木榿子と、とりかへ、能見
所見が無い、鼻も一法の鯁べきなし○鬪體の頂骨を借して小便杓となす、全體用に立つた境界○作麼生
どう取り換へたものじやと返照すべしとなり○ゆるに六根不具の六根不具と云けれども無理に取り換
へぬ、本より不具なるゆるに、不具六根とは打反して、脱落の身心と云ふと同じ、爐韜……たゞら透過
ぬけてしまつて金佛となる、大海を透り一微塵もなくなりて泥佛となりぬ、全身燒切て木佛となる。

【私記】 とは 人家兒子になんの面目がある、不具なり、不全なり、換却は、諸法眼睛鼻孔なり、作
麼生是換却底道理とは、抄語なり、也是說_レ道理なり、放過すべからず、このゆるに六根不具とは、
上の抄語をうごかすなり、不具六根なるがゆるにとは、觸處生涯隨分足なり、その觸處生涯、三佛不
渡底、眞佛屋裡坐なり

【御抄】 如此示衆者、大に耳目驚ぬべし、其故は六根不具、七識不全、是先あさましき名目共なり、次
大闡提無佛種性とあり、闡提とは永佛になるべからざる物を名、無佛種性の詞、又被驚ぬべし、逢佛
殺佛逢祖殺祖の詞以外事也、彼是驚疑怖畏しつべし、但佛向上事の上の示衆、今更非可驚、隨六根不
具と云は、盡十方界沙門一隻眼なれば、能見所見なき所、六根不具なるべし、又一眼の法界をつくす

時、餘の五根なき所をも不具とも可云歟、此不具更非德失義、七識又以同前能知所知なき所、しばらく七識不全と云はるべし、佛向上事を以て、大闡提無佛種性と談、豈何をか怖畏すべき、逢佛殺佛、此殺の詞坐禪儀の時委沙汰ありき、所詮至て親切に談、佛時殺佛と云詞はいでくるなり、佛與迦葉のあはひを云へば、迦葉の身心は佛に藏身せらるゝゆへに迦葉は殺也、然而正しく奉遇佛でこそ、吾有正法眼藏涅槃妙心附屬摩訶大迦葉とも被仰しか、此姿を逢佛殺佛とは云はるゝ也、逢祖殺祖の理、只同かるべし、天堂收不得、地獄攝無門まことに、天堂此内に收べからず、地獄攝無門の詞ぞ、あしからず聞れども、善惡勝劣の取捨あるまじき上は勿論、識此人麼とは人家の兒子といはるゝ人事也、對面不仙陀睡多饒寐語とは、此仙陀知臣にて王の意をしりて、索鹽奉馬の臣なれども、是は猶兩人あり、是は非其義、對面すれば仙陀はなき也一法究盡の道理のゆへなり、睡多饒寐語とは、ねぶりの中には又語もあるまじき道理なれども、寐語ありと云ふ。

是は古き詞共なり、所詮心得られぬ詞多、くたくたとあるやうなれども、眼はあれども不見也、木椶子に取かへたるゆへに、木椶子物を見事不能、鼻孔又同、觸體被人借作屎杓了也なむと云、是又不被心得様なれども、古き詞を被取出上、眼も、鼻も、觸體も、あれども徒事なる事に、被引出也、是則六根不具の道理なり、又作麼生是換却底の道理と云詞、例事也、いかなる道理なるとも難定、又いかなる道理にてもある所が如此いはるゝ也、六根不具と云へば猶舊見もさし出ぬべし、不具の六根と云へば、はるかに解脱の詞にきこゆる也。

是は皆解脱したる心地也、金佛と云も鐘籠裏のなす所なり、泥佛も水をはなるべきにあらず、木佛又火焰裏にはまぬがるべからず、彼等を透過して金佛とも泥佛とも木佛とも可談也と云也。

【辨註】 辨曰、此透過二字參學眼目なり、金泥木三佛、爲什麼、爐鑪大海火焰の三處を透過して、依然として金泥木の三佛なるや、圓悟所謂泥佛若渡、水則爛却了也、金佛若渡、爐則鎔却了也、木佛若渡、火則燒却了也、有什麼難會、且三處を透過し渡過して、方始可得、這裡有什麼難會語、爲什麼、點眼藥なり、三處に爛却せられ、鎔却せられ、燒却せられて、六根不具七識不全の時は、喚爲什麼、佛、諸人者各自證據せよ。

【那一實】 換却底の道理參學の要旨なり、前に所謂佛向上人を不知するなり、無佛向上人を不知するなり、一切の諸見を離れて無作無功用瞌睡底の鈍漢なり、故に對面不仙陀、睡多饒寐語、此鈍漢不具六根なる故に爐籠裏を透過して金佛となれり、大海裏を透過して泥佛となれり、火焰裏を透過して木佛となれりと、是古佛趙州道底を翻轉して、無礙自在の妙談なり、金泥木の三佛爲什麼、三處を透過して依然として金泥木の三佛なるや、圓悟所謂泥佛若渡、水則爛却了也、金佛若渡、爐則鎔却了也、木佛若渡、火則燒却了也、有什麼難會、這裡有什麼難會、語爲什麼、點眼藥なり、且く二師の説話を會通せば佛向上人なるべし、三處に爛却せられ、鎔却せられ、燒却せられて、六根不具七識不全の時、喚爲什麼、諸人者各自證據、〇換却事出會元十四雪竇開庵傳、三佛詳碧巖集評。

七識不全といふは、破木杓なり、殺佛すといへども逢佛す、逢佛せるゆゑに殺佛す、天堂にいらんと擬すれば、天堂すなはち崩壞す、地獄にむかへば、地獄たちまちに破裂す、このゆゑに對面すれば破顔す、さらに仙陀なし、睡多なるにもなほ寐語おほし、しるべしこの道理は、舉山市地兩知己、玉石全

△辨、那、リ
下割云、非、功
動邊事
△辨、那、す
下割云、況又
△辨、那、す
F割云、天堂

身百雜碎なり、枯木禪師の示衆、しづかに參究功夫すべし、卒爾にすることなかれ

地獄獲取不得
ナリ
△辨、那、す
下割云、トイ
ヘドモ
△辨、那、陀
割云、ノ伶俐
氣△那、云、
ノ伶俐知見解
△辨、ほ下割
云、分疎不下

△辨、己下割
云、アラバ
全清本作金
△辨、碎下割
云、シテモ當
リ離カルベシ
玉石ノ全身ト
ハ只是人々所
愛ノ堅固身ヲ
云ン爲ナリ

【問解】 破木杓……無用處を云ふ○逢佛……殺佛と逢佛と同じ坐佛が即殺佛と云も同じ、殺すと云ふて能見の佛が立たぬ○天堂……前にあると同意なり○寐語多も前に出ると同意○舉山……この二句出處未詳、舉皆也、山河大地みなこの人知己で第二人ない境界也、玉石のよいものも百に碎いて全身塵一本も残らぬ、通身無影像、全身無皮骨と、洞山大師の語もこのこと。

【私記】 とは、これ不全の面目なり、不全は、不器なれば、破木杓なり、殺と逢とは、親切を談するなり。對面すれば破顔す、粘華顔となりされり、寐語のほか睡多なきなり、還我碎片來。

【御抄】 破木杓とは、解脱の詞に仕なり。此道理の上には天堂あるべからず、地獄あるべからざるゆへに、崩壊すとも破裂すとも云也、もとよりなき道理を崩壊破裂と仕なり、此理對面すれば、仙陀なしと云はる、睡多なるにも、寐語多しと云はる、也。

是は山をば山がしり、地は地がしると云心なり、又玉石の全身なる姿を、百雜碎とは云也、玉石獨立の姿を如此云なり。

【辨註】 辨曰、尋常破落戸の禿子、叢林の口癖に殺佛殺祖と云ふ、然ども不逢佛不逢祖して争か殺すことを得ん、是謂無的妄談、故に逢佛の故に殺佛すとの玉ふ。

【那一寶】 尋常破落戸底、叢林の口癖に殺佛殺祖と云ふ、然ども不逢佛不逢祖して、争か殺すことを得ん、謂是無的妄談、故に佛の故に逢殺佛すと云ふ。

舉山巾地、衲僧の知己全自己にして遍界不藏なる、玉石堅固の法身なりといへども、更に百雜碎し脱落盡して快活なるも、睡裡の轉法輪、是寐語現前の佛向上人と云なり。

雲居山弘覺大師、參高祖洞山、山問、闍黎名什麼、雲居曰、道膺、高祖又問向上更道、雲居曰、向上道即不名道膺、洞山道、吾在雲巖時祇對無異也、いま師資の道、かならず審細にすべし、いはゆる向上不名道膺は、道膺の向上なり、適來の道膺に向上の不名道膺あることを參學すべし、向上不名道膺の道理現成するよりこのかた、眞箇道膺なり、しかあれども向上にも道膺なるべしといふことなかれ、たとひ高祖道の向上更道をきかんととき、領話を呈するに向上更名道膺と道著すとも、すなはち向上道なるべし、なにとしてかしかいふ、いはく道膺たちまちに頂顛に跳入して藏身するなり、藏身とすいへども、露影なり

【問解】 雲居山……不名道膺とは、道膺が其儘向上じやと云ふ上にある、七佛已前に非ずと同意○適來……道膺に道膺なるものなし、不名なる處ある、病者には、必有不病者、道理なり○不名の道膺が現成してより、眞箇そで無い道膺じやと云て又○向上にもをなじ道膺で面は替らぬと云ふな、向上には不名道膺、○名道膺と道著すとも向上に名は無いなせには○頂顛道膺が忽頂顛向上に藏身

△抄、也下割
云、コタヘシ
コトコトナル
コトナシトナ
リ
△辨、那、道
下割云、取
△辨、那、上
下割云、ニ道
膺ト名クルナ
キ
△辨、那、箇
下割云、是今
日ノ
△那、に下割
云、道膺ノ
△辨、那、て
下割云、曠劫
無名蓋ニ
△辨、り下割
云、然モ如シ是
△那、割云、
不名ニ道膺

して道膺なるものが見へぬ、佛が菩提に藏身して菩提と佛と二つ無い○露影なりかくる」と云こと
があれば、もうあらはる。

【私記】とは、影室いはく、假令向上の義を二度いへなむどいはむほどのことなり、其時向上には
ば即不名道膺とあり」と是なり、適來の道膺に向上の不名道膺ありとは、適來道著せる道膺、すなは
ちこれ向上不名道膺となり、適來の道膺の上に一枚の向上不名道膺をかさねたるにはあらざるなり、
ゆへに現成するよりこのかた真箇道膺なりといへり、これ向上の一口吞盡なり、ここをもて向上にも
道膺なるべしといふことなれといへり、道膺の没蹤迹するべし、真箇道膺しるべし、道膺たちまち
に頂額に跳入して藏身するとは、これ道膺が道膺かくれをしたなり、明月藏驚なり、諸法のありつづ
れなり、藏身露影響」

【御抄】此問答審細すべし、閑黎名什麼の詞、只普通にも師資のあはひ、争始て名字の不審あるべき、
實にも此閑黎の名なにとあるべきぞ、佛性なるべきか、法性なるべきか、三昧だらになるべきか、真
如實相なるべきかゆへに、閑黎什麼と云はるゝか、是什麼物恁麼來の詞の理是なり、これ道膺と無風
情名字を被答、是又いかなるべきぞ、此答には有佛性とこたへ、無佛性とこたへ或實相真如と答へ、
すこしも今の道膺と被答たるに、不可相違、只尋常に人の名字は何と尋に、某となのりたるなむと卒
爾に不可心得事也、こゝに高祖又向上に更道とあれば、此上に猶深き義もあるべきを、前の答は不及、
重猶上の義を云へと被仰たるやうに聞ゆ非爾、只假令向上の義を二度云へなむと云はむ程の事也、其
時向上にはば即不名道膺とあり、只初は我はなに物ぞと被尋は、凡夫の問答重向上に云へと被仰に
付て不名道膺と被仰、是こそ法文なれと被心得ぬべし非爾、道膺の上の不名道膺の道理なるべし、全

非徳失義、祇對無異也の詞は、被印可詞なるべし。

是は如前云、不名道膺の詞は、道膺の向上也、適來の道膺には不名道膺の道理ある也と云なり。
如文、此不名道膺の理を會する時、まことの道膺也と云也、所詮只問に付て、我名字を被答なむと許
心得、非真箇道膺べし、今向上の道膺を指て真箇の道膺とは可云也、然而向上にも道膺なるべしと云
事なかれとは、本の詞をはたらかさで、置む料なり、本の詞には、向上道には不名道膺とある所を向
上にも道膺なるべしと云ことなれとあるなり。

是は前に高祖の向上更道と云に付て、不名道膺とありつる詞を不名の詞を略して、只名道膺と道著す
とも、此詞向上道なるべしと云也、是則道膺とありつるにあしき詞、向上不名道膺の詞こそ、よけれ
と可心得所を、道膺も不名道膺も皆共に向上道なるべしと云也、會不會見佛不見佛の理なるべし。
是は道膺の道膺の頂額に跳入して藏身する也と云なり、道膺と不名道膺とのあはひが如此云はるべき
也、たとへば釋尊與迦葉の間だを云ふに、釋尊に迦葉の藏身すと云べきか、迦葉の釋尊に藏身すと云
べきか、所落居の道理は釋尊は釋尊に藏身し、迦葉の迦葉に藏身する理也、かく藏身すとは云へとも、
かくれうすべきにあらず、彌釋尊も迦葉も露影する道理なるべき也。

【辨註】辨曰、爲什麼恁麼、道膺且置、三世諸佛歷代祖師、大地衆生莫非盡是幻化影像、佛向上
人亦復爾。

【那一實】道膺の向上なりとは道膺より一等向上と云に非ず、直に道膺の上と云意なり、故に適來道
膺と答る上に、直に不名道膺あることを參學すべし、真箇道膺なりとは、不名道膺の道理現成すると
き、真箇是今日の道膺底一毛不損なり、所謂認得眼橫鼻直なり、然れども向上にも道膺なるべしと

原本同ヲ聞ニ
作ル

ト
△辨、那、も
下割云、ナホ
△那、影下割
云、更名道
膺

云ことなかれ、向上の宗旨あることを知べし、高祖道の向上更道をきかんとし、領話を呈するに、向上更名道膺と道著すとも向上道なるべしとは是則道膺と答る詞はあしく、向上不名道膺の詞はよしと可心得所を、道膺も不名道膺も、真箇通處あれば、皆共に向上道取なるべしとなり、此爲甚如是なるや、頂顛に藏身して猶露影なり、道膺且置三世諸佛歴代祖師、大地衆生莫非盡是幻化影像、佛向上人亦復爾。

曹山本寂禪師、參高祖洞山、山問闍黎名什麼、曹山曰本寂、高祖云、向上更道、曹山曰、不道、高祖云、爲甚麼不道、師曰、不名本寂、高祖然之、いはく向上に道なきにあらず、これ不道なり、爲甚麼不道、いはゆる不名本寂なり、しかあれば向上の道は不道なり、向上の不道は不名なり、不名の本寂は、向上の道なり、このゆるるに本寂不名なり、しかあれば非本寂あり、脱落の不名あり、脱落の本寂あり

△辨、道下割云、取
△辨、那、す下割云、向上ノ道取ハ
△辨、向上の不道はチ不道の道はニ作ル
△辨、リ下割云、此九字異本ニ向上の不道は不名なりノ十字ニ作ル不可ナリ

【聞解】 いはゆる向上に道取なきにあらず不道なり、不語話未正語なり、道取ないでは無い、生也不道死也不道と云同意なり、いはぬと云ふでない○不名本寂で、名狀が無いから不道取なり、しかれば向上の道取は不道取なり、不道の道取は、不名本寂也○不名本寂と云ふは、無生無滅無染無著の道理で、本來空寂にして、名がつかぬ、しかあれば非本寂、喚でなんとなさぬ、名が無ければ、什麼物恣麼來なり、この不名の處を那邊で脱洒洒落して、不名なる境界あり、這邊では脱落身心なる本寂あり、これ那邊では不名、這邊では本寂と名がつく。

【私記】 とは 爲甚麼不道、不名本寂、いはゆる向上道なり、不道も不名も、みな向上道なり、不道の道とは、なほ向上の道といはんがごとし」本寂不名なりとは、本寂の藏身するなり、あに非本寂あらざらんや」脱落は向上なり」

【御抄】 是は前の洞山與道膺問答に、聊も不違なり、只詞の面の聊違たる許也、不道の詞の交たると云、不道の詞に付て、爲甚麼不道と云詞の相交許也、但此詞交たればとて、其理更不可違事也、凡は向上に尤不道の理あるべし、只云べき事を云はずして、不道なるに非ず又就之高祖の爲甚麼不道の詞も、不審の義にあらず、向上の不道爲甚麼の道理なるべし、付此詞不名本寂とあり、此不名某の道理、前に委注了、就之高祖被許可歟。

向上の道は不道也と云なり。如文、不道と不名と只同理なり、只不名本寂といへば、猶本寂を置て不名の詞を、きせたるやうにも聞ぬべきに、不名の本寂との、字を被加ぬれば、不名か本寂なる道理あきらかに聞ゆる也、是即向上道なるべし、このゆへに本寂不名とあれば、彌不名與本寂取放たるべき物にあらず、又非本寂と云、此非は是非の理、今更こゝに非可出現、非定相佛とも云ひ、非量とも云しが如し、此草子の上に保福の詞に、佛非なひと云程の非なるべし。

【那一寶】 不名の本寂とは、不名が本寂なる道理、本寂不名とは、不名と本寂と二致あることなし、然れば本寂非本寂、脱落不名脱落本寂ありとも云べし、前章の非佛佛非と云が如し。

盤山寶積禪師云、向上一路、千聖不傳、いはくの向上一路は、ひとり盤山の

道なり、向上事といはず、向上人といはず、向上一路といふなり、その宗旨は、千聖競頭して出来すといへども、向上一路は不傳なり、不傳といふは、千聖は不傳の分を保護するなり、かくのごとくも學すべし、さらにまたいふべきところあり、いはゆる千聖千賢はなきにあらず、たとひ賢聖なりとも、向上一路は、賢聖の境界にあらず

【問解】 盤山……ひとり盤山道なりとはひとり盤山斗りじやと云ふこと○向上一路は不傳なり、釋迦は憍、迦葉は富で、傳ることのならぬものなり○不傳の分とは不傳の分限分位をあたりまへを保任して居る○さらにまたいふ……向上一路は十聖三賢の境界にあらず。

【私記】 とは 不傳の分を保護するとは、不傳の宗となり去て蹤迹なほのこらざるなり「保護とは、わがものにするをいふ、餘はしるべし」

【御抄】 向上の一路の兩字を被付、是は寶積禪師の詞より出たりと云也、已下如文。

千聖競頭して出来すと云へどもとは、いく千萬の禪師出来すと云へども、向上には不傳なるべしと也、千聖不傳の分を保護すと也、如此も學すべしとは、かゝる義一あるべしと也。

前に云、義一又こゝには、千聖千賢たとひありとも、たとひ賢聖也とも、向上一路は賢聖の境界に非と云義もあるべし。

【辨註】 辨曰、所謂向上一路叢林に錯解して、別に向上の路ありと云、楞嚴の十方薄伽梵一路涅槃門と云も別路と思へり、人々向上不傳の一路、生佛道同是則十方薄伽梵の一路なり、教外別傳と云も本より傳ることなくして人々別傳なり、傳は他より不傳ことを知る、是謂不傳之傳、不可錯解。

【那一寶】 千聖の境界自ら不傳なるを保護と云ふ、これ本行道なり、又賢聖の境界は賢聖の境界にあらざる故に、向上の一路なり、所謂向上一路と云へば錯解して別に向上の路ありと云ふ、楞嚴の十方薄伽梵一路涅槃門と云も別路と思へり、人々向上不傳の一路、生佛道同是則十方薄伽梵の一路なり、教外別傳と云も本より傳ることなくして人々別傳なり、傳は他より不傳ことを知る、謂不傳之傳、不可錯解。

智門山光祚禪師、因僧問、如何是佛向上事、師云、拄杖頭上挑日月、いはく、拄杖の日月に聖礙せらるる、これ佛向上事なり、日月の拄杖を參學するるとき、盡乾坤くらし、これ佛向上事なり、日月これ拄杖とにあらず、拄杖頭上は全拄杖なり

【問解】 智門……拄杖日面はひる、月面は夜、明暗に拄杖頭上に挑ぐこれ向上事なり○盡乾坤がくらしとは拄杖子吞乾坤一時日月のあとなく、諸相非相暗昏々なり、これ向上事なり○日月が其儘拄杖ではない、一本の拄杖全體の處、天地乾坤を明ともなし暗ともなす。

【私記】 とは 拄杖の日月に聖礙せらるるとは、盡界不昧なるなり「日月の拄杖を參學するとき、乾坤盡くらしとは、一拄杖吞乾坤なり」くらしとは、冥會の義、無分曉なり、拄杖も日月も、佛向上事なり、ゆへに日月これ拄杖とにはあらずといへり「全拄杖上なりとは、拄杖にのこれる塵芥なきなり」

【御抄】 いはく拄杖の日月に聖礙せらるる、これ佛向上事也とは、日月與拄杖、大に違たる姿なり、

△抄、智上冠云、光祚ハ雲門ノ孫弟子、香林澄遠禪師ノ弟子ナリ
△辨、く下割云、是智門ノ答話ニイハクナリ
△那、月下割云、ヲ挑ル
△辨、那、を下割云、祖門下ニ
△辨、那、し下割云、何ソ日月所明ヲ借シ如此ナル
△辨、り下割

云、日月ノ光
影ヲ借ル所明
ノ見ナキヲ云
故ニ

△辨、那、月
下割云、ノ里
礙ヲ借ル

△辨、と下割
云、イフ

△辨、那、上
下と字アリ、
其下割云、云

清本全拄杖下
有ニ上字

△辨、那、杖
下、上字アリ

所詮佛向上の拄杖、日月に罣礙せらるるとは、日月と談せむ時は、拄杖、日月に罣礙してかくるべき歎、只黒く圓なるもの、上に、今の日月のかけやきてあるにはあらず、拄杖に又日月の罣礙せられむ時、如前なるべし、佛祖佛向上の拄杖、日月能々可思慮事也。

日月の拄杖を參學するとは、此日月與拄杖一物なる上は、日月の拄杖を參學せむとき拄杖頭上挑日月と本の詞あれば、日月これ拄杖とは云はじと云心地也、さればとて始終非可各別。是は日月をして拄杖也と云にもあらず、只拄杖頭上とは全拄杖の道理なり。

【辨註】 辨曰、人々一箇の拄杖子を著得する時、拄杖頭上に高く日月を挑が如く、日月に罣礙せられて八面玲瓏なる、是佛向上事なり。

辨曰、全とは拄杖は全く是拄杖子なり、日月の所明をからず、人々日用の拄杖、東西南北途路に力を得て自在、然亦到這裡ニ不肩住、若僅住ニ這裡ニ則第二頭邊に落在す、尙又佛向上事にあらず、第二頭の事は出ニ于大論、人身は一頭兩手なるに、二頭三手あるは非本人形と云義也、こゝも無可住、僅も住在するは非本住處之謂也、往々第二第三の次序義に解するは妄解なり、智門の答話、元古佛の意旨に契はぬと見へたり。

【那一寶】 智門の答話の意は人々一箇の拄杖子を識得するとき、拄杖頭上に高日月を挑るが如く、日月に罣礙せられて八面玲瓏なる、是佛向上の事なり。

全とは無欠無餘なる全拄杖子なり、日月の所明をからず、人々日用の拄杖、東西南北途路に力を得て、自在然亦到這裡ニ不肩住、若僅住ニ這裡ニ則二頭三手本形に非ず、佛向上事にあらざるなり二頭非本形之事出ニ于大論私按、智門答話不契古佛意旨と見へたり。

清本也、下無
無字

△辨、那、堪
下割云、ノミ

石頭無際大師の會に、天皇寺の道悟禪師とふ、如何是佛法大意、師云、不得不知、道悟曰、向上更有轉處也無、師云、長空不礙白雲飛、いはく石頭は曹谿の二世なり、天皇寺の道悟和尚は、藥山の師弟なり、あるときとふ、いかならんか佛法大意、この問は、初心晩學の所堪にあらざるなり、大意をきかば大意を會取しつべき時節にいふなり

【開解】 石頭……大意云は、佛出生の本懷祖師西來の的旨いかんと問ふなりこれ初心の堪へしとげる處でない○大意をきくは、大意を會すべき時節で無ければ聞せぬ、一と通りではきけぬ。

【私記】 とは 佛法大意の問、初心の間に相似すれども、しかにはあらざる道理を示さるるなり

【御抄】 問答詞見于文、佛法の大意を問する、初心晩學の詞に似たれども、石頭與道悟問答、實に初心にあらざるべし、ゆへに初心晩學の可堪に非也とは云也。

石頭いはく、不得不知、しるべし佛法は初一念にも大意あり、究竟位にも大意あり、その大意は不得なり、發心修行取證はなきにあらず、不得なり、その大意は不知なり、修證は無にあらず、修證は有にあらず、不知なり、不得なり、またその大意は、不得不知なり、聖諦修證なきにあらず、不得不知なり、聖諦修證あるにあらず、不得不知なり

【開解】 初一念にも……初發心時便成正覺と云大意もあり○究竟位にも大意ある最初究竟に大意はあ

△辨、那、り
下割云、此四
字皆乎何者下
文云

れども、法は無所得で不得不知なり○修行證契はあれどもをんづまりは不知……大意で知でも識でもしられぬ般若は無智なり二祖は不可得達磨は不識なり○修證は無きにしもあらず、凡夫と異なり、又有に非ず二乗に異なり、異なると云は、不得不知なり」又四聖諦の修證にも有無に非ずただ有無に非ず、たゞ有無は當人のもて廻りに在るのみ○不得は所に掛り不知は能に掛る。

【私記】とは 大意の究竟究極なれば、不得不知なり、發心修行、聖諦修證、無にあらず、有にあらず、不得不知なり」

【御抄】 うべきを不得、可知をしらざるにはあらず、只佛法の道理不得不知也、文に分明也、不得不知の道理を此段には被釋也。

【辨註】 辨曰、前は不得不知を別て斷り、後は公案の文の如く不得不知を合しての玉ふ意旨あり、上には其大意は不得なり、發心修行取證はなきにあらず不得なり、其大意は不知なり、修證は無にあらず、有にあらず、不知なりとありて、次に又其大意は不得不知なり、聖諦修證なきにあらず、あるにあらず、不知不得なりと差別して解し玉ふ、且へ末には聖諦の字あれば、前とは同異あり、前に此間は初心晩學の所堪のみにあらず、大意をきかば大意を會取しつべき時節に云ふなりと、總じて叢林にて佛法大意を問は、初心晩學の所堪なりとのみ思へる、故に如是斷り玉ふ、然れば初心晩學の所堪のみにあざるなりとありて意味通暢なり、臨濟の睦州の指南によりて問が如きは初心の所問なり、今道悟の間は大意をきかば會取しつべき時節の問話なりと云ふ意ならん、故に下の不得不知の語を分辨して斷り玉ふと見へたり、其旨は佛法の大意と云は什麼、心佛及衆生是三無差別の大意なり、故云佛法は初一念にも大意あり、究竟位にも大意あり、發心究竟無二の大意なり、其大意は初心晩學底は多く

は不得なり、然れども發心し修行して取證の道理なきにあらず、先は不得なり、故に其大意は不知なりと修證も有無差別の論にあらず、不知なりと上に辨する如く、茲に不得の字あるは衍ならん、次に又其大意はと又の字を加へて揀別あるは今道悟の問話の如き、其大意は不得不知なりと讀で可なり、第一義聖諦の修證有無にあらず、不染汚なること不得不知なり、南嶽の曹谿に相見の様子なり、這箇大意人々不得不知、是道悟底事なり。

【那一寶】 前には不得不知を分て斷り、後には如公案、不得不知を合しての玉ふ意旨あり、且へ末には聖諦の字あれば前とは同中異あり、前に此間は初心晩學の所堪にあらず、大意をきかば大意を會取しつべき時節に云ふなりと、總じて叢林にて佛法大意を問は初心晩學の所堪なりとのみ思へる、故に如是斷り玉ふ然れば初心晩學の所堪のみにあざるなりとありて意味通暢なり、臨濟の睦州の指南によりて問が如きは初心の所問なり、今道悟の間は大意をきかば會取しつべき時節の問話なりと云意ならん、故に下の不得不知の語を今辨じて斷り玉ふと見へたり、其旨は佛法の大意と云は什麼、心佛及衆生是三無差別の大意なり、故に云、佛法は初一念にも大意あり、究竟位にも大意あり、發心究竟無二の大意なり、其大意は初心晩學底は多くは不得なり、次に又發心修行聖諦修證廣く説玉ふといへども不得不知、只是一意是道悟底事、不得不知前後分て見る時不知なりの下不得なりの四字衍ならんか、有轉處一也、無不坐在這裡一は轉處現成なり、轉處は方便門なり、諸佛諸祖分上にして得ることなり、是又對機の方便と見るべからず、諸佛諸祖の方便とするなり。

道吾いはく、向上更有轉處也無、いはゆるは轉處もし現成することあらば、

清本也、下無無之字

向上現成す轉處といふは、方便なり、方便といふは、諸佛なり、諸祖なり、これを道取するに更有なるべし、たとひ更有なりとも更無をもらすべしにあらず、道取あるべし

△辨、那、る
下割云、於茲
△辨、那、ば
下割云、佛
△辨、那、上
下割云、事
△辨、那、れ
下割云、此道
理

【聞解】道吾のいはゆる……轉處といふは、本の居り處を立ちのく轉處の力量が現應すれば、向上の境界の處り處を轉ずることが現成して沒蹤迹の處にも身を藏さぬ境界になる○轉云は、足をからげて走るでない、方便なり、阿耨菩提も方便、方便が諸佛諸祖の境界、この轉處を道取するに、無なるをば更によく轉じて有ならしめ、更に有のうらは更に無をもらさず、有無を自由に轉じて有無居らぬ。【私記】とは、影室いはく、更有轉處也無の詞、やがて向上轉處なるべし、轉處の現處は、向上の現成なるべし、と轉處方便、諸佛諸祖、更有更無ともに向上の道取なれば、道取あるべしといへるなり

【御抄】是は向上の外に自是上に、又轉ずる事ありなむやと問したりと聞ゆ、更有轉處也無の詞、やがて向上の轉處なるべし、轉處の現成は向上の現成なるべし、此方便又實に對したる非方便、法眼の詞に呼方便、爲佛と云也方便也、以諸佛諸祖爲方便上は勿論事也。

此更有の詞は、問の詞とこそ聞たるを、此更有をやがて向上の轉處とすべし、又更有あらば、又更無もあるべきにあらずと云々、所詮向上の更有、向上の更無なるべしと云なり。

【辨註】辨曰、不坐_レ在這裡、方便は諸佛諸祖分上にして得ることなり。

辨曰、有無共に轉處の方便もらすべからず、無_レ可_レ取無_レ可_レ捨、古佛宗乘の眼目なり。

【那一實】要有は問の詞にあらず、向上の轉處とすべし、又有無共に轉處の方便もらすべからず、無_レ可_レ取無_レ可_レ捨、古佛宗乘の眼目なり。

長空不礙白雲飛は、石頭の道なり、長空さらに長空を不礙なり、長空これ長空飛を不礙なりといへども、さらに白雲みづから白雲を不礙なり、白雲飛不礙なり、白雲飛さらに長空飛を礙せず、佗に不礙なるは自にも不礙なり、面々の不礙を要するにはあらず、各各の不礙を存するにあらず、このゆるるに不礙なり、長空不礙白雲飛の性相を擧拈するなり、正當恁麼時、この參學眼を揚眉して、佛來をも覩見し、祖來をも相見す、自來をも相見し、佗來をも相見す、これを問一答十の道理とせり、いまいふ問一答十は、問一もその人なるべし、答十もその人なるべし。

△辨、那、道
下割云、取
△辨、り、下割
云、△那、割
云、白雲コレ
△辨、那、な
り、下割云、長
空白雲ヲ互ニ
自他ト見ルベ
シ
△辨、り、下割
云、是ハ
△辨、相、下割
云、已下之處
ノ相字觀字カ
△那、割云、
相ト觀ト意同
△辨、那、す
下割云、茲ニ
佛法ノ大意ノ
同上ノ參學ア
△辨、せり、下

【聞解】長空さらに……長空と白雲と并ばぬ、互に無心で長空更に長空を碍へぬ、空は平生飛んでどこにも居らぬ○白雲みづから……長とはり合て云ふ、白雲は白雲の手前の飛をさへぬゆるるに白雲が長空を飛ばせぬとはいはぬ、長空亦白雲ふさへで飛せぬとはいはぬ、これがどこにも居らぬ轉處なり○面々……白雲長空の手前に面々各々に不礙の境界を要求し存在して持て居るでない、持て居れば造作になる持て居らぬ故に互にさへぬ○このさへぬ處の長空の性白雲相を擧拈して、向上の轉處に左右する也○正當……この白雲長空の性相を擧し手前の揚眉開眼佛來をも覩見し、祖來をも相見して礙へ

割云、然も問一答十の伶俐的ニシテ得ルトナリ
△辨、し下割云、石頭道悟的別非他人

ぬ、佛が來ても、祖が來ても、白雲長空のありさまで礙へぬ、佛見法見が無きゆゑに、手前へ持て來て、自來に相見して己見無く、他來で相見して他相無し○これを問一答十……上の道悟……公案を括る問一答十の伶俐とす○問一も其人で其境界を得ねばならぬこと、答十はなほ其境界を得ねばならぬ相互に其の人で法が圓備したと云こと。

【私記】とは、これは石頭の道を不干舌に道取するに、かくのごとく道取あるべしとなり、長空さらに長空を不礙なりとも、長空これ長空飛を不礙なりとも、白雲にみづから白雲を不礙なりとも、いづれにも道取に違背あるまじきなり、これらみな不礙なり、ここをもて白雲飛不礙なり、白雲飛さらに長空飛を礙せずしかあるがゆゑに、自他ともに不礙なり、影室いはく、如し此いへばとて、此不礙が長空の不礙、白雲の不礙、自の不礙、他の不礙なむと、面面各各にあるべきにてなき處を、面面不礙を要するにはあらず、各各不礙を存するに非すと云なり、と「不礙らしき不礙なければ、このゆゑに不礙なりといへり、面面各各、みなこの長空不礙白雲飛の性相を擧括するなり」性相とは、なほ全體といはんほどの語づかひなり」正當恁麼時は、子丑にあらず前後にあらず、正當恁麼時なり、傍邊なき語なり」この參學眼とは、一隻眼なり」揚眉してとは、なほ豁開と云はんがごとし、揚眉この參學眼なり、觀見し、相見するるとき、佛祖自佗を超越するなり、明鏡來るとき、胡漢ともにかくる、がごとし佛祖自佗の區別ありながらみなこの參學眼を揚眉する向上の道得なるがゆゑに、これを問一答十の道理とせりといへり、この問一答十みな向上に行履を通達せるをもて、問一もその人なるべし、答十もその人なるべしといへり、觸處生涯、家破人亡」

【御抄】此詞は空に白雲が飛たる姿を、談たるやうに見たり、如此心得は無風情、凡夫迷見なり向上の所談頗如無所用、是は長空與白雲非別物、白雲飛ならば、長空も飛なるべし、長空白雲一なるゆへに、長空不礙白雲飛と云詞はいでくる也、此道理は長空さらに長空を不礙也、長空これ長空飛を不礙也と云道理なるべし、又白雲みづから白雲を不礙也ともいはるゝ也、詮は長空與白雲、各別に思習はしたる時こそ、詞の失もいでくれ、長空白雲一體なる上は、とかく談するに總非相違法也、是を向上道とするなり。

とは白雲長空親切なる道理の上には、白雲飛不礙也、白雲飛さらに長空飛を礙せずと懸いはるゝ也、此理のなかるべきには非ともとかく談するに無礙也、この自他は長空與白雲をしばらく、自他と云也、長空も不礙也、白雲も不礙なる道理を、他に不礙なるは自にも不礙也、白雲飛さらに長空飛を礙せずと懸いはるゝ也、此理のなかるべきには非ともとかく談するに無礙也、この自佗は長空與白雲をしばらく自他と云也、長空も不礙也白雲も不礙なる道理を他に不礙なるは自にも不礙也と云べき也如此云へばとて、此不礙が長空の不礙、白雲の不礙、自の不礙、他の不礙なむと面面各各にあるべきにてなき所を、面面不礙を要するにはあらず、各各不礙を存するに非と云也、只不礙なる道理なるべし。

此長空不礙白雲飛の道理を擧して、正當恁麼時この參學眼を揚眉して、佛來をも祖來をも、乃至自來他來等の詞を以之可心得合と云心なり、以此理問一答十の理とはせりと也、所詮佛向上の道理の上に無盡の詞の出來するも、是程に可心得と云也。

問一答十と云詞、問は纒に答は拔群の器と被心得ぬべし、打任は問一は答十はまさりて心得、今の問一答十は不然也、問一與答十只同かるべし、其故は問一の道理は不足にて、答十の道理が是にも超過

し、乃至理も多くは實勝劣の義もやあるべからむ、佛法自元勝劣多少にかゝはらぬ道理なるべし、其上問一の所にきわまりて、無殘所、答十もこゝに極て無闕所上は、問一答十詞只ひとしと心得也、仍問一もその人なるべし、答十もその人なるべしと云也。

【辨註】 辨曰、長空は性、白雲は相なり、然も教迹中の性相の論にはあらず、只長空白雲の上の性相體用を擧して云のみ。

【那一實】 長空と白雲と相待して不礙と云に非ず、長空白雲飛を不礙、白雲長空飛を不礙、長空白雲を不礙、白雲白雲を不礙とも云べし、又法法各各本より不礙なる故に不礙を不礙不礙存なり、性相とは且く長空は性、白雲は相なり、然も教迹中の性相の論には非ず、只長空白雲の上の性相體用を擧して云のみ。

この參學眼を揚眉してとは、上の法法不礙なる道理を佛來とも祖來とも自來とも他來とも相見するなり、たとへば佛來の時祖來を不礙、祖來の時自來他來を不礙、一法の外他法あつて礙るにあらず、是佛法の大意なり、問一答十の道理とせりとは一法を擧する時、十法乃至百千萬法、殘る物なき道理なり、問一も其人答十も其人とは是亦賓主相對して問答する義には非ず、問も答も第二人なきの弄處なり。

黃檗云、夫出家人、須知有從上來事分、且如四祖下牛頭法融大師、橫說豎說、猶未知向上關楨子、有此眼腦、方辨得邪正宗黨、黃檗恁麼道の從上來事は、從上佛佛祖祖正傳しきたる事なり、これを正法眼藏涅槃妙心といふ、

△那、兼下割云、此文出傳燈九師章、△辨、那、ふ下割云、是從上來本成佛事ナリ

△辨、る下割云、人

△辨、天下割云、異本作來

△辨、り下割云、此ノ二字にあらすノ四字ナラン不、然則義不通、△辨、なり下割云、此三字からすノ三字ナラン

自己にありといふとも須知なるべし、自己にありといへども猶未知なり、佛正傳せざるは、夢也未見なり、黃檗は百丈の法子として、百丈よりもすぐれ、馬祖の法孫として、馬祖よりもすぐれたり、おほよそ祖宗三四世のあいだ黃檗に齊肩なるなし、ひとり黃檗のみありて、牛頭山の法融禪師は、四祖下のらめたり、自餘の佛祖いまだしらざるなり、牛頭山の法融禪師は、四祖下の尊宿なり、橫說豎說、すことに經師論師に比するには、西天東地のあひだ、不爲不足なりといへども、うらむらくはいまだ向上の關楨子をしらず、向上の關楨子を道取せざることを、もし從上來的關楨子をしらざらんば、いかでか佛法の邪正を辨會することあらん、ただこれ學言語の漢なるのみなり、しかあれば向上の關楨子をしること、向上の關楨子を修行すること、向上の關楨子を證すること、庸流のおよぶところにあらざるなり、眞箇の功夫あるところには、かならず現成するなり、いはゆる佛向上事といふは、佛にいたりてすすみてさらに佛をみるなり、衆生の佛をみるにおなじきなり。

【聞解】 黃檗恁麼……從上かみより近くは七佛より正傳し來る、一大事因緣なり、これを正法眼藏として、近くは今釋迦より迦葉と正傳し來る、この正法眼藏は、人々の自己にあるものじやから、返照して須知也、返照せねば知るこゝならぬから、自己にあらず、自己にあらずと云て、返照せねばは

しれぬから、返照すべしと云意、この文見へにくし○自己に有ども返せねば未知なり○佛々……佛祖正傳の室に入らねば夢にも知らぬ○祖宗三四世とは達磨より黃檗までの大括りで云ふ○牛頭は山名或名、破頭山、又は名、雙峯、峯二つに分るゆゑに云ふ○うらむらくは……こゝは憾字を書す、心に不足におもゆへ、向上の……黃檗のいふ向上の關樞子を知らざれば佛法の邪正を辨會することならぬ○關樞子を知ると修行と證と三段に分ちて云ふ、發心修行菩提なり○佛々いたりてもすゝみて、洞山の法身主毘盧主といはるゝことあり、これをしるなり永祖の極果にも大己を見ると同じ。

【私記】とは 自己にありといへども等は、影室いはく、唯是は從上の須知猶未知なるべしと「是なり、又ははく、自己の道理又須知猶未知なり」と參本譯文にははく、雖「自己」而應「須知」、雖「自己」而猶未知也、と」しるべし、牛頭の兩角なきことをあきらめたりとは、向上の道取なり、いまは黃檗向上なれば自餘の佛祖いまだしらざるなり、いまだ口上の關樞子をしらす道理せずとは、まことにいただき人なき道理なり、ゆゑに修し證すること庸流のおよぶところにあらずと奪却し、また功夫あれば現成すると兩手に分付するなり「佛にいたりてすゝみてさらに佛をみるなり、衆生の佛をみるにおなじきなりとは、參本いはく、同衆生見佛者、如「有」見佛、到「佛」見佛、必然有矣、此是示「見義同」と」これ佛向上事の通天徹地なり、生佛ともに佛向上事なるがゆゑに、佛をみるといへるなり」

【御抄】 從上來事と云は、佛向上事同事也、實出家人として尤可知事也、從上は佛々祖々正傳し來事とあれば、不可有不審、又正法眼藏涅槃妙心を從上來事と可云也、如文。

此自己は始に夫出家人とあるを、自己と指歎、但此自己は尋常の吾我等にあるべからず、從上の自己なるべし、正法眼藏涅槃妙心なる道理なる、自己を知もあり、猶未知もありと、當時現量に任て云はれたる、一往分もありぬべし、但是は猶能知所知をはなれず只是は從上の須知猶未知なるべし、自己の道理又須知猶未知也、知不知にかゝはらぬ道理なるべし、此義佛々正傳せざるは夢也未見なるべき也。

黃檗を讚嘆詞也、如文、牛頭法融禪師天厨送食云、殊にゆゆしかりし祖師也、而黃檗橫記堅説をゆるされず、末學難測事也、但眼目備たる黃檗等の御詞定子細あるらむ、此詞は一向法融の向上の關樞子を不知事を被説なり、如文。

佛與衆生を相對して見佛すと云は、うるわしき非見佛、已見佛錯也と被嫌、佛が佛を見る則佛向上來時の見佛なるべし、此道理を佛にいたりて、すゝみてさらに見を見と云なり。

【辨註】 辨曰、いはゆる佛向上事と云はとあるは最初の章を于茲追て出し玉ふ、佛向上と云は佛の地位より尙又すすみあがりて更に佛をみると云にはあらず、衆生の佛をみるに同じからず、其旨は前非佛下の注に云、佛をこゆる故に非佛にはあらず、只ひとへに佛向上なる故に非佛なりと云を以てみよ、茲も佛地に至りて尙又一頭地すすみて佛をみるにあらず、衆生の佛を向上にみるに同じからず、不_レ然則前後齟齬するなり、下文可_二併見_一。

【那一寶】 所謂佛向上事と云は前章をこゝに出し、佛にいたりてすゝみて更に佛を見るなり、すゝみて更に佛を見るときは相對する佛なし、可_レ見なきとき見非_レ見して、見儘衆生の見佛に同じきなり、譬ば古人の佛を問に答て、殿裏底或は三十二相と云が如き、衆生の見佛と移易せずして、佛向上道なり、しかあれば佛にいたり更にすゝみて佛をみるは佛見を超越する故に衆生の以_レ色見_レ我、以_レ音聲_レ求_レ我、見佛にひとしからず、衆生の見佛の如くなるは錯なり、況や見も不_レ能_レ及_レ、佛向上事ならんや

と也。

しかあればすなはち見佛もし衆生の見佛とひとしきは見佛にあらず、見佛もし衆生の見佛のごとくなるは見佛錯なり、いはんや佛向上事ならんや、しるべし黄檗道の向上事は、いまの杜撰のともがら領覽におよばざらん、ただまさに法道もし法融におよばざるあり、法道おのづから法融にひとしきありとも、法融に法兄弟なるべし、いかでか向上の關楨子をしらん、自餘の十聖三賢等いかにも向上の關楨子をしらざるなり、いはんや向上の關楨子を開閉せんや、この宗旨は、參學の眼目なり、もし向上の關楨子をしるを、佛向上人とするなり、佛向上事を體得せるなり

【聞解】 衆生の佛を見るに不同……衆生は三十二相八十種好六十二音聲を以て見る、祖門の見佛とは、諸相非相と見るなり、故に衆生とひとしきは錯なり、佛は見るけれども錯なり○法道もし法融……法の道取も向上の關楨子を知らぬ法融に及ばぬ○已下は文知れたり。正法眼藏佛向上事卷開解尾【私記】 とは 衆生の見佛と、さらはるるは、三界のごとく三界をみるがゆるなり、いまの見佛と能見所見にあらざるがゆるに、この宗旨は、參學の眼目なるをもて、三賢十聖、をよび法融の邊際を超越するなり、佛向上事の閑名謝滅なり、こゝをもてしらざるなり、もししれば佛向上事なり、ゆるに體得せるなり、と」結せらるるなり」

【御抄】 此詞前後相違して聞ゆ、其故は上には衆生の佛を見に同也と云ひて、やがて其次に衆生の見佛とひとしきは、見佛にあらずとあれば、ちひたるやうに聞ゆ、但前の衆生の佛を見に同じと云はる、衆生は、盡十方界眞實人體の衆生也、又現成公按に諸法の佛法なる時節、諸佛あり衆生ありと云はる、衆生なり、此衆生の佛を見やうはいかなるぞと云へば、上に如云佛にいたりて、すゝみてさらに佛を見る、見佛なるべし、下に見佛もし衆生の見佛とひとしきは、見佛にあらず、衆生の見佛の如くなるは、見佛錯也と被嫌は、我々が心得たる三十二相八十種好等の佛をよそに見、又或化佛の現相ぞなむと云程の見佛を如此被嫌也、能々可思量分別事也。

是は文に聞たり、法融に不及もあり、をのづからひとしき有とも、是は只法融に法兄弟也と被嫌詞也、仍爭向上の關楨子をしらむとあるなり。

實にも十聖三賢なむと云ふて、位をさだめたる分にては、今の關楨子の道理をば、不可知不可及事也。

【辨註】 辨曰、是以知次上所辨決して寫誤なり、見佛もし衆生の見佛の如くなるは見佛すら錯れり、況や佛向上事には没交渉なり。

辨曰、黄檗道の向上事とある、向上の關楨子とありて可なり、又向上關楨子をしるを佛向上の人とす。るなりとあり、向上の關楨子をすれば佛向上の人をしるなりとありて好し、最後に佛向上の人になるべしとはあらずと云を以て可不知なり。

【那一寶】 向上事と向上の關楨子と同意となり、故に交錯して用ゆ、十聖三賢等向上の關楨子を開閉せんやと、此書往々に十聖三賢等、不可不知及と云へる語あり、此語本同安の十玄談に見へたり、參學の力量なきものは驚疑してをもへらく、是禪門豁達の語、抑揚甚過當なり、十聖三賢何不可不知及

事かあらんと、是偏に未參究の故なり、總じて佛祖の言教、時に隨て抑揚ありといへども言句に泥むべからず、且く佛向上事とは本源無功用の旨を明す、十聖三賢は修證功勳を借て位を立つ、故に不_レ知不_レ及と云ふ、所謂修證不_レ無、不_レ汚染なり、法華涌出品彌勒八等覺の菩薩なれども、地涌の菩薩に於ては乃不識一人と説り、此意は彌勒は迹門の權教に依て功勳修行を論じ、地涌の菩薩は本門の實教に就て久遠實成を示す、故に如此抑揚あるなり例可_レ知。

【御聽書抄】佛向上は一祖の上を云べし、世間出世にをのをの分上に詞多し、教門宗々の廢立各々也、一佛の所説に付て、機をあらはす詞あれども、義は又各別也、但其の至極するとき佛向上事等の詞いで、餘門には總此詞なし▲如來より三十八位祖向上也、自己より向上三十八位の祖也と云は(一祖の上へに三十八位)此等の詞、他門には不談歟、如來よりは向下ともつかひ、自己よりは向上なむと仕も、上下の詞世間に習ふべからず▲自己は非汝非誰自己なり、自己は洞山かと聞ゆ、しかにはあらず、その人をさしたる自己ならば世間の自己なるべし、一定いづくをはじめとさだむべからず、只佛上にも三十八どもかぞへ、洞山一人の上にて三十八とも云べき也、佛法の外なる佛あるべからず、祖より外の佛法なかるべし、自己より向上と云詞この義也、代々を算數する、三十八位にはあらず、佛向上事をとく、三十八位なり以詞心得とは云はず、佛向上事を以て語話をば心得べき也▲佛向上事を體得すれば、語話の分有と云時に、語話の分をしらむ事は、佛向上の事にてあるべし、又此佛向上事は、如來より三十八位祖向上也、自己より向上三十八位の祖也と云ふにて、一代聖教の意は體脱すべきなり、一切衆生悉有佛性と談するも、三界唯一心と云も、唯一乘法と云も、諸法實相と云も、如來と洞山との三十八位の祖向上なる道理に、聊も無相違也、所詮三十八位は、たゞ一師の上にあるべし、親嫡嗣なりと云ふゆへに、三十八位までの員數とは、不可思、佛向上なるゆへに、六十劫をも食頃とこそ、經にはとけ、無量佛を供養すとも是程なるべし▲洞山悟本大師段體得佛向上事、不聞と云は舌頭のひやく所、耳にて聞と云は佛向上事の聞にては不可有、只世間の聞なりゆへに不聞と云ふ、舌頭より生ずる語話ならざるゆへに、凡は如何是體得佛向上事とぞ問べき置初問、第二重詞一の不審也、但體得佛向上事は方有些子語話分也、語話は聞黎不聞、此不聞和尚聞否也、和尚還聞は待我不語話時即聞にてあるときに、次第にときあはらず上は、體得佛向上事有何不審哉と覺ゆ▲和尚還聞否と云は、先何としてか不問とぞ問べきに、やがて聞否の詞似忿々、聞べき事をきくかと問ひ、若は聞黎こそ不覺にて不聞也とも、和尚は學道人なれば、聞かなむと云にはあらず、語話のとき不聞と云ふことを猶即聞と云道理もありやとふ心地なり、又聞も語話もいか程をさして、語話とも聞とも云ふぞと問なり、語話がやがて不聞なるゆへに▲凡見佛聞法の道理は、世界を以て見、身を以ても見、心を以ても見、耳を以ても見也、聞も亦如是、此一地をうけて今も如此云ふ也▲待我不語話時即聞と云は、世間には語話時は聞也、諸法なるゆへに、佛法には不語話の時を即聞と云ふ、無言説と云ゆへに、如此ならば舌頭のひやく所を語話と云はず、いかならむか語話なるべき、能々可尋知事也、法華の時説を勸るに、靈山の説不聞にあたる、そのゆへは一字不説と佛被仰、十方佛土中唯有一乘法と云ふ、一乘の法の外に物なきゆへに、誰きくと不可云、此義にて可心得か▲即聞と云は、應以佛身得度者即現佛身而爲說法と云ふ、現するも佛身、得度せむとするも佛也、しかれば即聞も佛なるべし、不語話も佛なるべし、衆生と云事きこえず、現身を説法と云也、現身が語話にてはある也、此時聞黎不聞の語話なり、現身説法と云は、其時は聞黎あるべからず▲佛上にいたらざれば、佛向上を體得する事なしと云は、佛

上佛向上たいをなし詞なり、無差別也、舌論の語話こそ、顯隱與奪もあれ、佛向上の時は不然▲聞に染汚せず、不聞に染汚すと云は、一の染汚はとり、一の染汚はすつるに似たり如何、この染汚を各別して善惡とるべきにはあらず、さらふにあらず、只聞には染汚せずとも不聞には染汚すと仕ひかふる許也、聞不聞に不相干也と云は、この相干は世間の法に不相干と云也▲逢人不逢人と云は、なべて人にあふぞ、人にあはぬぞと云にてはなし、不聞裏藏闍黎の心地也▲舌頭に罣礙せらると云は、如來遍覆三千大千世界と談じぬる上誰かあるべきぞ、なれば不聞なり、舌骨と云ふ舌佛向上事の舌骨也、遍覆三千の舌也、世間の舌にあらず、しかも如此也と云へども、なんぢが舌頭にあらずと云ふ、闍黎か舌頭か舌頭にあらずと云は、闍黎舌頭にあらずとなり▲高祖悟本大師段(雲門保福法眼都 合四人詞被連之)已前の詞何も同かるべし、是は師々の詞をあつめて云許也、其意旨一なるべし▲悟本大師の示衆して、須知有佛向上人と云し、時雲門保福法眼等の同時にあるにはあらず、後の詞ともを、よせられたるなり▲名不得狀不得と云ふ(雲門大師の非佛の詞を釋也、名不得狀不得は非佛也、所以言非とあり、顯然也)此不得は心不可得の不得也、名と云も盡界に満たる名也、狀と云も盡界の狀なるゆへに不得なり、如世間談の名并狀にはあらず、可得ことなきゆへに、不得と云にはあらず▲名不得狀不得ときけば、法身の佛をば、青黃赤白黒にあらず、非色非身非有非無なむどとく、然者名づけ、かたどる方なければ、名不得狀不得の詞といはれたりと覺れども、又しかにはあらず、只佛をさして名不得とも、狀不得とも云べし、所以言非とあり、又保福の佛非と云にて可心得合也▲悟本大師は非佛、保福は佛非と云、これともに其物其事にはあらずと云、非にてはなし、これ佛の上の非也、四句百非の非にはあらず、非心非佛の非なるべし▲弄精魂と云、これ衆生の慮知念覺かと覺たれども不然、佛向上の精魂也、此精魂はやがて精魂を弄する也▲有佛向上人を不知する

也、無佛向上人を不知する也と云ふ、此不知は有佛向上人、無佛向上人也、抑佛向上人と云事、能々心得ての上の事也、人と云はいたづらなる、我等を指ては云はじ、宗門に用なる達磨西來不立文字直指人心見性成佛と云人なり、この事を専門家の末流僻見に住して云には、人身は業報所成の身、五蘊積聚の物なれば、生老病死の四苦に轉せらる、非可執心こそ無念寂靜にして、湛然常住なれ、これ佛心とひとしきゆへに、直指人心こそあれ、以心傳心の法とて佛迦葉に附法しましたし、ときは、何を傳と云事なし、心をこそ傳しかなむと云ふ、これ教に云ふるしたる、身心一如の義にだにも及ばず、身劣にして用すば、心はなはだ用がたし、心を用ゆべくは、人身も難棄、直指人心と云ふ、人は今の佛向上人なるべし、盡十方界眞實人體の人なるべし、此いはれをこそ、雲門の名不得、狀不得とも、悟本大師の非佛とも、保福の佛非とも、法眼の方便呼爲佛とも云へ、能々可了見合也▲此方便呼爲佛と云ふ、方便をば尤方便をと可讀也、方便にと讀では聊其意趣可相違爲佛の方便なるゆへに、實法に對したる方便にはあるべからざるなり▲東京淨因枯木禪師段、禪師示衆云、知有佛向上事、方有說話分○對面不仙陀睡多饒寐語、人家の兒子と云は、佛向上人也、佛祖の家門に入て佛法を習ふ人、佛祖とならむことは、暫置天堂地獄には、決定まぬかれぬるもの也、この門家に入る人、皆六根不具なるべし▲六根不具と云は、佛向上事の時は、この人界の六根不可用、ゆへに不具と云、盡十方界眞實人體と云ふ、世間の六根争可具足哉、せむは佛祖の六根と者能具所具にあらざる也、餘家には六根不具、七識不全と云はむを得ず、六根が二三もかけたらむを不具ととり、七識が二三もなからむするを、たとひありとも、惡業の識のみをこらむを、不全なむと云はむすると思へり、しかにはあらず、一向この六根は不具の物、七識は不全と云べし、さてこそ衆生界は、一向やぶれて佛向上なれ▲七識不全

と云は心意識にかゝるは世間なり、心意識を離たるを佛法と云ふ、しかれば佛向上の時は、七識不全となり、但又佛法に六根と云ひ、七識と云事有とも、其時は盡十方界をして、六根とも七識とも可仕也▲大闡提無佛種性と云は、佛性を談せしとき、衆生有佛性、衆生無佛性と談する心地にて可心得、闡提とは不可成佛者の名也、廢種の二乗と云も無佛種を云也、永不成佛の者と云ふ、涅槃經には闡提猶可成佛と談也、又大悲闡提の菩薩と云事あり、是は又別事也、衆生化度の爲に一衆生ものこらむ程は、大慈大悲の心にて、佛にならじとちかふ、大乘の菩薩ある也、不可類二乗事也▲逢佛殺佛逢祖殺祖と云は、坐禪のとき殺佛と云ふ心地にて可心得也、殺佛なむと云つれば、殺の詞ををそれて、耳を塞ぐやから多し、まことに不知のまへには非無謂、たゞし殺と云は親切の義、非可恐、その上ころすと云へばとてたゞいたづらなる詞、一一非可驚、抑佛は死するものか、被殺ものか、此理を能々案じ解ての上の事也、提婆にあひしとき、出佛身血罪と云ふ事こそあれ、是は提婆が逆罪をあらはさむためなり、非實、然而出血までこそあれ、殺とは云はざるべし、又逢佛殺佛と云ふ、たとへば佛の佛をころすべきか、佛にあらすしては不可逢佛、祖にあらすば祖に不可逢也▲天堂收不得、地獄接無門也と云へば、天堂はあれどもをさめがたく、地獄はあれども接するには無門と云かとも心得られぬべけれど、はじめに逢佛殺佛、逢祖殺祖と云ふに、天堂も地獄も、この兒子むかはいやぶれうすべきなり▲教に地獄天堂皆爲淨土、有性無性齊成佛道なむと云をば衆生念々爾聞て悦、今の枯木禪師の詞は、向上人を説ときに、衆生の耳にはさがりて覺ゆ、無力事也▲對面不仙陀と云は、この六根不具人は不仙陀となり、仙陀とはいな加人也、又仙陀婆と云事あり、ことはなきを不仙陀とも云べし、仙陀客をばゐな加人と云ふ、此對面不仙陀と云詞の、こゝにいでくる事は、語話分と云ひつることのゆへに被引

出也、王索仙陀婆と云は、詞にてあるを、王臣仙陀婆の詞の上に、種々のさとりを得て、王に物をたてまつるを、今は不仙陀とあれば、ことはかなきに、あたるゆへに不語話のとき、即聞の義をいはむとして、對面不仙陀と云也▲睡多饒寐語と云は、此六根不具人は、ねぶりの時も詞をほくゆたか也となり▲換却と云は、實に古今賣買の法あるべき様にをばゆ、しかにはあらず、たとへば一心に三界を換却と云はむが如し、三界唯一心なれば、佛の皮肉に衆生の皮肉をかふるなり▲爐韃裏を透過すと云は、金は爐韃裏に不可全、然而佛向上金佛は爐韃裏を透過する故に如此云ふ、大海裏を透過すと云は泥佛大海裏にはくづれぬべし、然而佛向上は透過の故に如此云也、火焰裏を透過と云は、木は火焰裏には不可全、然而透過すれば如此云也、爐韃裏を透過して金佛となれりと云まではなほ世間の詞にも思へし、金佛をば、たたらにてこそあると云に、たらのうちをすぎると心得る程に、大海裏を透過して、泥佛となると云時こそ、迷惑すれ佛向上のきかかると可習也▲七識不全と云は破木杓也と云ふ、世間の七識が佛向上には破れぬる也、此破を破木杓とつかふ、殺佛すと云へども、逢佛すと云はころすと云も、逢てこそころすときにあふと仕、天堂地獄の事は、佛向上人、都此境界ならざる所を云なり、對面すれば破顔すと云は、佛與迦葉の例也、佛の附屬を得しときが、破顔なるなり、いたづらに破顔せしにてなし、舉山匝地兩知己玉石全身百雜碎と云は、舉山匝地とあれば、山與地二の詞に聞ゆ、然而兩知己と云時に、二のあはひ親切にして、知己といはるゝ也、人ふたりのあひたるもうとからず、甚深なるをば、知己の中と云が如し、盡十方界を眞實人體と云が如し、佛對面すれば、迦葉破顔する程也、玉石を全身と知也、百雜碎と云ふ上は、又玉ぞ石ぞの差別も、不可有、百雜碎は解脫也、三界唯一心と知也▲雲居山弘覺大師段、大師參洞山、吾在雲巖時祇對無異也、さきには道膺と云々、向上

更道へしと云ひて、後不名と云、勝劣あるに似たれども不可然、語話時不聞、待我不語話時即聞と云しごとし、只即聞不聞程の差別也、名什麼と云ふ心地にて、名も不名も心得べし、向上と云詞、我より上と不可心得事明也、不名とは云かへたれども、道膺の上に道膺とも、不名道膺とも云なり、佛より已前なるゆへに、非佛と云はず、佛より後なるゆへに非佛と云はずと云、道理にあて、名道膺とも不名道膺とも心得べし、名不名は佛性の上の有無也、道膺の全面を向上心得也▲眞箇の道膺也、しかれども、向上にも道膺なるべしと云事なかれとは、たとへば三界を三界となづくる事なかれと云程の義也▲曹山本寂禪師與洞山問答段、非本寂と云、非は物を非するにはあらず、四句百非にはことなるべし、不名の上は、非本寂也、喩ば一心これ三界也と云ふ、三界これ一心也と云、一心非三界と云はむが如し、一心三界なればこそ、非三界ともとけこの心地なるべし▲盤山寶積禪師段、賢聖の境界に非と云は、さきの千聖をばゆるし、今の賢聖をば、境界にだにもあらずと嫌不審なきにあらず、但向上一路方には、千聖も凡夫も不傳の分あるべしと也、保護するゆへに、又賢聖方には、この賢聖と云詞が向上一路の境界にあらずと被嫌也、賢聖の詞は一なしとゆるすがため嫌かたあるべし、賢聖と云までは、其分際を立て、位位ををくゆへに、向上一路には境界と難云、且所々に多十聖三賢も、夢也未見と云ゆへに、これに一の通路あるべし、この境界と云詞を保護の詞に取替て心得る方もありぬべし、保護する上は境界とへだつべきにあらず、千聖と云、千の字は諸にあたるべし、諸聖と心得也▲智門山光祚禪師段、拄杖頭上の上は向上の上也、全拄杖の心也、向上事、向上人一路、如此あげて談之、しかれば向上佛身とも、向上唯心とも、向上實相とも談すべし、此宗門に拄杖を以ても、佛祖と仕、日月星辰佛身と仕ふ、無差別也拄杖の日月に墨礙せらると云は、拄杖と日月と無差別所を墨礙せらる

るととくなり、挑と云詞は墨礙と云事なりと可心得、この拄杖日月は向上の一路なり▲日月の拄杖を參學するとき、盡乾坤くらしと云、是は日月の拄杖を參學するゆへに、拄杖のみ見前して、餘はくらしとなり、佛向上事は如此也となり、但日月は是拄杖とはあらずと云ふ、日月を強爲して、拄杖となすにあらずと也、拄杖は拄杖也▲石頭無際大師與天皇寺道悟問答段、道悟問如何是佛法大意、師云不得不知、道悟曰向上更有轉處也無、師云長空不礙白雲飛、佛法の大意と云事、能々可心得、いま不得不知と云は大意なり、法華經の大意を云は三世諸佛出世之本懷、一切衆生成佛之直路也、大都若有聞法者、無一不成佛と云ふ、是を常に心得には、三世諸佛をば佛につけ、一切衆生を世間に仰、若有聞法をば法につく、今は不可然、只佛法大意を三度開演するにてこそあれ佛ぞ法ぞ、衆生ぞと各別すべき所なり▲不得不知は二のよみあるべし、一者しらざることをえずと云とも心得べし、是は皆知道理と聞ゆ、一者えず、しらすと二の詞にも心得べし、しらざることを、えずといはむときはしると心得べき歟、しかにはあらず、石頭の本意は不知是道と云ふ、ふるき詞あり、この心なるべき歟、さきの千聖不傳程に可心得、不得不知と云詞たとへば色即心也なむと云はむが如し、但不知是道、慮知のかたに心得ば、そもく誰人ありて不知とは知べきぞ云ふ、難ありぬべし、不知は不可得なるべし、三世の不可得は、不可得と云詞にて、心のありやうを三度あらはすと心得べし、ふとくふちとよまむときも、心地は不可相違、兩方ともにしらざる所を、不知とつかひ、えざる所を不得と云にはあらず、不得不知は道也▲向上更有轉處也無と云は、轉と云ば、たとへば水氷となり、氷水精となる程の事をいふべきか、是方便也、たゞし向上更有轉處と云はむときは、轉がやがて現成の時にあらむるときに、方便が即佛と云はるゝ也▲轉處と云は方便也と云は、實教方便教なむと云ふ、方便にはあらず、方便

は、諸佛なり、諸祖也、不名道膺の轉處をさして方便と云ゆへに▲これは面々の不礙を要するにあらず、各々の不礙存するにあらずと云ふ、向上の礙はこれほどなるを云べし、面々の不礙にはあらず、抑轉ぞ、礙ぞと談じて、世間の法にてはいづれも、無其詮、轉と云はむに、水を轉じて氷となると云ても要なし、凡夫轉じて成佛せむこそ、大要なれ、ゆへに今の向上の轉を習べし、礙と云はむも、風を障子がさゆるぞ、水を石がさゆるぞといひても不要也、業報が成佛をさえむこそ大事なれ、それをこの向上の礙にて習べし▲長空不礙白雲飛と云は、空かぎりなければ、雲の飛もさはりなしと心得るまでは非本意、空は空を不礙、雲は雲を不礙なり、空與雲二にはあらず▲問一答十の詞、必ねがふべきにあらず、問一答十何ぞ劣なるべき、かの香嚴のむかしは、問一答十のはまれありとこそほめられしかども、父母未生前の一句を云へといはれしとき、口を開き問も答も其人ならむにとりての事也▲黄檗出家人段、この段には法融禪師、實にも、從上來事は不知とさくるなり、出家人須知有從上來事分……文眼腦と云は、眼ありて邪正をわきまふべしとなり、ゆへに方辨得邪正宗黨と云、宗黨と云は、邪宗正宗の黨類と云也▲佛向上と云は、佛にいたりて、すゝみてさらに佛を見るなりと云は、佛の佛に成と云程の事也、すゝみてと云も佛の上の事也▲抑黄檗は百丈の法子として、百丈よりもすぐれ、馬祖の法孫として馬祖よりもすぐれたりとあり、實にも黄檗は詞もすぐれ、法の上手なる事は、世以ほむる所也、但法は馬祖百丈より傳るものなれば、ひとしかるべし、たとへば家をつくるたくみあるべし、三間にてもあれ、五間にてもあれ、家の差圖は同けれども、上手のつくりたるはことなるべき程の事也、又法融禪師は世にきこえがたき師也、佛向上事をしらざるべしと、あやしむ人あるべからず、然而黄檗は未知而向上關候子と被仰る、法融は名譽無比類、かつは百鳥花をふくみてこれを供

養しき先蹤まれなるべし、但佛向上事をしらざらむ事無力▲十一人の祖師の詞をあげらる、法融をば不知とあり、以之可知、祖師の言語は義をもて可云にてなし、たゞ公案を頼にかけて、證道を待べしと云ふをしへ、甚不得其意、しかいふことなるべくは、洞山の佛向上事の後は、すべて云べき事なしとて、さてこそやむべきに、多の祖師問答すべきにあらず、しるべきは佛向上事、ならふべきは佛向上人、たつぬべきは佛法大意なり。佛向上終

正法眼藏佛向上事

爾時仁治三年壬寅三月二十三日在觀音導利興聖寶林寺示衆

退却一字卷

正法眼藏佛向上事 龍頭蛇尾參却退疎山古佛示根脚、四海水雲真卷懷、佛向上、宗言語斷、凡情塵見一深埋。

●高祖筠州洞山悟本大師者、潭州雲巖山無住大師、新嫡嗣也、如來三十八位祖向上通本作如來向下三十八位祖也蓋盲改自己向上三十八位祖也文本有餘師說佛向上者、雖佛世尊仰面仰觀、故云佛向上、未足嗤笑、小獸兒情、胡爲爾耶、而今四十餘字參究佛向上事、即是。

●大師有時示衆云、體得佛向上事、方有些子語話分、僧便問、如何是語話、大師云語話、時闍黎不聞、僧曰和尚還聞否、大師云待我不語話時、即聞、即聞正當不

語時、語時耳塞似狐疑、待之無地盡方界、觸處生涯隨分施、施隨分、佛向上宗問取誰。

●今所謂佛向上事道、大師其本祖也、自餘佛祖參學大師道來、體得佛向上事也、當知佛向上事非在因、非果滿、然有體得參徹語話時不聞也、不到佛向上則無體得佛向上、非語話不體得佛向上事、非相顯非相隱、非相與非相集、所以語話現成時、是佛向上事、佛向上事現成時聞黎不聞也、聞黎不聞者佛向上事、自不聞、語話本語已時聞黎不聞也、應知語話其不染污、聞、不染污不聞、所以不相干聞不聞也、不聞裡藏聞黎、語話裡藏聞黎、而逢人不逢人恁麼不恁麼也、逢人即是不逢人、恁麼正當不恁麼、此是裡藏端的矣、識情難測、誰偏頗、偏頗寂、深高山真像裸。

●聞黎語話時即聞黎不聞也、其為不聞、宗旨為舌骨所望礙而不聞、為耳裡所望礙而不聞、為眼睛所照穿而不聞、為身心所塞却而不聞也、然故不聞也、拈是等、拈不可更為語話、非不聞即語話、語話時不聞而已矣、高祖道語話時聞黎不聞則語話道頭道尾、如藤倚藤而應語話纏語話、為語話所望礙、箇裡望礙皆共觸處透體、譬如行法身佛承當有望礙故、各承當有脫落、看行佛威儀卷。

●僧曰和尚還聞否、謂非舉和尚擬聞語話、舉聞更非和尚非語話故、然今僧所擬議、則語話時應參學即聞否咨參也、論擬問取語話即語話耶、擬問取還聞是還聞耶也、然如是言非汝舌頭、僧舌頭未如是、今試參看而已、而何可不參問處道得耶。

●洞山高祖道待我不語話時即聞、須明參究謂正當語話時不更有即聞、即聞現成應、不語話時、非徒措、不語話時而待不語話也、有人以措不不、為行字者徒以情謂、擬參究之所致也、而今謂不語話時譬如我佛四十九年一字不說、須參唯佛與佛卷中、

●非即聞時語話為傍觀、真箇傍觀故非即聞時語話去存取一邊、那裡、語話時非即聞親藏身語話眼睛裡而露靈、然則設聞黎也語話時不聞、設我也不語話時即聞、是方有些子語話分也、是體得佛向上事也、論如體得語話時即聞也、所以待我不語話時即聞也、雖然佛向上事非七佛以前事、七佛向上事也、此云以前則前於七佛乎、七佛向上事即七佛是乎、論如華藥欄、非是華藥外作欄、華藥即欄、典座入庫堂、七佛以前事非恁麼限、今但為集情謂、且如是道取、莫錯認定盤星。

●高祖悟本大師示衆云、須知有佛向上人、時有僧問、如何是佛向上人、大師云非佛雲門曰名不得狀不得、所以言非、保福曰佛非、法眼曰方便呼為佛、大凡佛祖於佛祖向上者高祖洞山也、其所以者餘外佛面祖面雖多、而今猶佛向上道則夢也未見、本通作未也、德山臨濟等則為說焉、不可承當、巖頭雪峰等粉碎其身而不可喫拳、非唯建立門、彼門派者都不及彼、況於未窺此佛向上事門底者乎。

佛向上事參註

向上人是非佛也、見疑著何如非佛時、應思量焉、不道佛以前故非佛、不道從佛後故非佛、非超佛故非佛、唯偏佛向上故非佛也、其非佛者脫落佛面目故云、脫落佛身心故云、此章朗讀自爾辟歷風雷、

●東京淨因枯木禪師諱法成示衆云、知有佛祖向上事方有說話分、諸禪德且道那箇是佛祖向上事、有箇人家兒子、六根不具七識不全、是大闢提無佛種性、逢佛殺佛逢祖殺祖、天堂收不得地獄接無門、大衆還識此人麼、良久曰、對面不仙陀、睡多、鏡寐語、謂六根不具者眼睛被人換却木棹子了也、鼻孔被人換却竹筒了也、獨體被人借作屎杓了也、作麼生是換却底道理、所以六根不具、不具六根故透過爐韞裡成金佛、透過大海裡成泥佛、透過火焰裡成木佛、趙州三佛現成此、不度果然、金木泥爐火水深、誰透過、無塵、甄子破曹谿、曹谿鏡、不言桃李自成蹊、

●七識不全者破木杓也、雖殺佛而逢佛、逢佛故殺佛、擬入天堂天堂即崩壞、向于地獄地獄忽破裂、是故對面則破顏、更無仙陀、睡多尚饒寐語、應知斯道理舉山巾地、兩知己玉石全身百雜碎也、枯木禪師示衆應靜參究功夫、勿卒爾焉、不具與不全、面壁一安禪、日夜根塵隔、作家相見全、逢著殺、魚兔命罟罟、

●雲居山弘覺大師、參高祖洞山、山間問黎名什麼、雲居曰道膺、高祖又問向上更道、雲居曰向上道即不名道膺、洞山道吾在雲巖時祇對無異也、今師資道必應審細謂向上不名道膺者道膺向上、應參學適來道膺、有向上不名道膺、向上不名道膺、道理現成以往、真箇道膺、而勿謂向上應道膺、設問高祖道向上更道時、程頤話道

羅本作曰

著向上更名道膺、而應即向上道、爲什麼云爾、謂道膺忽跳入頂額而藏身也、雖藏身而露影也、跳入頂額忘自己、正當忘却影彌新、藏身無迹手千眼、作麼用時何比倫、

●曹山本寂禪師參高祖洞山、山間問黎名什麼、曹山曰本寂、高祖云向上更道、曹山曰不道、高祖云爲甚麼不道、曹山曰不名本寂、高祖通本作然之、一本謂非向上無道、是不道、爲甚麼不道、謂不名本寂也、然則向上道則不道、向上不道則不名也、向上不道則不名也八字通不名、本寂者向上道也、所以本寂不名也、本作不道則不名也七字然有非本寂有脫落不名、有脫落本寂、脫落向上、向上脫落、本寂固本寂則不名、正不名則不道、不道其舌覆三千大千盡十方而已、

●盤山寶積禪師云、向上一路千聖不傳、謂向上一路唯盤山道、不道向上事、不道向上人、道向上一路也、其宗旨也雖千聖競頭出來、而向上一路則不傳也、不傳者千聖保護不傳分也、應如是學、更又有所可道、謂千聖千賢則不無、雖賢聖而向上一路非賢聖境界、一路莫傍題、千賢聖此迷、雪霜新萬岳、松竹舊千巖、果然點水泥泥處見靈犀、

●智門山光祚禪師、因僧問如何是佛向上事、師云拄杖頭上挑、日月、謂拄杖爲日月、所望礙、是佛向上事也、日月之參學拄杖、時盡乾坤暗、是佛向上事也、非日月是拄杖、拄杖頭上則以通本作者、全拄杖上也、全杖無名相、明明百草頭、非聲色、日月、輪轉自悠悠、自悠悠、金毛吼、獨體、

●石頭無際大師會天皇寺道悟禪師問。如何是佛法大意。師云不得不知。道悟曰向上更有轉處也。無字應承。師曰長空不礙白雲飛。謂石頭者曹谿二世也。天皇寺道悟和尚者樂山師弟也。有時問如何佛法大意。此問非初心晚學之所堪。聞大意則可會取大意時節道焉也。問答一條。向上問來。大意知音。虛空忽落斯地。師資眼明古今。

●石頭云不得不知。應知佛法者初一念有大意。究竟位有大意。其大意則不得。發心修行取證則不無。而不得也。其大意則不知。修證非無。修證非有。不知也。不得也。又其大意則不得不知。非無聖諦修證。不得不知也。非有聖諦修證不得不知也。分明觀面得知寂。大意單傳何國人。何姓即真常姓脫。網珠非比木枯春春枯木。面孔半枚不得親。錯錯。

●道悟云向上更有轉處也。無亦應承。謂轉處若有現成則向上現成。轉處者方便也。方便者諸佛也。諸祖也。道取之應更有。雖更有而非應漏更無。應有道取。箇進步過日月明。風旛心動更無有。轉身轉處現成親。方便真實奇無偶。片片赤心佛祖。條條充滿蒼生。

●長空不礙白雲飛。石頭道也。雖長空更不礙長空。長空是不礙長空飛。而更白雲自。不礙白雲。白雲飛不礙也。白雲飛更不礙長空飛。不礙它則自不礙。非要面面不礙。非存各各不礙。所以不礙也。舉拈長空不礙白雲飛之性相也。正當恁麼時揚眉斯參學眼。而覩見佛來。相見祖來。相見自來。相見它來。為諸問一答十道理。今謂問

一答十問一應其人。答十應其人。不礙由來不礙無。落華破鏡坐禪圖。山河清淨本然在。片片白雲終不拘。不礙承當且爾。

●黃檗云夫出家人須知有。從上來事分且如四祖下牛頭法融大師橫說豎說。猶未知向上關候子。有此眼腦方辨得邪正宗黨。黃檗恁麼道從上來事從上佛祖祖正傳來事也。之謂正法眼藏涅槃妙心。雖自己而應須知。雖自己而猶未知也。佛佛不正傳則夢也未見也。黃檗者百丈法子而勝於百丈。馬祖法孫而勝於馬祖。大凡祖宗三四世際無齊肩黃檗。唯有黃檗而明牛頭無兩角。自餘佛祖未知也。牛頭山法融禪師者四祖下尊應承一宿也。橫說豎說誠比經師論師。則西天東地間雖不為不足。恨未知向上關候子。不道取向上關候子。若不知從上來關候子。則爭有辨會佛法邪正。只是學言語漢耳也。只是至耳也。入字通本。然知向上關候子。修行向上關候子。證向上關候子。非庸流所及也。有真箇功夫地必現成也。謂佛向上事者到佛而進更見佛也。同衆生見佛也。同衆生見佛者。如有見佛到佛見佛必然有矣。此是示見義同。然則見佛若齊衆生見佛非見佛。見佛若如衆生見佛見佛錯也。況佛向上事耶。須知黃檗道向上事今杜撰曹不及領覽。曹正法道若不及法融。法道自有齊法融。而應法兄弟法融。爭知向上關候子。自餘十聖三賢等奈何不知向上關候子也。況開閉向上關候子耶。斯宗旨者參學眼目也。若知向上關候子為佛向上人也。體得佛向上事也。法廷龍象衆。當觀第一義。幾乎向上關候子。行佛威儀十二時中莫染汚。●正法眼藏佛向上事。爾時仁治三年壬寅三月二十六日在觀音導利興聖寶林寺示衆

正元元年己未夏安居，日以未再治御草本，在永平寺書寫之。懷祥文本
明和七年庚寅後六月初七日午，在東羽秋田仙北郡駒形莊板見內邸釋堂山靈仙禪寺
十有寬仲長老移盃再會明憲下龍頭蛇尾參了回向。護法龍天善神冥助厚恩云。本
光比丘盟焚呷睇書

佛向上事參註附錄

薦福雲下云：千聖不携其為萬機休罷也。俯仰之高矣。鑽之堅矣。字應有之。片時無休息。佛
祖依前曾不傳。此是一路。自舉唱耳。滴水非涓納天月。向上關。眼于不可尋。別方。大千界
外幾三千。到佛進見佛。初心不改。見佛名義。雖不異。業生其佛見佛。眼鼻身心。遠異。

涉典錄

第二十六佛向上事卷 ▲悟本大師 佛燈十五師章曰：唐咸通十年三月八日，端坐
長往，壽六十有三，臘四十二，勅謚悟本大師，塔曰慧覺。▲洞山佛向上，宏智拈古，
第三十六則出▲枯木成示衆。續傳燈卷十二師章出▲雲居向上。傳燈卷十七出▲曹
山向上。傳燈卷十七出▲智門拄杖頭上。佛果擊節下卷第九則云：舉僧問智門：如
何是佛，門云：踏破竹鞋，赤脚走。僧云：如何是佛向上事，門云：拄杖頭上挑日月，雪竇
拈云：千兵易得，一將難求。▲道悟向上。傳燈十四石頭章出▲黃檗評牛頭。傳燈卷
九黃檗章出

涉典續編

國佛向上事 佛向上△已出于辨道話○洞山、佛向上△傳燈、洞山錄、並同于今
唯會元、此則末句、欠待字焉、一字有無、自他大異、祈子須子細○聞黎△寄歸傳
云、梵阿黎耶、此云軌範、善提資糧論云、此云正行○聞不開△楞嚴三云、不聞同
界、聞則同聲、同五云、河難、汝云何聞、云何不聞、阿難大衆、俱白佛言、鐘聲
若擊、則我得聞擊久聲消、音響雙絕、則名無聞○不相于△洞山錄龍山偈云、浮生
穿鑿不相干○洞山非佛△洞山錄、傳燈師章○保福△傳燈十九、障州保福從展、福
州人、姓陳氏、嗣雪峯○方便△名義集云、梵、漚和俱舍羅、此云方便、臨濟錄云、
漚和爭隨截流機○巖頭△傳燈十六、鄂州巖頭、全豁、泉州人、姓柯氏、嗣德山○三
阿僧祇、大論云、阿僧祇劫、此云無數時、俱舍問云、既無數義何復言三、答曰、
無數者、顯不可數、非無數也、初阿僧祇、謂從古釋迦、至戶棄七萬五千佛、名初
阿僧祇、從戶棄至然燈七萬六千佛、名二阿僧祇、從然燈至毘婆尸、七萬七千佛、名
三阿僧祇、四教儀同于此○大劫△新婆沙論云、劫有三種、一中間劫、二成壞劫、
三大劫、中間劫、復有三種、一滅劫、二增劫、三增減劫也、滅者從人壽無量歲、減
至十歲增者、從十歲增至八萬歲、增減劫從十歲增至八萬歲、從八萬歲減至十歲、此
中一滅一增、十八增減、合二十中劫、世間成、二十中劫世間住、是合名成劫、又經
二十中劫、世間壞、二十中劫壞已空、此合名壞劫、總八十中劫、合名一大劫○玄路△

洞山錄 師示衆曰、我有三路接人、鳥道、玄路、展手○成因枯木△會元十四、續傳燈十三○七識△楞伽、楞嚴、並云、眼鼻耳舌身意各具識、加以摩那識、爲七識○大闡提△涅槃經、高貴德王品云、一闡名信、提名不具、大衆所問品云、純陀問佛、一闡提者、其義如何、佛言、犯四重禁、作五逆罪等、楞伽、唯識有種々說、略之○仙陀△出于王索仙陀婆中了也○木穗子△○木穗子經云、佛謂波瑠璃王言、當實木穗子一百八箇、常自隨身、稱佛法僧、廣韻云穗木名也、正字通云、可以作念珠、會元十四、雪竇聞菴云、人人有箇兩箇眼睛、唯有善權、無眼睛爲什麼被人木穗子換了也○竹筒△禪錄、往往有竹筒字、蓋包土直之器、而非實器之謂也、五車韻、瑞、有以竹筒寄魚、以竹筒盛飯祭屈原、又杜甫、白居易、以詩容于竹筒、又忽卒之意耳○鬻體屎杓△出行持篇趙州章○爐韃△作韃者誤也、玉篇云、韃囊可以吹火、傳燈傳大士章云、爐韃之所多鈍鐵、良鑿之門足病人○金泥木佛△趙州錄中、上堂云金佛不渡鐵、木佛不渡火、泥佛不渡水、真佛內裡坐○雲居名什麼△傳燈洞山錄、併出之○適來△韻會云、爾來也、莊子云、適來夫子之時也、唐書、武元衡傳云、適從何來○曹山名什麼△傳燈曹山錄○盤山△傳燈七云、幽州盤山寶積、嗣于南泉、此則載于本傳○智門△會元十五隨州智門光祚、嗣香林、今則在師傳中○天皇△傳燈十四、荊州天皇道悟、婺州東陽人、姓張氏、嗣于石頭○聖諦修證△青原舊語、略不錄○問一答十△論語、公冶長云、回也聞一知十、杜詩云、當時往還者、記一不識十、傳燈九、香嚴章云、問一答十○黃檗曰夫△此文出傳燈九師章○牛頭法融

△傳燈四、牛頭山第一世、法融者、潤州延陵人、姓韋氏、嗣于四祖○庸流△會元六祖章云、同學訶曰、庸流何知、盧曰、願以一頌和之○義雲師、著語云、千聖不携○又頌云、仰之高矣鑽之堅、佛祖依然曾不傳、滴水非涓納天月、大千界外幾三千佛向上事

正法眼藏佛向上事註解畢

正法眼藏恁麼

恁麼

【義雲頌著】 第廿九恁麼 直越

我如是汝亦如是、此土西天雲、與水、鷲嶺、月光少林、藥、恁麼人作恁麼事、

【面山述贊】 第二十九恁麼 述云、恁麼者、如是之俚語、而如是者、確定法理、古

今不易之正語、要會佛祖的旨、宜參雲居、膺祖、贊言、有頂天下阿鼻城、因緣報業

悉無生、恁麼不恁麼總得、青山一帶白雲橫、

【開解】 正法眼藏恁麼卷開解 ○恁麼は俗語の如是なり、如是は法理を指す辭、今は自心の法體を指

す如との間が古今不易の道理なり。

【那一寶】 恁麼 那一寶曰、廣濶世界甚麼物恁麼、恁麼著親、直下無上道、甚麼物不恁麼、不恁麼

無著處、是什麼物道、如變了也○恁麼者、事苑審詳也、玄鑑圖、恁麼縱也、不恁麼奪也、俱是義理也、

梅膺祚音釋、恁女禁切、音貫如此也、可依此訓也、麼韻府疑辭。

雲居山弘覺大師は、洞山の嫡子なり、釋迦牟尼佛より、第二十九世の法孫なり、洞山宗の嫡祖なり、一日示衆云、欲得恁麼事、須是恁麼人、既是恁麼人、何愁恁麼事、いはゆるは恁麼事をえんとおもふは、すべからくこれ恁麼

△辨、リ下割
云、八字ナシ、
割云、此下異
本ニ洞山宗の
嫡祖なりノハ
字アリ可割

△辨、事下割云、事宛恚麼者善詳也支離圖恚麼也俱不恚麼奪也俱是義理也梅齊切音釋恚女禁切音實如、此也、可、依、此、訓、也、
 △辨、事下割云、異本ニはノ字アリ不可ナリ
 △辨、那、いふ下割云、人々莫、非、恚麼人、
 △那、の下割云、量ハ
 △辨、る下割云、コト
 △辨、下割云、異ト云物モ亦非、吾我、
 △辨、那、の

人なるべし、すでにこれ恚麼人なり、なんぞ恚麼事をうれへん、この宗旨は、直趣無上菩提、しばらくこれを恚麼といふ、この無上菩提の體たらくは、すなはち盡十方界も無上菩提の少許なり、さらに菩提の盡界よりもあまるべし、われらもかの盡十方界のなかにあらゆる調度なり、なにによりてか恚麼あるとする、いはゆる身心ともに盡界にあらはれて、われにあらざるゆゑにしかありとするなり、身すでにわたくしにあらざり、いはゆる光陰にうつされてしばらくもとどめがたし、紅顔いづくへかざりにし、たづねんとするに蹤跡なし、つらつら観ずるところに往事のふたたびあふべあらざるおほし、赤心もとどまらず片片として往來す、たとひまことありといふとも、吾我のほとりにとどこほるものにはあらず、恚麼なるに無端に發心するものあり、この心おこるより、向來もてあそぶところをなげすてて所未聞をきかんとねがひ、所未證を證せんともむる、ひとへにわたくしの所爲にあらざり、しるべし恚麼人なるゆゑにしかあるなり、なにをもてか恚麼人にてありとする、すなはち恚麼事をえんとおもふによりて恚麼人なりとするなり、すでに恚麼人の面目あり、いまの恚麼事をうれふべからず、うれふるもこれ恚麼事なるが

下割、不、了、會、時、ノ
 △辨、那、麼、下割云、現成スルコト
 △辨、那、麼、下割云、事現成
 △辨、那、麼、下割云、非、一、切、所、量
 △辨、麼、下はチなるもニ作ル、割云、異本三處なるもチは一字作
 △辨、者、下割云、者、字、衍、也
 △辨、那、り、下割云、出、子、西天、第四祖、優婆塞、多、傳、梵天、僞、也

ゆゑにうれへにあらざるなり、また恚麼事の恚麼あるにもおどろくべからず、たとひおどろきあやしまるる恚麼ありとも、さらにこれ恚麼なり、おどろくべからずといふ恚麼あるなり、これただ佛量にて量すべからず、心量にて量すべからず、法界量にて量すべからず、盡界量にて量すべからず、ただまさに既是恚麼人、何愁恚麼事なるべし、このゆるるに聲色の恚麼は、恚麼なるべし、身心の恚麼は恚麼なるべし、諸佛の恚麼は恚麼なるべきなり、たとへば因地倒者のときを恚麼なりと恚麼會なるに、必因地起の恚麼のとき、因地倒をあやしまざるなり、古昔よりいひきたり、西天よりいひきたり、天上よりいひきたれる道あり、いはゆる若因地倒、還因地起、離地求起、終無其理、いはゆる道は地によりてたふるものは、かならず地によりておく、地によらずしておきんことをもとむるは、さらにうべからずとなり、しかあるを擧括して大悟をうるはしとし、身心をもぬくる道とせり、このゆるるもしいかなるか諸佛成道の道理なると問著するにも、地にたふるものの、地によりておくがごとしといふ、これを參究して向來をも透脱すべし、末上をも透脱すべし、正當恚麼時をも透脱すべし、大悟不悟、却迷失迷、被悟礙被

既則墮在毒海ナリ
 △辨、下割云、大悟
 △辨、下割云、却迷
 △辨、那、下割云、恚事ノ
 △辨、那、下割云、モ
 △辨、那、下割云、我今
 △那、ら、下割云、向上
 △那、下割云、活路トハ轉處云

迷礙、ともにこれ地にたふるものの、地によりおくる道理なり、これ天上天下の道得なり、西天東地の道得なり、古往今來の道得なり、古佛新佛の道得なり、この道得さらに道未盡あらず、道虧闕あらざるなり、しかあれども恚麼會のみにしてさらに不恚麼會なきは、このことばを參究せざるがごとし、たとひ古佛の道得は、恚麼つたはれりといふとも、さらに古佛として古佛の道を聞著せんとき、向上の聞著あるべし、いまだ西天に道取せず、天上に道取せずといへども、さらに道著の道理あるなり、いはゆる地によりてたふるものもし地によりておきんことをもとむるには、無量劫をふるに、さらに、おくべからず、まさにひとつの活路よりおくることをうるなり、いはゆる地によりてたふるものは、かならず空によりておき、空によりてたふるものは、かならず地によりておくるなり、もし恚麼あらざらんば、つひにおくることあるべからず、諸佛諸祖、みなかくのごとくありしなり、もし人ありて恚麼とはん、空と地と、あひさることいくばくぞ、恚麼問著せんに、かれにむかひて恚麼いふべし、空と地と、あひさること十萬八千里なり、若因地倒、必因空起、離空求起、終無其理、若因空到、必因地起、離地求起、

終無其理、もしいまだかくのごとく道取せざらんば、佛道の地空の量いまだしらざるなり、いまだみざるなり

【聞解】 雲居山の欲得、恚麼如是一大事、恚麼如是人でなければ得られぬ外のものならぬ、既是のものはや、人々が恚麼人で、我何人ぞなるゆるに、手前に氣がわかぬけれども恚麼事を得て居るから、我等は恚麼事はないから、など、愁ること無い○此の宗旨は……直に有無の脇道によらず正直に無上道に越く、これを恚麼と云、其の直題目にする菩提々々道體くらくありさまは無上甚深にして、盡十方界も、この菩提量の無量なるより見れば少き許りである○我身も……今日の人々我身も盡十方界中の調度道具なり○身心ともに……身心共に、十方界の中にあはれて、手前のでない、身は四大和合の借り物、私ならず、心は念々流れて不_レ停、これ身心われにあらざるなり○たとへまことの誠意誠心ありと云とも、吾我の邊にといまらぬ○吾我は我と我所と二つなり、恚麼なるに……無端に發心してより、向來今迄あやまりて身心を我ともてあそびしを、なげすて、未聞をきかんと願ふ、よひ方になるなりこれが私の手作りに仕出す所爲に非ず、人々甚大久遠成佛の恚麼人なるゆるになり○恚麼事……未聞を聞かんことをもひ、未證を證せんことをもふは、恚麼人でなければならぬ、餅で無ければ無いと云たよなもの○また恚麼事の未聞を聞き、未證を證する、恚麼あることも昔よりすて、恚麼事あることなれば、驚き怪しむことでない、又あやしむことでない、又あやしみ驚くも、別物でない恚麼なり○佛量にての佛知見にて、恚麼かふじやと量るでなし、心量では量られぬ○盡界の菩提量は、盡界にあまるものなれば、盡界量でもはかられぬ○たゞ恚麼人なるゆるに、恚麼事を愁ざるなり、恚

麼人が恁麼事を愁れば、相手を取るから何愁と云なり○このゆるに……世間の聲色等の恁麼如_レ是なるに直趣菩提の恁麼なり諸佛の出世恁麼なるも直趣の恁麼なり一切物が二つ並ばぬゆるに○因_レ地倒……因_レ地起つときに因_レ地倒たを恠まぬ、倒るも起るも地は離れぬ、迷悟共に一心地に在てすることゆゑに、迷ても恁麼地は離れぬ、演若_レが頭に迷時に、頭が外へ往かぬ、氣がついて悟る時でも、外から來たでない、頭が二つないから、迷悟ともに頭は離れぬ、故に恁麼事を愁ることは無い○古昔よりいひきたるは因_レ地倒因_レ地起……出處を引て明すこれは出_レ西域記_二委出_レ涉典錄_一○しかあるを舉拈して……昔より道ひ來る舉拈して倒れた地より起ち入_レ法_二見_レれば、やはり迷の心が其のまゝ、美しき大悟なり、今まで手前のものと思ふて居る身心を脱落の道理としたもの悟りと云て何ぞ新に來るでない○諸佛……成道も前度に成せぬ道を今日成す、これ因_レ地倒た身心を因_レ地起て透脱するなり、一心地の上の縁起で起るも倒るゝも自由じや、こゝを參究して○向來身で無いを身と思ふ向來前度の迷をも透脱し、すこしよく行くするの末上をも正當恁麼の向來と末上とを離れた今日の中も三つながら透脱すべし○大悟不悟……已下虧闕あらざるまで一心地、迷悟にして外の物でない云道理を明す○恁麼會のみ……因_レ地倒因_レの地起とのみ合點して○不恁麼會……不恁麼會とは地によらぬと會すると云こと○古佛として……手前が古佛となり古佛の道所を道取する時は因_レ地倒と云より向上の道着がある○ひとつの活路……空によりてをきるとは心地は本より空なるもの、空は本より心地なり、ゆるに空によりて倒るるものは心地の空寂より起る○十萬八千里とは心地と真空とは道の里に離れたての不可思議で、昔より誰も往て見たものはない。

【私記】 とは 直趣無上菩提とは、欲得須是の人事の他岐にわたらざるなり」菩提の盡界よりもあま

るとは、逼塞するをいふ、盡界の不會藏なり」參本に更可_レ盈_レ溢_レ於菩提盡界_一と譯せり」往事のふたたびあふべからざるとは、古今の恁麼なり」心佛の不可量なるには、聲色等の恁麼なるべきなり」倒起の恁麼なるには、あやしまざる恁麼なるべし」參本いはく、古昔西天天上道來道者、原出_レ付法傳_三及馬鳴、大莊嚴論_九中、大異_レ今所_レ引、而今所_レ引、如_レ傳燈第一、各自往檢、此箇四句、謂_レ一時位前後際斷也と」この大解脱の倒起を譬水_二淺_一とし、草鞋錢とするがゆるに、しかあるを舉拈して大悟をうるはしとし、身心をもぬぐる道とせりといへり」諸佛成道は、たふれたるがおきたるなり」參究の恁麼なるがゆるに透脱すべきなり」道得は不剃汝等なり、ゆるに道未盡あらず、道虧闕あらずといふ、これ一口吞盡の宗なり」恁麼會に偏頗あらざるがゆるに不恁麼會なり」向上の聞著あるべしとは、ただ恁麼會不恁麼會のみにあらず、進歩すべしとなり」地によりておくるは、空によりておくるなり、空によりておくるは、地によりておくるなり、地空の親友なるによりてしかあるなり」十萬八千里は、無孔鐵鎚なり、なんの空闕かこれあらん」しらざるなりみざるなりは、親切ならざるなり」

【御抄】 五家を立る事不可然之由先々事舊了、今洞山宗と云事、必し立宗の分にあらず、只其人を賞翫する時も、宗と云詞を付る事有之歟、今の詞其の義にあるべき歟。

恁麼と云事、古き經教等には此詞いと不見歟、新渡書籍等に此詞見歟、所詮_レの如しと云詞也、直趣無上菩提、しばらく是を恁麼と云とあれば、今是以無上菩提名、恁麼歟、然者今の示衆の詞は欲得無上菩提須は無上菩提也既是無上菩提也何愁無上菩提と云道理也尤有其謂。

無上菩提と、盡十方界と非相違法、盡十方をしばらく無上菩提と云歟、少許也とは云はるゝなり、盡十方界を無上菩提と云ひ、無上菩提を盡十方界と云を、しばらくあまるとも、不足とも仕なり、今我

等も彼盡十方界の中に、あらゆる調度也と云、我等は恁麼の我等也、非吾我已下、文に見たり。此詞は無常を觀する小乗の詞に似たり、是は生老病死の姿我と云べきにあらず、老も病も死も皆私の進退にあらず、時節に被轉もてゆく道理を、凡夫の上世間の法猶如此況佛法の上に我を不可立と云、道理を云はむ料也、能々可心得事也。

片々として往來すとは、光陰にうつさるゝ事を云歟、まことありと云とも、吾我の見にとまるべからずと云也。

無端に發心する物ありとは、發心と云は、いかにも物一を縁として、發心する也、此發心は非縁起歟、盡界を指て發心と談す、全於身彼が發心するとは不云也、ゆへに無端に發心するとは云はるゝ也、此心をこるより向來もてあそぶ所を、なげすつとは、假令三乗の教を説く學者、小乗權門の族、乃至世俗塵勞に心をそむる人、如此心をなげすて、所未聞をきかむ、所未證を證せむと、もとむる人の事を如此云なり、所詮法を聞法を證せむとむる心あらむ、人は私の所爲にあらず、是併宿善開發する恁麼人なりと云心なり、尤憑教事也、已下如文。

如文驚と云も、あやしむと云も、皆恁麼也、ゆへに如此いはるゝ也。

まことに此恁麼の道理、佛量心量法界量にて不可量々也、只既是恁麼人、何愁恁麼事なるべき也、佛量にも心量にも、法界量にも、盡界量にも、不可量とは、只一物にとゞこをる所を、如此被嫌なり、是則說似一物即不中の道理也。

前には、佛量、心量、法界量、盡界量等に量すべからずとあり、今は聲色の恁麼は恁麼なるべし、身心乃至諸佛の恁麼は恁麼なるべしとあり、打ちがへたる様に聞ゆ、是は例一物に不滯すち一又其下に聲色の恁麼は恁麼なるべし、身心諸佛の恁麼は、恁麼なるべしと云道理あるなり、如常さればこそ、說似一物の道理なれ、一物にもあたらぬ道理か、又一物にもあたる道理なるべし。

是は所詮倒も地、起も地、々の上の倒起なれば、共にあやしむべからずと云也。

是は梵王詞也、此因縁は佛入滅已後一百年の後、優婆塞多(南那和修弟子)出現して化衆生給に、魔縁彼化導を妨げむとて伺程に、或時慧眼給けるを見て、最上の隙也とて、魔縁華縵を尊者の御頸にかけたり、尊者眼覺て見給に、はや、天魔の所行也と思て、或時に魔王に語て此替に、汝に瓔珞を與べしと種々かざりたる、華縵を頸に被懸たり、魔縁悦で歸て見れば、人狗蛇の頭なり、如此不淨の物共をあみつらねて被懸たり、くさくけがらはしき事無限、欲取之以神力被懸たる上は、なじかはぬくべき、總不被取、周章之餘參梵王、歎申程に我不可叶、十力の弟子の所行をば難難取、何度も佛弟子の所行をば、佛弟子に參てこそ歎き申さぬとて、其時此詞を以て被教訓、付此教、又參優婆塞多、歎申程にさらば、汝如此の魔心を懺悔して、可受三歸、然者可取放云云、仍天魔忽懺悔歸伏して、受五戒之後此華縵を被取棄了、此梵王詞は欲得恁麼事須是恁麼人、既是恁麼人、何愁恁麼事の詞に不違なり、只恁麼詞與他詞の替目許也、已下如文。

是は地に倒るもの、地に依てをくる道理、いづれもあたるべき也、其の故はいかなるか、諸佛成道の道理なると問著するも、諸佛ならぬ物ありて成道するにあらず、諸佛の諸佛なる道理にて、諸佛成道とは云はるゝ也、是則地に倒物、地に依てをくる道理にあたるべし、迷を點じて悟となすと云ふも、迷はあしくさとりはいみじと、思習はしたりつればこそ、迷悟各別には覺ゆれ、迷悟已差別なからむ上は、迷を點じて悟になると云も、地に倒物依地起道理也、故大悟不悟却迷失迷被悟礙被迷礙とも

云はるゝなり、被迷礙被悟礙とは、全迷全悟といはむが如し、全迷なる理が被迷礙とはいはるゝなり。

是は前に因地倒もの依地起、さらに離地起と求るに無其理けむと云、道理道未盡にあらず、道虧闕あらざる也とあげられて、但此一筋許を非可談、會の所に不會の道理、即心是佛の上に非心非佛の道理あるが如く、此詞の上に又いふべき道得ありと云ふ心也是は左に可被舉也。

是は因地倒物は、必因地起と云道理、許を心得は、猶不足あり、此詞の響く所が、因空起と云道理が甚深なる也と、先師被釋之也、因空起詞は、先師御詞なり、空與地只一物非相違法、ゆへに如此云はるゝ也、天地懸隔なむと云て、世間には不相應事に仕ふ詞なり是は凡見也、不足爲證、大唐國裏に一人の不悟者を求むるに難得也と云して、一人半人の中に、大唐國裏を求め、心むべしと云し程の道理なり。

空與談せむときは、全空、地と談せむときは全地なるべし、是を空與地相去る事、十萬八千里とは云なり、此十萬八千里の詞も、丈尺等にかゝはるべからず、無縫塔の高さを、七尺八尺と云ひしが如し、世界の濶一丈等と云程のたけ也。

是は空與地、親切なる道理を、書きあらはさるゝなり。

【辨註】 辨曰、地によりて行者の地によりて倒れしを倒れましたきに倒れたり、不怪が如く、不了從本不迷者の無始世より迷ひ來れりとのみ思ひ迷ふまじきに迷へりと怪まざるなり、其所以は實に迷悟ありと思ふによりてなり、蓋夫迷悟、善惡、邪正、偏圓、是非、自他、衆生諸佛、煩惱菩提、智愚等の一切二法、皆是一自心の轉變なり、譬ば倒るも起るも、別の地なきが如し、諸人者看脚

下。

辨曰、迷も心なり、悟も心なり、因心迷心、因心悟心、譬如因地倒因地起、迷則不可悟、不可悟則不可起、當知、迷與悟同地上起倒、固不迷者如固不倒、老僧常云、無可迷而迷、不可迷之法、始より倒る地なしといへども、倒るゝ地に依て倒るが如し、無可悟而悟、不可悟之法、元より起る地なしといへども、起るは地に依て起るが如くにあらずや、喚什麼爲迷心、喚什麼爲悟心、然るを今日天下叢林師學共に生生世々迷ひ來ると思ひ、只管に坐禪工夫して悟を求むるは、譬如不倒者、故倒而求起、雖歷永劫、豈有證悟哉、只不迷悟の事を知らば、何を悟の迷を愁ん、不可倒ことを知らば、起不得を愁ふべからず、然不迷不悟、故に二乘窮兒乞食の念やみがたし、元是長者子、佛子住此地則是佛受用なることを參究看せよ、身心をもぬくる道とせりとは、若不繫縛、則不可解脱、彼沙彌道信、年始十四來體三祖曰、願和尚慈悲、乞與解脱法門、祖曰誰縛汝、曰無人縛、祖曰何更求解脱乎、信於言下大悟、摩訶衍論第九可併見。

辨曰、被悟碍被迷碍の罣碍は、水月の罣碍なり、如前所辨、起倒什麼物恁麼來、把收看。

辨曰、且問、諸仁者何謂空、何謂地、審細に工夫參究すべし、元より地に倒るゝと云地なく、又不倒の地と云もなし、人も亦爾り、定りて倒る人もなく、又不倒の人もなし、迷悟も亦爾り、人に定りて迷ふ人と云人もなく、不迷人と云人もなし、又定りて悟る人と云人もなく、不悟の人もなし、蓋夫錯て倒れて起直ると又尋常横に寝て起直るとは同か別か、是も倒て起るの道理に別ならず、然則同一身を以て同一地上に起倒する、全無別業、此喻を以て迷悟を了すべし、見聞覺知の上に迷べるを誰も迷ふまじきに迷へりとあやします、地に倒るも脚跟不點實地、故に倒るまじき地に倒るなり、

見聞覺知の上も亦爾、可_レ見を實に可_レ見様に見、可_レ聞を實に可_レ聞様に聞、則見るは見るま、聞は聞ま、誰か汝を迷はしめん、地亦爾、脚下を見て可_レ行様に行則は何れの地か汝を踢倒せしめん、然れば倒るにも實に倒る者なく、起るにも實に起る者なし、如_レ爾迷に迷の實なく、悟に悟の實なし、故に老僧云、悟は夢に餅食ふ如く、迷は夢に蛇に刺れたるが如しと、古佛所謂地によりて倒る者の地によりて起んことを求むるには、無量劫を経るとも更に起くべからず、正に一つの活路より起ることを得るなし、地によりて倒る、者は必ず空によりて起き、空によりて倒る者は必ず地によりて起るなり、若_レ恁麼あらざらんは、終に起ること得べからず、諸佛諸祖皆如是、乃至空と地と相去こと十萬八千、佛道の地空の量を審細に工夫參究すべしとの給ふ、此處眞實參玄眼目なり、地は心地なり、空は轉處なり、實能幽なることを云、以_レ是爲_レ人時、是此解義爲道すべからず、只學者をして參究せしめよ、無_レ空則不可_レ倒、不可_レ起、又無_レ地則不可_レ倒、不可_レ起、參究看せよ。

【那一寶】直趣は如_レ曰_レ直下無上菩提を以て、恁麼を釋す、爲_レ令人解易なり、無上菩提盡十方界、本より邊際なきを以て、少許とも餘るとも玉ふなり、此例の語あるは語言の窠窟を離て無礙自在の妙辨也。

世間の無常變壞人かの如何ともしがたき道理を説て、身心の吾我にあらざる旨を明し玉ふ、假令眞ありとも、吾我の邊にととほらすと、是萬法非_レ吾の宗旨、即無上菩提なり。

聲色の恁麼、身心の恁麼、諸佛の恁麼、同く共に恁麼なるべきなり、譬_レ因地倒の時迷の時なり、迷も非_レ途、恁麼なりと恁麼會なるは、悟には必_レ因地起の時なり、この時前來因地倒れんを不_レ怪なり、如何となれば、從來不_レ迷が故なり、又説實に迷悟ありと思ふ疑人は迷ふまじきに迷へりと不_レ怪は地に因て行者の倒れまじきに地に倒れたりと如_レ不_レ怪と共に通す、蓋_レ夫迷悟、善惡、邪正、偏圓、是非、自他、衆生諸佛、煩惱菩提、智慧等の一切の二法皆是一自心の轉變なり、譬_レへば倒るも起るも別の地なきが如し、看_レ脚下。

迷も心なり、悟も心なり、因_レ心迷_レ心、因_レ心悟_レ心、譬_レ如_レ因地倒因地起、不_レ迷則不可_レ悟、不_レ倒則不可_レ起、當_レ知迷與悟、同一地上起倒、固_レ不_レ迷者如_レ固_レ不倒、故云無_レ可_レ迷而迷_レ可_レ迷之法、始より倒る地なしといへども倒るは因地倒るが如し、無_レ可_レ悟而悟_レ可_レ悟之法、元より起る地なしといへども起るは地に因て起るが如くに非_レずや、喚_レ什麼_レ爲_レ迷_レ心、喚_レ什麼_レ爲_レ悟_レ心、然るに多少か生生世世迷來と思ひ、只管に坐禪功夫して、悟を求むれば、譬_レ如_レ不倒者故倒而求_レ起、雖_レ歷_レ永劫豈_レ有_レ證悟_レ哉、只不_レ迷恁麼の事を知らば、何の恁麼の迷を愁ん、不_レ倒ことを知らば起_レ不得を不可_レ愁、從本_レ不知_レ迷悟_レ故に、破_レ轉劫_レ身心をもする道とせりなは、苦_レ不_レ繫縛_レ則不可_レ解脫、彼沙彌道信、年始十四、來禮_レ三祖_レ曰、願_レ和尚慈悲乞_レ與_レ解脫法門、祖曰誰縛_レ汝曰無_レ人縛、祖曰何更求_レ解脫_レ乎、信於_レ言下_レ大悟、摩訶衍論第九可_レ往看。

諸作成道の道理とは、諸佛の正しく諸佛なる道理を云なり、被_レ迷礙_レ被_レ悟礙_レとは、全迷全悟の宗旨なり、如_レ水月罌礙、起倒什麼物恁麼來、把得看。

恁麼會のみにして、不恁麼會なきとは、恁麼の詞を義解して平地に喫向し、轉換の活路なきなり、實に恁麼會を參究するときは、不恁麼會を參究して、轉換無礙の道著あることを可_レ知、有佛性、無佛性、非佛、佛非と云が如し、諸佛諸祖は於_レ法自在なるが故に、一隅に滯らず、宗門の代語、別語、拈語等是なり。

空と地と相去こと十萬八千、可謂七尺八尺と、是同耶別耶、摸^シ索鼻孔^ヲ看よ、かくのごとく道取せざれば、佛道の地空の量いまたみざるなりとは、凡そ佛祖の言句を見には、自ら出身轉路を可^レ知、句下に死在すること勿れ、故に佛道の地空の量を提起し、學者に指示して參得透せんことを要す、慈悲の弄處なり。

△辨、け下て
わ二字ナシ、
割云、異本て
あ二字アリ
△辨、靜下割
云、涅槃廿五
師子吼品、云
何寂靜、寂靜
有^レ二、一者心
靜、二者身靜、
身寂靜者終
不^レ造作身三
種惡、心寂靜
者亦不^レ造作
意三種惡、是
則名爲^レ身心
寂靜、身寂靜
者不^レ親近四

第十七代の祖師、僧伽難提尊者、ちなみに伽耶舍多これ法嗣なり、あるとき殿にかけてある鈴鐸の風にふかれてなるをききて、伽耶舍多にとふ、風のなるとやせん、鈴のなるとやせん、伽耶舍多まふさく、風の鳴にあらず、鈴の鳴にあらず、我心の鳴なり、僧伽難提尊者いはく、心はまたなにぞや、伽耶舍多まふさく、ともに寂靜なるがゆるるに、僧伽難提尊者いはく、善哉善哉わが道をつぐべきこと子にあらずよりはたれぞや、つひに正法眼藏を傳付す、これは風の鳴にあらざるところに、我心鳴を學す鈴のなるにあらざるとき、我心鳴を學す、我心鳴はたとひ恚麼なりといへども、俱寂靜なり、西天より東地につたはれ、古代より今日にいたるまで、この因縁を學道の標準とせるに、あやまるたぐひおほし、伽耶舍多の道取する、風のなるにあらず鈴のなるにあらず心のなるなりといふは、能聞の恚麼時の正當に念起あり、この念起を心といふ、この心念もしなくば、いかでか鳴響を緣せん、この念によりて

聞を成ずるによりて、聞の根本といひぬべきによりて、心のなるといふなり、これは邪解なり、正師のちからをえざるによりてかくのごとし、たとへば依主隣近の論師の釋のごとし、かくのごとくなるは佛道の玄學にあらず

衆、不^レ預^レ四
衆所有事樂、
心寂靜者終
不^レ修習貪欲
惡、是則名
爲^レ身心寂靜、
或有^レ比丘、
身雖^レ寂靜、心
不^レ寂靜、有^レ
心寂靜、身不^レ
寂靜、有^レ身心
寂靜、又有^レ身
心俱不^レ寂靜、
身寂靜、心不^レ
寂靜者、或
有^レ比丘坐禪
靜處、遠^レ離四
衆、心常積習
貪欲、是
名^レ身寂靜、心
不^レ寂靜、心寂
靜、身不^レ寂靜
者、或有^レ比
丘親^レ近四衆
國王大臣、斷

【聞解】 ともに寂靜なるゆるるに……風も鈴も心も三つながら空なり、前に云ふ心鳴と云は、この俱寂する處に緣起の上で鳴るなり、故に鳴るが鳴るにて無い畢竟空なり○此れ風の鳴にあらず、さる處に已下たとひ恚麼なりまで我心のなるなりと云ふ處を舉して○たとひ恚麼に心が鳴るといへども、俱寂靜で心も風も鈴も空なり、緣起無生の故に已下破^レ邪解、邪解の者は此方で聞、正當に念が起る、この心念が根本となりて聞く、これが無れば向の鳴る響を緣することはならぬゆるるに、聞の本とは心念じやから心が鳴ると云と心得た○これ緣起無生のみ、空なる道理をしらぬ○依生……教家には六離合釋と云ふ義あり、其中で依主釋と云は、眼識でいはく眼之識と云はこれ依主釋なり、眼が有るから識もあるゆるるに、眼は識之所依也、識の爲には主の如くにして勝なり、識は臣の如くにして劣なり、故に依主釋とす、隣近とは四念處觀でいはく身は不淨と觀するは智慧なり、四念といはずに四慧と云はずは智慧は物を譯釋する、念は覺知して忘れぬもの其義隣近なるゆるるに云なり○これにはみな優劣を立て釋す三空の道理には非ず。

【私記】 とは、影室いはく、所詮風も鈴も心も寂靜も無上菩提正法眼藏を指て云なり、云云、さらに心の一法を取出て爲^レ根本、彼が是に緣するなむとは不可心得、以此道理、俱寂靜とは云なりととやせん、とやせん、あらず、あらずは、師弟の俱寂靜なり、風吹鈴鳴の我心鳴なり、ゆるるにあらざると

貪恚癡は是名、心寂靜身不寂靜、身心不寂靜者、謂諸凡夫何以故、凡夫之人、身心雖靜、不能深觀、無常無樂、無我無淨、以是義、故、凡夫之人、不能寂靜、身口意業、一聞提輩犯四重禁、作五逆罪、如是之人、亦不得名、身心寂靜、
 △辨、る下、下によりて、がゆゑに、其下割云、異本ニによりてニ作ル
 △辨、那、で

ここに學すといふ、餘文しるべし」
 【御抄】 是は今の問答を打任て西天東地、古代より、今日まであやまると云は、風鈴をふく、ひびきありとも、心に縁せずば、いかでか是を聞べき、然者心の根本をさして如此答すると心得たり、是を邪解也ときらふ也、所詮、風も鈴も心も寂靜も、無上菩提、正法眼藏を指て云なり、此上は風と談する時は、全風、鈴と談する時も全鈴、心も又如此、此寂靜とは云也、さらに心の一法を取出て、爲根本、彼是に縁するならむとは不可心得、此道理俱寂靜とは云也、ひびく所が、又風鳴鈴鳴吹鳴鳴々とも云べしとあり、能々可了見事也、委見于文。

【那一寶】 寂靜者、涅槃經二十師于吼品云、何寂靜、寂靜有二、一者心靜、二者身靜、身寂靜者終不造作身三種惡、心寂靜者亦不造作意三種惡、是則名爲身心寂靜、身寂靜者不親近四衆、不預四衆所有事業、心寂靜者終不修習貪欲恚癡、是則名爲身心寂靜、或有比丘身雖寂靜、心不寂靜、有身心寂靜身不寂靜、又有身心俱不寂靜、身寂靜心不寂靜者、或有比丘坐禪靜處、遠離四衆、心常積習貪欲恚癡、是名身心寂靜心不寂靜、心寂靜身不寂靜者、或有比丘親近四衆國王大臣、斷貪恚癡、是名身心寂靜身不寂靜、身心寂靜者謂佛菩薩身心不寂靜者、謂諸凡夫、何以故、凡夫之人、身心雖靜、不能深觀、無常、無樂、無我、無淨、以是義、故、凡夫之人、不能寂靜身口意業、一聞提輩犯四重禁、作五逆罪、如是之人、亦不得名、身心寂靜。
 風の鳴は我心の鳴なり、鈴の鳴は我心の鳴なりと云はんとして、風の鳴にあらざるところに、我心鳴を學す、鈴の鳴にあらざるとき我心鳴を學すとの玉ふなるべし、たとひ風鳴鈴鳴心鳴にもあれ、俱に寂靜なりとなり。

下割云、此念
 △辨、り下と字アリ其下割云、會取スル△那、割云、ト會取スル△辨、師下割云、教人△那、割云、六離合釋一依主二持業三有財四相違五帶數六隣近云詳演義鈔廿五法相家
 △辨、せん下割云、異本せしニ作ル

しかあるを佛道の嫡嗣に學しきたれるには、無上菩提正法眼藏これを寂靜といひ、無爲といひ、三昧といひ、陀羅尼といふ、道理は一法わづかに寂靜なれば、萬法ともに寂靜なり、風吹寂靜なれば、鈴鳴寂靜なり、このゆゑに俱寂靜といふなり、心鳴は風鳴にあらざ、心鳴は鈴鳴にあらざ、心鳴は心鳴にあらざと道取するなり、親切の恁麼なるを究辨せんよりは、さらにただいふべし、風鳴なり、鈴鳴なり、吹鳴なり、鳴鳴なりともいふべし、何愁恁麼事のゆるるに恁麼あるにあらざ、何關恁麼事なるによりて、恁麼なるなり

【聞解】 佛道の嫡嗣に……已下本意を説く○一法わづかに……寂のときは諸法皆寂なり、風吹寂なれば鈴鳴も心鳴も寂なり○心鳴は風鳴……この心鳴とは俱寂靜なる處縁起無生の心鳴なりこの心鳴は風鳴に非ず三空なり、この處親切たしかに究辨すれば○風鳴なり風も鳴なる鈴も鳴る其物々々で獨立なり、鳴るが鳴るで、相手無しに鳴る、相手ないものは畢竟空寂なり、一つ／＼に相手を離れた時は、すべて恁麼事なるゆるるに、風は風で恁麼如し是鳴り、鈴は鈴で恁麼如し是鳴る○何愁恁麼事と云は、人恁麼事を得て居るから愁ることは無いと云、これはまた恁麼事を持て居る、恁麼事を主にして出身する處がある○何關恁麼事と云は、恁麼事を、いろはす、さはらすかまはずと云こと、これは恁麼事を透脱したる脱體の處ゆるるに風も鈴も鳴るにまかせて鳴るなり。

【私記】 とは、心鳴は、心鳴なり、風鳴鈴鳴にあらざししかあれば風鳴鈴鳴の外、心鳴なきがゆるるに、

心鳴は心鳴にあらざるなり」恁麼時の正面には影像あらざるをもて、風鳴なり、乃至鳴鳴なり」何愁何關は、恁麼事の獨立周行なり」

【御抄】 是は何愁恁麼事と云へば、只一筋に恁麼なればなむぞ、恁麼の事を愁むと許、云たるやうにきこゆるを、何關恁麼事なるによりて、恁麼なるなりとは、風鳴なるべきか、鈴鳴なるべきか、心鳴なるべきか、いづれにあづかるべきぞと、慙うけたる詞也、非不審、何字如例いづれにもあたるべき也、説似一物即不中理也。

【辨註】 辨曰、鳴は是什麼物恁麼來心は鳴か不鳴か有耳則聞取焉。

辨曰、一法寂靜なるに通すれば萬法寂靜なり、寂靜なるものは是什麼、故に風吹寂靜なれば鈴鳴寂靜なり、是以心鳴は風鳴にあらす、心鳴は鈴鳴にあらす、心鳴も亦心鳴にあらすと道取するなりとの玉ふ、然則什麼物が是鳴と親切に恁麼なるを究辨せんには更に云ふべし、風鳴なり鈴鳴なり、吹鳴なり鳴々なりと、此鳴一字參學の眼目なり。

辨曰、此段に所言は、前に恁麼會のみにして、不恁麼會なきは、此言葉を參究せざるが如きとあるを以て見るべし、何愁恁麼事とは、是恁麼會なり、恁麼あるにあらすとは、是不恁麼會なり、何關恁麼事とは、是不恁麼會なり、恁麼なるなりとは、是恁麼會なり、當知是を恁麼會のみにして不恁麼會なきにあらす、不恁麼會のみにして恁麼會なきにあらすと云、恁麼時、不恁麼、不恁麼時、恁麼、恁麼非恁麼、不恁麼非恁麼、恁麼不恁麼、兩處無認朕根、是向上聞著道著なり、何愁何關、此箇四字の轉換を辨寫すべし。

【那一實】 鳴は是什麼物恁麼來、心は鳴か不鳴か、有耳則聞取焉、一法寂靜なるに通すれば、萬法

鳴靜なり、鳴靜なるものは是什麼ぞ、故に風吹寂靜なれば、鈴鳴寂靜なり、是以、心鳴は風鳴にあらす、心鳴は鈴鳴にあらす、心鳴も亦心鳴にあらすと道取するなりとの玉ふ、然則什麼物が是鳴と親切に恁麼なるを究辨せんには更に云べし、風鳴なり、鈴鳴なり、吹鳴なり、鳴鳴なりと、此鳴の一字參學の眼目なり。

此段に所言は、前に恁麼會のみにして、不恁麼會なきは、此言葉を參究せざるが如しとあるを以て、可_レ見、何愁恁麼事とは、是恁麼會なり、恁麼あるにあらすとは、是不恁麼會なり、何關恁麼事とは、是不恁麼會なり、恁麼なるなりとは、是恁麼會なり、當知是を恁麼會のみにして、不恁麼會なきにあらす、不恁麼會のみにして恁麼會なきにあらすと云ふ、恁麼時不恁麼、不恁麼時恁麼、恁麼非恁麼、不恁麼非恁麼、恁麼不恁麼、兩處無認朕根、是向上聞著道著なり、何愁何關四字の轉換を辨寫すべし。

第三十三祖大鑑禪師未剃髮のとき、廣州法性寺に宿するに、一僧ありて相論ずるに、一僧いはく、旛の動ずるなり、一僧いはく、風の動ずるなり、かくのごとく相論往來して休歇せざるに、六祖いはく、風動にあらす、旛動にあらず、仁者心動なり、二僧ききてすみやかに信受す、この二僧は西天よりきたれりけるなり、しかあればすなはちこの道著は風も旛も動もともに心にあると、六祖は道取するなり、まさにいま六祖の道をきくといへども、六

△辨、那、道
下割云、取

△辨、は下割
云、只其語句
ノミヲ取テ

△辨、し下割
云、古佛因三什
摩、除心一
字、五フヤ此
處宗乘ノ眼目
參學ノ筋骨ナ

祖の道をしらず、いはんや六祖の道得を道取することをえんや、爲甚麼恁麼道、いはゆる仁者心動の道をききて、すなはち仁者心動といはんとしては、仁者心動と道取するは、六祖をみず、六祖をしらず、六祖の法孫にあらざるなり、いま六祖の兒孫として、六祖の道を道取し、六祖の身體髮膚をえて道取するには、恁麼いふべきなり、いはゆる仁者心動はさもあらばあれ、さらに仁者動といふべし、爲甚麼恁麼道、いはゆる動者動なるがゆるるに、仁者仁者なるによりてなり、既是恁麼人なるがゆるるに、恁麼道なり

【問解】 大鑑禪師は唐高宗之賜號也○廣州法性寺に於て印宗法師請涅槃經故に建、刹竿幡、二僧其幡を見て問答するなり○相論往來……此往來南泉之公案に吾與汝往來する者是とある、同意問答往來之義也、往問也、來は答也、六祖いはく……六祖二僧の論を判釋するなり仁者心動者根境識の三縁で動と見る三縁を離して見れば動くものは無い、今心動と云は暫啼きを止る爲に云なり、三縁共寂靜なる故に實は心動でも無い○信受は實に尤と吞込むなり○西天より來るは印宗法師は大德故に西天よりも聽徒が來るなり○この道著……六祖の道著は風幡動ともに唯心で、心の外に法なし萬法唯心の所現なる故に○まさに今……六祖の道取をきけども六祖の道取の本意を知らぬ、いはんや六祖の道をほせた處を道取することはならぬ○仁者……六祖の仁者心動と云道取を聞て六祖の言葉の通り、仁者心動といはんとして仁者心動と道取するは、六祖を不見なり、なせなれば六祖は止啼爲にこそ心動といへ、本意は

心動でもない、三縁寂靜なる故に、風も幡も心も動きはせぬ、然るを心動と云ふは不見六祖也○六祖の身體……六祖の全體を我物に心得て道取するには仁者動とは、世間で仁者心動と云ひたがるから、心字を除く、心は劫石移動の日有るとも會て無動不動沙汰故に、それはさもある、かまわぬ仁者動で其元が動くなり、どうして走なれば、動者動で動く者は何ぞと返して見るに、動く者は無い、宏智の所謂起滅紛々は何物ぞの意、これでは仁者と動者と二つあるやうに聞ゆるから、仁者は仁者人、そこ元はやはり其元○動と云ふ面目を換へるで無い、五道輪轉しても本來の面目は改めず○既是恁麼人……動者動で有うが、仁者動で有うが、既に是恁麼、汝も如是、吾も如是、佛も一切衆生も如是、乃至七顛八倒皆恁麼なるゆるるに、動者動、仁者仁すべて足下のくつろがぬことじや。

【私記】 とは 參本いはく、是即不知大師道、風也幡也、共赤心片片而親切仁者心動と、仁者心動と道取するとは、念起の心とおもへるなり「さもあればあれとは、それなりこれなりの心動なり」仁者動、動者動、仁有仁、これ心の玲瓏なり」

【御抄】 六祖未剃髮の時と云へば、未傳法只尋常人なりし時を指て云かと覺えたり、已に在俗の昔傳法傳衣し御き其已後事也、傳法已後家出也、一僧の心地は、いかに風吹とも、幡なからんには不可動と云歟、一僧の心地には幡ありとも、不被吹風爭可動と云か、是を六祖は、非風動、非幡動、仁者心動也と被仰は、前の風鳴鈴鳴を心鳴と有しが如く、幡動も、風動に、心の念起也と、六祖は被仰と心得は邪見也、二僧聞て速に信受すとあれば、六祖の如本意心得たりけるか、こゝには不分明をばつかなし。

是は六祖の仁者心動の道を聞て、打任せたる心と此心を心得て、此心が動すると思て仁者心動と道取

するは、六祖を不見、しらず、法孫に非ずと被嫌なり、實六祖争凡夫所具之妄心を、心者心動の心と可被仰、勿論事也。

六祖の御心地の、仁者心動とは、とて今義を被述、是は方丈御詞也、所詮仁者動と云べしとは、仁者心動と云へば、猶心は所具の法と心えぬべき分もありぬべきを、仁者動と云へば、仁者を動と談ずれば、心より縁起すると云僻見は止也此動又彼が是を動すると云ふ義にあらざれば、動者動と云道理也、この理なるゆへに、仁者仁なるべし、風も旆も、仁者心動も、只一法の上の道理なるべし〇欲得恁麼事、須是恁麼人、既是恁麼人何愁恁麼事と云ふ、既是恁麼人なる人なるゆへに、右に所舉の道理が如此云はるゝ也。

【辨註】 辨曰、二僧の速疾に信伏する處、西來意の消息あり、一念轉處同於本得なり。辨曰、恁麼人は聞得て點頭すべし、雖然多くは此道理會不得ならん。

【那一寶】 二僧の速疾に信伏する處、西來意の消息あり、一念轉處同於本得なり。

仁者心動と云はんとしては、仁者心動と道取するとは、是上の段に所謂、能聞の恁麼時の正當に念起あり、この念起を心と云ふ、此心を聞の根本と云ふの邪解と一轍なり、故に六祖をみず、六祖をしらずと貶し玉ふなり。

仁者動と云べしと因什麼除心字玉ふや、多くは心は所具の法と認め、動は心念より縁起すると邪解するを轉換する宗乘の眼目なり、仁者動と云とも、こゝ彼こと動すると云義にあらざれば、動者動なり、仁者仁なりと脱體の宗乘を示し玉ふ、風も旆も仁者心動も恁麼人の恁麼道なり。

六祖のむかしは新州の樵夫なり、山をもきはめ水をもきはむ、たとひ青松の

下に功夫して根源を截斷せりとも、なにとしてか、明窓のうちに從容して照心の古教ありとしらん、澡雪たれにかならふ、いちにありて經をきく、これみづからまちしところにあらず、佗のすすむるにあらず、いとけなくして父を喪し、長じては母をやしなふ、しらずこのころもにかかれりける一顆珠の乾坤を照破することを、たちまちに發明せしより老母をすてて知識をたづぬ、人のまれなる儀なり、恩愛のたれかからん、法をおもくして恩をかくするによりて、棄恩せしなり、これすなはち有知若聞、即能信解の道理なり、いはゆる智は人に學せず、みづからおこすにあらず、智よく智につたはれ、智すなはち智をたづぬるなり

【聞解】 六祖の昔は樵夫なれども、八十生の知識なるゆゑに、上山山頂を極め、入水窮水底、其間山については、青松下に松の操の如く餘念なく功夫し、又は水の根源を截斷することはあれども、こゝは大珠禪師語に、上山須窮頂、入海須盡底とあるを踏んで云〇なにとしてか……樵夫の事なれば、どうして僧堂明窓下に、從容と安靜にゆるりと、佛祖の教を以て、手前の心を照す様なことは無い、又樵夫のことなれば、手前の心地の無明を澡雪するやうな事も誰にかならぬ、誰にも習ひはせぬ、然るに市に在て經を聞く……應無所住は不墮諸有なり、而生其心は冥應乘緣なり、これ金剛經の趣意なり、こゝで六祖大師は悟道あるなり、其由を讀經者に告げられたれば金十兩を大師に與へて、其金

△辨、雪下割云、洗滌也、莊子知北遊篇、孔子問至道老聃、老聃曰汝齋戒疏澹而心、澡雪而精神、指雪、而、知、清本、母上、無、△那、割云、洗滌之義、△辨、那、り、下割云、妙經藥草喻品ノ文

をば母の生計にして、御手前には知識に参せよと勸む、因て参^ニ五祖、〇みづからまちし……今日は市に出たら聞^レ經悟ふと自分にまちもふけたこととなく、又他の向ふ讀經者も經を讀んで人に悟らせ様とす、めはせぬ、唯だ因縁時節寂然昭著の道理なり、この金剛經の文の意を、永祖の詠歌に「水鳥のゆくもかへるも」^{不^レ墮^レ諸有}「あたとたへてされども道は」^{冥^ニ衆縁}「忘れざりけり」〇みづからもまたす他のすゝむるにあらず一切のあとたへてあれども、そこに冥に應^ニ衆縁、他讀と自の聞と因縁値遇して悟る、これを佛種も從^レ縁い起ると云〇長じて母を養ふて有りし時は自己を返照せぬ故に衣裏に善友知識の掛て置れし珠の光り輝いて天地を照破することを不^レ知蹉過して居た聞^レ經、發明して老母をすつ〇恩愛……恩愛は色身を調養する恵みゆゑに、世間では重し、法は三世に通達して法身を調養するゆゑに、出世間では法の恩より重きはなし、四恩の中に師長の恩を最も重とす、故に今も老母をすて、知識を尋ぬるなり〇有知若聞……法に入る智慧が具してあるからは、若し聞けば其のまゝ信受するのみこむ也〇この智と云は……智よく知傳りて手前の本智が本智に傳はる、以心傳心と同じ、手前の本智が本智を尋ねあらはずなり。

【私記】とは、参本いはく、功夫截斷、樵夫三昧而已、故有^ニ而爲以下語、道^ニ奈何不^レ知也、而今有^ニ如^レ此語者、點^ニ眼今不信佛、と^レしるべし、自他を脱落するは、まことに一顆明珠の宛轉なり」影室いはく、今所談の有智と云は、全智也、以^ニ盡界談^レ智、智の外に餘物なき通理なるゆゑに、棄恩の姿も別の物を置て棄恩とは不可^レ談と、智より智につたはれ、智すなはち智をたづぬるなりとは智の脱落なり」

【御抄】是は六祖のありさまを被述也、實樵夫の業をせられしかば、青松の下に功夫する事はありとも、争明窓の内に從容して、かゝる甚深殊勝の佛法ありとしらむ、深雪たれにかならふと云也、已下如文、六祖の御行狀を被明也。

是は醉酒而臥之時、かけし珠をしらざりし喩也。

有智若聞即能信解の法華の文を、打任て人の心得る様は、有智の人、若きけば即よく信解すと云、是は智ある人は、此經を聞て能信解すと云歟、今所談の有智と云は、全智也、以^ニ盡界談、智智の外に無餘物道理なるゆゑに、棄恩の姿も、別の物を置て、棄恩とは不可^レ談、此棄恩の道理、有智若聞道理は、智が智を棄恩し、智與智若聞し、信解する也、かゝりけるゆゑに、智ならむものが、別に有てをこしける智にてはなきなり、全智なる道理なるゆゑに、恩愛をものがれ發心修行の心地もいできける也と云なり。

全智なる道理、尤如此云はるゝ也。

五百の蝙蝠は、智おのづから身をつくる、さらに身なし心なし、十千の游魚は、智したしく身にてあるゆゑに、縁にあらず因にあらずといへども、聞法すれば即解するなり、來にあらず入にあらず、たとへば東君の春にあふがごとし、智は有念にあらず、智は無念にあらず、智は有心にあらず、智は無心にあらず、いはんや大小にかかはらんや、いはんや迷悟の論ならんや、いふところは佛法はいかにあることともしらず、さきより聞取するにあらざれば、したふにあらず、ねがふにあらざれども、聞取するに恩をかくし身をわするるは、有智の身心、すでに自己にあらざるがゆゑにしからしむるなり、

△辨、く下る
ナすニ作ル割
云、異本ニ作
△妙、魚下割
云、喩ニ被^レ出
也
△辨、解下割
云、異本作^レ能
△辨、り下割
云、是聞法解
脱智
△辨、那、來
上割云、從^レ外
△辨、那、す

下割云、我心内ニ
△辨、し下割云、此△那、割云、雖、無、來處、開、花、抽、葉、コ、
△辨、那、ヤ、下割云、如今△辨、已下割云、ノ物△那、割云、ノ處知念覺

これを即能信解といふ、しらずいくめぐりの生死にかこの智をもちながらいたづらなる塵勞にめぐる、なほし石の玉をつつめるが、玉も石につつまれりともしらず、石も玉をつつめりともしらするがごとし、人これをしる、人これをとる、これすなはち玉の期せざるところ、石のまたざるところ、石の知見によらず、玉の思量にあらざるなり、すなはち人と智とあひしらすれども、道かならず智にきかるるがごとし

【開解】 五百の蝙蝠、出西域記、この蝙蝠は經を聞いて身の焼を知らず死して後成羅漢道、これ智慧が畜生の身を盡し阿羅漢の身を作りたるなり○さらに身なしとは不_三再受_三有漏身_三なり○十千游魚、出北涼曇無讖譯金光明經第四流水長子品、智したしく……この游魚は手前の智で長者について廻りたすかり度き意をあらはした、故に大象に水を擔はせ、たすけられたるなり、これ智で身を全ふすることを得たり○かうした故に向ふにある縁でも無く、又手まへに在る因にもあらずといへども、因縁値遇して聞法すれば、其ま、解し悟るなり、この因縁値遇で聞法すれば、得道する、それを譬へば、東君の手前に春を持つては居らねども、春來れば、一切萬物の上に春象が現れて、東君の化が行はる、これ春と東君と分れて分れぬ道理なり○智は有念にあらず……念と心とは水と波との譬で分かる、智は凡夫の有念有心にもあらず、又二乗の無念無心にもあらず、元より有なるものなれば縁も入らぬ、又無なれば縁に逢ふて生せぬはず、有無を離れたものゆゑに縁に逢へば生じ縁無ければ生せぬ、これは前の東君の譬で知れり、有無にあらざるものゆゑに大心小心迷悟の論にあらず、この迷悟の論ならんやで語が

切れる、いふところはいふこゝろはと云ふ程のこと、上を承る詞なり、上如_レ是所は、六祖の市へ出て法を聞く縁に遇はぬ先きは、佛法は如何なることと云ふとも知らぬ、前きより法を聞取せず、故に佛法を慕ふ心も願ふ心も無ひ、然れども聞法する縁に逢へば恩をかくして老母を捨て知識に參ず、又五百の蝙蝠は身を忘れて焼けるをも知らず、これは有智の身心すでに自己にあらざるゆゑにしかあらしむるなり、自己に本より有る物なれば法を聞くには及ばん、けれども自己にあらず因縁生なるゆゑに六祖は聞_ニ金剛經_ニ處で悟り、蝙蝠は聞_レ經終に得道するなり○しらす……聞法すれば、即能信解する本智を持ちながら、夫れを知らず生死す、譬へば石の玉を……石を身に喩へ玉を智に譬ふ、五百の蝙蝠や、十千游魚は、皆石なり、其中に法身の美玉をつゝんで居る、然れども其の玉も、五欲の身の石中につみこんであるとも不知、石も手前に玉を持て居るとも不知、氣がつかぬ、然れども、氣がついてよひ玉と知れば、これを采り調法する、然れどもこの玉が人の調法になるはずと期し待つて居らず、又石もこの中には玉がある、これは人の調法になるはずと期しましたぬ○石の今日五欲の石の身が本智の玉を持て居ると知見もせず、玉も石中に在ると思量分別もない○人と智と……人の方でも智の手前にも知らぬ、けれども其の智のあらはるゝ道理は道と本智と、がつたり逢ふてあらはるゝ所取の道は能取の智にきかるゝ、これ能所一枚に吻合するなり。

【私記】 とは 五百十千は、智の證を出さるるなり「智の無依なるがゆゑに、身なし心なし」廓落の智なるがゆゑに縁にあらず因にあらず「聞法即解することの來入にあらざるは、もとより智の渾淪轉なるがゆゑなり」去來に蹤迹なきをたとへて東君の春にあふと云「ここをもて有無迷悟の邊量を超越せり」超越せるがゆゑにいかにあることともしらす、ねがふにもあらざれども、聞法得益するなり

いふところは、因縁等を超越するがゆゑに、よく因縁をして因縁ならしむるなり」自己にあらずとは、情謂の自己なり、つくねものにあらざるをいふ」しらざれどもきかるは、人智の親切をいふ、こゝをもて玉石のたとひあるなり」

【御抄】 游魚も、智したしき身にてあるに依て、非縁因あらねども、聞法すれば、もとより智なりつるゆへに、即解する也と云也。

東君とは春を云歟、心は春が春にあふと云心也、別物の不交所を如此云也。

如文、實此智有無大小等の論にあらざるべし、勿論事也。

是も如前云、佛法いかなるとしらねば、聞取するにあらざればしたふにも、ねがふにもあらざれども、もとより此身心有智の身心なるによりて、自己にあらざるゆへに、聞法すれば、恩をまかろくし、身心をもわする、也、此道理を即能信解と云也。

是は人與智のあはひ石與玉の如しと喩に被引出也。

【辨註】 辨曰、五百蝙蝠者、爲火因、而愛好法音、不去、終命終、以此因縁、俱得入身、捨家修學、作五百阿羅漢、此緣載西域記第二、十千游魚者、金光明經、流水長者、瀉水活池中十千魚命、已復唱寶勝如來名號、復爲此魚、解說甚深妙法、依此因縁、十千魚同日命終、即生初利天、法苑珠林卷八十二、救厄部引之。

【那一實】 智は人に學せず、乃至智すなはち智をたづぬるとは、華嚴所謂、十界依正一眞智境界なる故に、智外無餘物、五百の蝙蝠は智自ら身をつくるとは、全身全智と云んが如し、十千游魚は智親く身にてある故に、因にあらず、縁にあらずとは、智を離れて別に因縁なしといへども、聞法すれば則

解するなり、今此二事を引き玉ふは、蝙蝠、游魚は、至て無智なり、聞法の因縁に依て羅漢となり、生天すること甚希有なりと思ふ、凡疑を断せんためなり、蝙蝠聃魚本より無智ならば、因何か出離せん、有智の身心なる故に、聞法則解するなり、然れば蝙蝠游魚の身と、羅漢天人の身と、有智無智の論に非ず、況や人をや○澡雪者、莊子知北游篇、孔子問至道老聃、曰汝齋戒疏淪而心、澡雪汝精神、拊擊而知○五百蝙蝠者、爲火因、而愛好法音、不去、終命終、以此因縁、俱得入身、捨家修學、作五百阿羅漢、此緣載西域記第二○十千游魚者、金光明經流水長者、瀉水活池中十千魚命、已復唱寶勝如來名號、復爲此魚、解說甚深妙法、依此因縁、十千魚同日命終、即生初利天、法苑珠林卷八十二救厄部引之。

無智疑怪即爲永失といふ道あり、智かならずしも有にあらず、智かならずしも無にあらずれども、一時の春松なる有あり、秋菊なる無あり、この無智のとき、三菩提みな疑怪となる、盡諸法みな疑怪なり、このとき永失即爲なり

【聞解】 無智は……本智の手に有ると云ふことを知らぬものは、法を聞けば聞く程疑怪するけれど、この本智は有無ならぬものなれば、有智と云ても、無智と云ても、本智の有無する沙汰は無い、けれども一時の有る時によりて、春の松になれば、うるわしくあらはる、これは有智信解の一時なり、又秋菊になれば、無智疑怪なる時もある、この秋菊なる時も、春松なる時も、其位の一時なり。

【私記】 とは、參本いはく、無智一時、總無異法、唯此疑怪而已矣、故道永失即爲、謂此箇永失、不從外來、不從內湧、菩提諸法、不向外去、非於內潛、而皆爲疑怪、斯疑怪、正當恁麼、永失全

△辨、那、怪、ヲ悔ニ作リ、辨、其下割云、悔恨也
△辨、即ヲ則ニ作ル
△辨、那、道、下割云、取
△辨、那、リ、下割云、藥草、喩品文
△辨、き下は、字アリ△那、割云、ハ
△辨、永失即

爲^レ則^レ爲^レ失^レ失^レニ作ル

機耳、と「みるべし」有無にあらざるがゆゑに、有をなし無をなして活機なり、ここをもて一時の有無といふ。春松秋菊は、有無に優劣なき各自作家の有無なるをいふ。この無智のときは、無分曉なるがゆゑに、疑怪のみなり、盡諸法みな疑怪なり、永失即爲の面目なり。

【御抄】法華の文に有智若聞即能信解無智疑怪即爲永失とあるを、心得には、有智人なれば若聞すれば、即能信解す、無智の人なれば、聞てはうたがひあやしむ故即爲永失と被嫌也と、多分取捨の詞に、此文をば心得たるなり、今義更非爾、先不審なる事は、法華は諸佛出世の本懷也、衆生成佛の直道也、已爾前の教をは置て、佛の已證を交物なく被説顯、經に有智無智ぞ、永失ぞなむと凡夫の思付たる、取捨の法をはたらかさで談せむや、能々可了見事也、此義會可有也、然者此智に有無の義あるべからざれども、春松なる有あり、秋菊なる無ありとは、只しばらく春松を有と云ひ、秋菊を無と云程の有無なるべし、ゆへに無智の時、三菩提皆疑怪となる、盡諸法皆疑怪也と云は、此有智無智、善惡勝劣の法にあらざる、ゆへに無智の時三菩提皆疑怪となるは云也、所詮三菩提を以て疑怪と疑怪を以て三菩提と云也、盡諸法、又同前かゝるゆへに、永失即爲と云、即爲永失と云べし、は猶失をいだすに似たり、永失が即爲と云時は、取捨善惡の心地は、はなるなり、如此談すれば、今の法華の有智若聞の文は、總善惡取捨の法とは不被心得、只同心也と談也、ゆへに今は被嫌と心得つる、疑怪の詞が所聞の、道所證の法を皆疑怪と談す、日來の所談に大に達するなり佛法の所談如此。

【辨註】辨曰、春松秋菊猶言三諸法、此諸法上智の發現の有無あることを、秋菊の有無との玉ふのみ、松の上にも智の有無なることあり菊も爾なり。

【那一寶】智は有無にあらざれども、無智疑悔の一時あり、有智若聞の一時あり、然れば智は必しも有無にあらざる、有無は時なり、譬へば時は春秋にあらざれども、春松なる一時あり、喫粥する時あり、秋菊なる一時あり、喫茶去の時あり、松菊有無有時の現成を云なり。

所聞すべき道、所證なるべき法、しかしながら疑怪なり、われにあらず徧界かくるるところなし、たれにあらず萬里一條鐵なり、たとひ恁麼して抽枝なりとも、十方佛土中、唯一乘法なり、たとひ恁麼して葉落すとも、是法住位、世間相常住なり、既是恁麼事なるによりて、有智と無智と、日面と月面となり。

【開解】法は二つ無いから無智の時は諸佛の三菩提も盡諸方もみな疑怪となる、この時は永失即爲で必ず聞かねばならぬ、阿耨道も證せねばならぬ、無上の法も併らみな疑怪となる。○われにあらず……疑怪となりても道と智は無くなりはせぬ、其道と智はわれ一人の受け取りて無い、徧界かくる處なし徧界みな道と智なり。○たれにあらず……疑怪と云ても法が他已になるでも無い、萬里一條鐵手で掛り無く縫罅がない、これで法に自他能所の隔歴なきを明す。○たとひ……疑怪となりて抽枝を年月を経て今時に落在するも、唯一乘法で法はすたりはせぬ徧界不藏なり、又疑怪の法となり葉落て那邊に沈溺するも是法住法位で無くなりはせぬ。○抽枝葉落は幾く廻りの生死を云ふなり。○既是恁麼、如是なる道理によりて、たとひ信解の法となり、疑怪の法となりても、日面は晝を照し明なる有智の法、月面は夜を照す暗なる無智の法、明暗ともに捨つることも取ることもならぬ法で、どちらへなりても、恁麼なる故に。

△辨、怪、悔、ニ作ル
△辨、り、下、割
云、是生而不
生義
△辨、住、下、法
字アリ
△辨、なり、下
割云、是滅
而不滅義
△辨、り、下、割
云、更有智無
智ノ隔罅ナシ
不可^レ以^レ迷
悟^レ論

【私記】とは 參本いはく、非我迄一條鐵、永失即爲盈盜全機、單傳正宗也、一切諸法一併疑怪、則非自非佗、不曾藏遍界、一條鐵萬里と疑怪の面目なるがゆるるに遍界も萬里も、われたれにあらざるなり」抽枝葉落は、途中の活計なり、しかあれども唯有なり常住なり」恁麼事なるによりて有智と無智と面皮厚三寸のみなり」

【御抄】 如文、遍界かくる、所なければ、非我道理顯然也、たれにあらざれば、萬里一條鐵と云はるる、尤有其謂。

抽枝は春葉落は秋賦、所詮抽枝と云も葉落すと云も十方佛土中唯一乘法也、是法住法位世間相常住程の事也、只同程の心也と云證據に被出なり。

既是恁麼人、何愁恁麼事の道理なるゆへに、有智無智日月面、只一物なる道理なり、已下如文。

【辨註】 辨曰、此文不易見、無智の時は、能聞の道、所證の法、俱に疑悔なりといへども、無智疑悔の我すなはち我にあらず、一切諸法疑悔なりといへども、徧界會てかくる、處なく、萬里一條の鐵圍にして、穴處なし、變易なし、如是、法華藥草喻品偈、久默斯要、不務速說、有智若聞、則能信解、無智疑悔、則爲永失の文を以て、有智無智、信解疑悔、皆會實相、如是性相、大中小等、根莖枝葉、稱其種性、各得生長、一相一味、解脫相、離相、滅相、究竟涅槃常寂滅相の道理を會通したまふ。辨曰、雪竇所謂葉落華開自有時、是此有時の眼目なり。

【那一實】 此段不易見、無智の時は、三菩提盡諸法みな疑悔なり、則爲永失なり、永失則爲疑悔、即菩提の時、能聞所證疑悔の我即非我時、徧界藏去に非ず、萬里一條鐵、無有變易なり、永失即爲疑悔永失が即爲の三菩提なりと轉換の妙言なり、法華藥草喻品偈、久默斯要、不務速說、有智若聞、

則能信解、無智疑悔、則爲永失の文を以て、有智無智、信解疑悔、皆會實相、如是性相、大中小等、根莖枝葉、稱其種性、各得生長、一相一味、解脫相、離相、究竟涅槃常寂滅の道理を會通せり。是靈雲の所謂、幾回葉落又抽枝の語を分析して用ひ玉ふ、抽枝は、有智信解の如く、葉落は無智疑悔の如し、然れども其是唯一乘法、世間相常住にして、空穴なき一條鐵の宗旨を通ず、雪竇の所謂、葉落華開自有時、又此意也、故に次の文に。

恁麼人なるがゆるるに、六祖も發明せり、つひにすなはち黃梅山に參じて、大滿禪師を拜するに、行堂に投下せしむ、盡夜に米を碓こと、わづかに八箇月をふるほどに、あるとき夜ふかく更たけて、大滿みづからひそかに碓房にいりて六祖にとふ、米白也未と、六祖いはく、白也未有篩在と、大滿つえにて白をうつこと三下するに、六祖箕にいれる米をみたひ簸、このときを師資の道あひかなふといふ、みづからもしらず佗も不會なりといへども、傳法傳衣、まさしく恁麼の正當時節なり

【開解】 六祖は樵夫で有つても、古も今も恁麼如是道理を發明せられた○白也未有篩と證明を得ざる也○みづからも知らず……六祖自らも不知、他の五祖も不會なれども、已下すめたり。

【私記】 とは 參本いはく、不知不會碓坊裡、白也無篩杖白親、三下三簸于此切、入箕米味是全身、と、みるべし」遂上黃梅間此事、碓坊八月夜垂深、入箕三簸杖三下、米白無篩佛祖心、これ子が

△辨、那、も下割云、コノも一字諸人ノ點眼藥ナリ不可ニ空看過
△那、いりてチいたりて當時節なりニ作ル
△辨、て下割云、異本ニいたりてトアル不可ナリ
△辨、法下傳字ナシ、割云、異本有ニ傳字

忘前失後なり」

【御抄】 是は五祖與六祖問答を被明也(六祖は二歳にて父にをり)法性を真如ぞなむと云へば、佛法と覺ゆ、今問答なむとは、無風情、世間世情の無何ぞぞろ事を、口に任て云たる様に聞ゆ、されば、祖師の佛法は無何いたづら事、兒が、わう、めのとがわう、雀のちうく、からすのかうく、なむと云程の事ぞ、なむと究竟長老共云とかや、此説ぞ堅固の徒事なる、をのれが理にくらからむからに、佛法をやぶるべきにあらず、罪業の至り、可恐可恐、此問答能々可了見事也、抑祖師の佛法にいたづらなる詞、又無何ぞぞろ事と相交なむや、先此一事を能々可心得居事也、佛祖のもらるる米白也未の詞いかに可心得ぞ、定子細あるらむと心を付て可參學なり、法性、真如、三昧、だらにと云はむに、聊も不可有勝劣、法性の草子にも、著衣きはむ、言談祇對、六根運用盡是法性とありき、今の米白也、未の米も真如佛性をきしてや被仰つらむ、をばつかなし、六祖の白也未有篩在の詞も、會佛法の上に不會佛法の理あり、即心是佛道理か、非心非佛と云はる、理をもや、具足すらむ、いかさまにも、祖師の佛法を無何詞ぞとて、いたづらに閑事、返々倉卒の至也、不見正師之所致也、可耻可耻、可恐可恐〇みたびひる姿諸法をあらはす義にてもやあるらむ、五祖與六祖あはひ、凡慮難測事也、實此義、自も不知、他も不會なれども、傳法傳衣の時節すでにこゝにきわまりぬ、可貴可貴。

【辨註】 辨曰、此段示教審示に照看せよ、舉藥草喻品四句文、明有智無智信解疑悔、日月月面同一自心、彼終教圓教の差別の見未亡、經論師の判釋を極談と思へる、流輩の所不知にあらず、雖然吾元古佛の宗乘今日に至て、掃土盡却せり痛哉、此六祖大師樵夫の爲體にして、佛祖的々正法眼藏の法王となり玉ふを、支那日域の師學等謂へらく、慧能は生々世々の知識なる故に、無所住の經言を聞て發

明せり、眞に非常の祖なり、各々我等は億々萬劫愚迷の凡夫にして、此一生に悟道發明することは非敢所望、只大願心を發して、後々生々般若の種子を失せざるべしと、嗟悲哉、爾等所謂億々萬劫迷倒來、那裡得箇消息來、若爾が心は世々迷ひ六祖の心は生々悟とならば、迷と悟と定法となる、是常見外道の妄計なり、若如是而不可再轉、則是斷見外道の邪解なり、心に新舊あるべからず、迷悟の定分あるべからず、故に古佛曰、智は有念無念にあらず、有心無心にあらず、況や大小乘に拘はらんや、迷悟の論ならんやと、尙又法華の文を引て、有智と無智と信と疑と失と解と我にあらず、徧界かくる、處なし、誰にあらず、萬里一條鐵なりとの玉ふ、無有餘乘、唯一佛乘、慎で諦聽せよ、故に前の六祖も發明せりとありし處にて此もの字不可看過と云は、是なり、畢竟此心何の時劫にか始まれる、舊き者か新き者か、悟れる者か迷へる者か、有者か無者か、其形段如何、可造作か不可造作か、千々萬々如何と返照せよ、其返照者を又心と云べからず、故に古佛曰、心鳴は風鳴にあらず、心鳴は鈴鳴にあらず、心鳴は心鳴にあらず、更に只云ふべし、風鳴なり、鈴鳴なり、心鳴なり、鳴々なり、又曰動者動なるが故に、仁者仁なり、既是怎麼人なるが故に、怎麼道なりと、故黃檗曰宜自看、遠近是阿誰面上事。

【那一寶】 此段舉藥草喻品四句文、明有智無智信解疑悔日月月面同一自心、是終教圓教の差別の見未亡流輩の所不知に非ず、此六祖大師、樵夫の爲體にして、佛祖的的正法眼藏の法王となり玉ふを多く謂へらく、慧能は生々世世の知識なる故に無所住の經言を聽て發明せり、眞に非常の祖なり、各各我等は、億億萬劫愚迷の凡夫にして、此一生に悟道發明することは非敢所望、此下劣の漢只大願心を發して、後後生々般若の種子を不可不失と、嗟所謂億億萬劫迷倒來者、那裡得箇消息來、若

備が心は世世迷ひ、六祖の心は生生悟るとならば、迷と悟と定法となる、是常見外道の妄計なり、若
 如^ニ是而不^レ可^レ再^レ轉、則是斷見外道の邪解なり、心に不^レ可^レ有^ニ新^レ舊、不^レ可^レ有^ニ迷^レ悟、定分、故に古佛
 曰、智は有念、無念にあらず、有心無心にあらず、況や大小乘に拘はらんや、迷悟の論ならんやと、尙
 又法華の文を引て、有智と無智と信と疑と失と解と我に非ず徧界かくるゝ處なし、誰にあらず萬里一
 條鐵なりとの玉ふ、無有餘乘唯一佛乘、慎で諦聽せよ、前の六祖も發明せりとありし處にて、此もの
 字不^レ可^レ看^レ過と云は是なり、畢竟此心何の時劫にか始まれる、舊者か新者か、悟れる者か迷へる者
 か、有者か無者か、其形段如何、可^レ造^レ作か不^レ可^レ造^レ作か、千千萬萬如何と參徹せよ、其參徹者を又
 心と云べからず、前にの玉ふ、心鳴は風鳴にあらず、心鳴は鈴鳴にあらず、心鳴は心鳴にあらず、更
 にいふべし、風鳴なり、鈴鳴なり、心鳴なり、鳴鳴なり、又曰、動者動なるが故に、仁者仁なり、既
 是恁麼人なるが故にと、黃藥曰宜^ニ自^レ看^ニ遠^レ近^レ是^レ阿^レ誰^レ面^レ上^レ事^レ也。

南嶽山無際大師、ちなみに藥山とふ、三乘十二分教某甲粗知、嘗聞南方直指
 人心、見性成佛、實未明了、伏望和尚慈悲指示、これ藥山の問なり、藥山は
 本爲講者なり、三乘十二分教は、通利せりけるなり、しかあれば佛法さらに
 味然なきがごとし、むかしは別宗いまだおこらず、ただ三乘十二分教をあき
 らむるを、教學の家風とせり、「いまの人おほく鈍致にして各各の宗旨をたて
 て佛法を度量する、佛道の法度にあらず、」大師いはく恁麼也不得、不恁麼也

不得、恁麼不恁麼總不得、汝作麼生」これすなはち大師の藥山のためにする
 道なり、まことにそれ恁麼不恁麼總不得なるゆゑに、恁麼不得なり、不恁麼
 不得なり、恁麼は恁麼をいふなり、有限の道用にあらず、無限の道用にあら
 ず、恁麼は不得に參學すべし、不得は恁麼に問取すべし、「這箇の恁麼および
 不得、ひとへに佛量のみにかかはれるにあらざるなり、會不得なり、悟不得
 なり。」

【開解】 いまの人……今時は人根鈍致にして種々の宗旨を立て佛法を度量する、これは佛道の法度に
 あらず恁麼也不得……恁麼は放行汝亦如是吾亦如是佛亦如是一切衆生亦如是とゆるす也、不得は把
 住なり、恁麼の放行も不恁麼の把住も不得なり、今一頭地上りて恁麼不恁麼把放ともに得ぬ、この
 時は手掛りが無いこゝは如何○恁麼は恁麼をいふ……恁麼は如^レ是にして凡夫を聖人に仕直さず一
 點も作り換へぬゆるるに衆生は衆生、佛は佛、山は山の如くで限りは無いと云て、又一向に無限と云で
 もない、有無を離れたるを明す○恁麼も不得……十界其位を動かぬ無所得で何にも得ることは無いこ
 の道理を參學すべし、不得は恁麼にとは正のうらは偏と參學すべしと云ふ意○這箇の恁麼は偏位、不
 得は正位で、偏正は相離れぬ、一切諸法の當體なる故に、ひとへに佛法の量に限りて拘はることで無
 い、この道理をつめていへば、會不得で何にも中に會するもの無く悟するものはない。

【私記】 とは 參本いはく、恁麼謂^ニ恁麼^一也者、恁麼不恁麼、統^ニ不得^一、以^ニ此語^一釋、承^ニ之有^ニ非有^一二

△辨、り下割
 云、非有^ニ別
 事^一然^レ也
 △辨、那、道
 下割云、得、
 用下、處
 △辨、は下割
 云、爲^ニ什麼^一
 恁麼ナルト
 △辨、は下割
 云、爲^ニ什麼^一
 不得ナルト
 △辨、佛下割
 云、事門中ノ
 法
 △辨、なり下
 割云、是恁麼
 ナリ不恁麼ナ

句、即不得也、這箇恁麼下、可知不染汚行李、と恁麼は恁麼をいふとは、恁麼にあらざる恁麼あらざれば、恁麼なるはみな恁麼なり、得と不得といづれのところにかおかんとするししかあれば有限無限にあらざる恁麼なり、恁麼の道用也、恁麼と不得と八兩たゞ半斤なるのみなり、ゆるに參學すべし、問取すべしといふ佛祖量のみにかゝはるにあらざる、不得恁麼這箇恁麼なるをもて、會不得悟不得なり

【御抄】 是は無風情、無際大師に藥山の三乘十二分教は某甲粗知、南方(六祖の御事也)直指人心見性成佛未明了、和尚我に指示給へと被仰、如文。

此詞難心得、何とあるべしとも不聞、但此詞は一向以不得道理、法を被違敷、凡佛法の道理、得不得にかゝはるべからざるゆへに、或時は以得道理佛法をとき、或時は以不得道理法を示す、今は不得の道理にて、大師藥山に被示也、恁麼の道理、尤不得なるべし、汝作廢生の詞、又不得の道理に不可違敷、盡諸法皆不得の道理なるべし。

何事を指て恁麼と云べきにあらず、はじめに無上菩提、慳是を恁麼と云とあれば、無上菩提を恁麼とさして云も、猶能所あるやうに聞る所を、恁麼は恁麼を云とあれば、總てまじる物なく、恁麼の全體なる道理聞る也、此上は有限無限の沙汰に不可及、恁麼と不得とのあはひ、親切なる道理か、恁麼は不得に參學すべし、不得は恁麼に問取すべしとはある也、此恁麼に參學すべしとある、參學の姿恁麼なるなり。

此恁麼と不得とのあはひ、佛量にかゝはれず、會不得悟不得也とは、此道理が佛量にはかゝはらず、又恁麼と不得と許にかざるべからず、會不得も悟不得もあるべし、萬物無盡に、不得の道理あるべしと云ふ心地なり。

【那一寶】 恁麼は恁麼を云とは、譬へば如是は如是と云が如し、恁麼は不得に參學し、不得は恁麼に問取す、恁麼と不得とに二種の語なし、佛量、法量、會量、悟量にあらず、只恁麼なり、不恁麼なり、總不得なり。

曹谿山大鑑禪師、ちなみに南嶽大慧禪師にしめすにいはく、是什麼物恁麼來、この道は、恁麼はこれ不疑なり、不會なるがゆるに、是什麼物なるがゆるに、萬物まことにならず什麼物なると參究すべし、一物まことにならず什麼物なると參究すべし、什麼物は疑著にはあらざるなり、恁麼來なり

【聞解】 萬物まことに一切の法はみな什麼物なる故に、佛が佛なるもので無く、衆生が衆生なるもので無い、迷が迷なるもので無い、悟りが悟りなるものでもない、萬物の上でも一物の上でも什麼物なると返照し參究すべし、什麼物は疑著の言葉ではない、恁麼來なり、什麼物の裏は恁麼、恁麼の裏は什麼物なり、こゝでよく參究すべし。正法眼藏恁麼卷聞解終

【私記】 とは、恁麼の裂破開明なるがゆるに不疑なり、恁麼の究竟窮極なるがゆるに不會なり、參本いはく、什麼物者、物々無定形、山河大地日月星辰、とみるべし。

【御抄】 是は六祖與南嶽問答詞也、此是什麼物恁麼來の詞、恁麼の草子の潤色に、尤被引出たよりありぬべし、此六祖の御詞の、是什麼物恁麼來を、不審の詞とのみ思習はしたり非爾、只法の道理を被示也、一切の諸法只是、什麼物恁麼來の道理の外不可有故、恁麼はこれ不疑也、不會なりとはある也、

△辨、那、道
下割云、取
△辨、に下割
云、一切
爾本什上有
是字
△辨、し下割
云、自己ノ

萬法の理是什麼物なるゆへに、萬物まことに必是什麼物なると可參究とはあるなり。

【辨註】 辨曰、自來にあらず、他來にあらず、佛來にあらず、祖來にあらず、況や地獄來畜生來ならんや、只恁麼來なり、目は横に鼻は豎なるのみ、計較造作すべからず。

【那一寶】 自來に非ず、他來に非ず、佛來に非ず、祖來に非ず、況や地獄來畜生來ならんや、只恁麼來なり。目は横に鼻は直くなるのみ、計較造作すべからず、見よ萬物と一物とは只廣狹を説のみなり。

【御聽書抄】 ▲洞山宗の嫡祖也と云は、宗と云へば、五家の内、洞山宗と聞ゆ不可然、都宗と云事佛家に不可云事也、天台宗、眞言宗など云にはことなるべし、是は只洞山一人の宗とする所をめぐるなり ▲欲得恁麼事と云ふ欲得は、思慮念度にはあらず、直趣無上菩提の欲得と心得べし、盡十方界も無上菩提の少許也と云ふ、菩提の盡界よりもあまるべしと云ふ、我等もかの盡十方界の中に、あらゆる調度と云ふ、身心共に盡界にあらはれて、我にあらざるゆるるとあれば、身心盡界なるべし、盡界又無上菩提なるべし、少許と云ひ、調度なむと云へば、その物の内にはらまれたる調度とも、少許とて聊なる物、一をさすにはなし、諸法實相と云ふ、實相は眞如也、佛性なり、十如是をあげては、唯佛與佛と、すでにあらはるはじめ、如是性一をめぐるとき、十あるべきもの、まづ一とは心得まじ、如是性にもれたる、諸法不可有、相體力作因縁等の九のこりたりといふべからず、少許といふも、調度といふも、たとへばこれ程なり、佛の調度は法、法の少許は佛なむといはむが如し ▲此恁麼事は、佛性沙汰のとき事舊ぬ、又佛性第二段に欲知佛性義當觀時節因縁とありし心地に、聊も不可相違、引合て可心得なり、佛性も今の恁麼何と其體差がたし、將錯就錯の詞も同じ、直趣無上菩提の詞も、同じかるべし、直趣と云へばとて、趣向の義にてはなし、此直趣は無上菩提の面目と也、悟上得悟の漢、

迷中又迷の漢も同詞なり、聲色身心も恁麼也 ▲此宗旨は直趣無上菩提、しばらく是を恁麼と云ふ、此無上菩提のていたらくは、すなはち十方界も、無上菩提の少許と云ふ、非我可取無我、衆生所々著引之令得出と云も、所詮無餘涅槃也、こなたには、生滅法、併無上菩提の法にはこぼるゝ也、いたづらに、たゞ無我と云にあらず ▲恁麼と恁麼を得むと思人と、二の物あるに似たり、これは不承師なり、不可各別 ▲不對縁而照、不觸事而知の知也、無其體を得とつかふべし、得の字恁麼人と云が如し、得の字も不用得なり ▲盡十方界も、無上菩提の少許と云は、此少許は盡十方界が、小とは心得まじ、無上菩提の大小の詞は、不可准世間也、大小にかゝはるべからざるゆへに ▲既是恁麼人、何愁恁麼事と云ふ事、上人義云、既不恁麼人也、と云たかるべし、此恁麼始終は恁麼不恁麼總不得と云事もあれども、不恁麼人と云詞あるべしとあり ▲さらに菩提の盡界よりも、あまるべしと云、此あまると云ふ、盡界と云て上に、なにかあまるべきぞと覺ゆれども、是は空は地にあまり、地は空にあまるなり、地にたふるゝもの、空にをき、空にたふるゝもの地にをくと云ふ、此空與地の間を云へば、空は地にあまり、地は空にあまる也、是を盡界よりもあまるとは可仕、欲得恁麼事の詞に、地に倒物は地によりてをくと云詞も、又地に倒ものは依空をくと云、道理もひとしき詞と心得るとき、盡界よりもあまると云、詞いでくるなり、能々心をしづめて可了見也 ▲佛量にて、はかるべからずと云は、今云佛量は、猶教家には佛をも不可用 ▲聲色恁麼と云は、すでに聲色恁麼人也、何ぞ聲色に愁むと云はむが如し ▲空與地相去事十萬八千里也と云ふ、空と地との間は、あるものか、なき物か、又空地と異なる物か、別なる物か、十萬の詞如何、西方淨土は、從是西方過十萬億土名曰極樂世界と云ふ但廣大無邊際とも云ふ、

佛土になりぬれば、無罣礙歟、然者十萬の詞、更數にも不拘、遠近にもかゝるべからざる者歟、頗不中用萬なるべし○若因地倒還因地起、離地求起、終無其理と云ふ、此心は全倒全起なり、空空全地なり、たふると云事、をくと云事、人の起倒の事をのぶるにあらず、空與地の間を、しやくする也、但如此云へば、又倒者はもれたるに似たり、能々了見するに、所詮空與地、倒者と、又倒と云詞も、起と云詞も、たゞ一なる事を示なり、是れこそ恁麼の道理も、直趣無上菩提のことはりもあきらかなれ迷悟は無上菩提の上に置いて解く、迷は衆生悟は佛ときこゆれども、生佛一如とく全の心なり▲如何是諸佛成道の道理と問はむに、やがて諸佛成道の道理と、をしかへし答せむごとくなるべし、倒地依地起と云は、空に倒者依空起と云詞なし、又空倒空に起、地倒地起と云詞なし、又倒ぬれば不起、又起たる者不倒と云詞なし、是等の詞は皆可同、其理同ゆへに▲もし人あり、恁麼問む空與地相去、いくそはくぞ、恁麼問著せむに、かれに向て恁麼云べし、空與地相去こと十萬八千里也と云は、此草子に、若因地倒必因空起、離空求起終無其理、もしいまだ如此、道取せざらむば、佛道の地空の量いまだしらざる也、いまだみざる也とあれば、すべてはかりがたし、所詮此十萬八千里は、とをしと不可心得、近と不可心得、たゞ空與空の間も、地與地の間も、十萬八千里と云べき也▲第十七代祖師僧伽難提尊者段、あるとき殿にかけたる、鈴鐸の風に被吹てなるをきいて、善哉善哉我道をつぐべきこと、子に非ずばたれぞや、我心を以て心得は鈴も風も心也と、いはむはこれ邪見也、やがて鈴を心と仕ひ、風を心と仕ふ、佛道のならひなるべし、諸法は心が所作と云事あり、以心爲根本、心なくば不可鳴と、をもふ世間の了見也、然而三界唯心の道理にて可心得也▲やがて鳴る物を心といふべし、風をも心といひ、はたをも心と云也、風のなるは非心と云義あらば、心の鳴は非心とも云義もあるべし、風も心也、

心も心也、鈴も心也と云時こそ、俱寂靜ともいはるれ○此僧伽難提尊者と、伽耶舍多との問答、世間の如くに心得る時は、似無詮、風の鳴と云たらむも、鈴の鳴と云はむも、心のなると云はむも、大方佛法の詮と不聞、俱寂靜と云ときこそ、佛法なるべけれ、故になむぢにあらずよりは、たれぞやとほめらる、三界唯心也、風も、鈴も別也といふべからず、地水火風識をなじかるべし、所詮念を心と不可思也、一心不生萬法無咎、なむと云へば鳴と思心こそ、本なれ、なむと談する附佛法の外道と云ひつべし、近代佛法は有とも思べからず、無とも思べからず、又思べからずとも思べからず、なむと云も慮知念覺をはなれざる見也▲恁麼會のみにして不恁麼會なきと云は、地に倒る者依空起と云はむがため也、起をほめ倒をなげく詞にてはなし、三世諸佛すべて、正覺已後不可起ともならふべし▲依主隣近と云は、法相宗の名目也、喩は山ちかければ、山家と云ひ、水ちかければ水郷と云はむが如し、心が主なれば、鈴をも風をも心とこそ云はめと云ふ、法相の心なるべし可然▲親切の恁麼なるを究辨せむよりはと云は、後を勝たりと云はむするには非ず、親切の恁麼ならむ時より、後は風鳴鈴吹鳴鳴鳴々と云べしとなり▲親切の恁麼なるを究辨せむよりは、さらにたゞ云べしと、いふとあれば、親切の恁麼なるを究辨せしより、このかたと心得也、さればこそ吹鳴々といふ詞もや、すぐ云はるれ、自究辨とは心得まじ▲何愁恁麼事のゆるに、恁麼あるにあらずと云は、欲得恁麼か、恁麼人とも、既是恁麼とも、今何愁ともいはるゝときに、何愁と云より、恁麼と心得べからずと也▲何關恁麼事と云は、會不恁麼ならずと云事なし、その上は實に何をかあづからむとなり、又關とあるは、風鳴鈴鳴心鳴なむと云を、あげて何關恁麼事とも云べし▲第三十三祖大鑑禪師、一僧云幡の動く也、一僧云風の動く也、六祖云風動にあらず、幡動にあらず、仁者心動也、凡は聊も佛法の心あらむ物の、此論話あ

るべき様なし、風ふけば幡動する事ぞ、縁生の法ぞ、或又業縁和合ぞ、なむと云て事ふりたり、今は風も旛も、心も三無差別の事をあかさむと也▲仁者心動と云は、仁と心とをおきていへば、仁は能、心は所となりぬべし、心と動とも又能所と聞ゆ、しかにはあらず、仁者動と云、鳴が鳴也と云同事也▲仁者心動は、さもあらばあれ、さらに仁者動といふべしと云は、すでに六祖の仁者心動の道に依て、印度の二僧は信受すと云へども、あきらむる所の詞不聞、而今先師永平寺和尚道に心の字を不加、仁者動とあり、あきらかなる所也、教の參學にも動執生疑、領解述成と云、二僧の信受は、動執生疑と云きこゆ、領解述成いまだしきを、永平寺和尚の仁者動の道すでに、述成也と云べし▲問仁者心動の心の字を略して、仁者動とある事如何、答仁者心動と云までは、身と心と各別に心得る、迷人もありぬべき所を、身心一如と體脱せむために、仁者動と云也、仁與心同なるゆへに▲古教ありとしらむと云ふ、是は古教照心と云ふるき詞あり、近代の禪僧は祖師の言句を、推度する事はあるべからず、はじめて、われとこそ、法をば得んと云ふ、尤古教照心の義にはそむくべし、佛の言句祖師の語話をこそ、よくよく校合了見すべけれ、不然者經論すべて無詮▲五百の蝙蝠とは、商人夜宿の所にして、阿毗達磨をとふるを聞て、身心を忘て、落入火死、即生天上、參佛所、五百羅漢となる、是有智若聞即能信解なり、十千游魚とは、聞法の聖者過濱、杖のさきに當て生天上、參佛所、得脱す、知は人に不學又自をこそすにあらずと云ふたとへば此義なり、無智疑悔、即爲永失と云は、十方佛土中唯一乘法ときくとき、疑悔永失は、いづれの所に置べきぞ、唯一乘法ときくが、やがて有智若聞の者にてあるなり、有智若聞の面目を尋れば、無智疑悔なるべし、このゆへに無智疑悔のものとて、永失と、世間に思が如くはあるまじ、不悟至道すと心得が如し、無智の無は佛道の無也、世間にはならはざれ▲東君

佛藏ノ怪カ

の春にあふがごとしと云は、東君とは日をも云ふ、春をも云也、東を春の方ととる、春の來ること東より來と云ふ、但春を能とせず、東を能とせず、春を所とせず、東を所とせざる也▲石の玉をつゝめるが、玉も石につゝまれりともしらす石も玉をつゝめりともしらするが如し、是は石與玉、能所各別を云にあらず、たまたも不知の道理許をとらむがため也▲米白也未と云は、是は打開所佛法はあきらめたりや、いまだしやと云間に似たり、米と云詞は、確坊にして問答あるゆへと聞ゆ、但是は佛法の得否、迷悟を問にてはなし、たゞ佛法の上にしらげたるとも、いまだしも云なるべし▲白也未有篩と云は、未達の義を答するとは心得まじ、たとへば佛は佛也、然而未成佛といひや、また眼は眼也、但不見なむと云はむが如し、いまだと云へばとて、糟糠ののこりたるとは、いひがたし▲白を打こと、三下と云は、白しと云心地が、いまだしと云心地か、これ三世不可得と云程の事也▲箕に入て米を簸と云は、米白の上の面目也、不簸つるさきは未達簸つれば、達と云はむとはあらず▲自もしらす、他も不知不會也と云は、米白の時節には、自他の知といふにも不及ものなり、石の玉をつゝむと云事此詞を聞て、打任て眞佛佛性なむとを、具足したる、我等さたらぬ程は、しらす、しらねども、ありなむと心得ぬべし、不然、こゝにはたゞ、玉不知石、石不知玉事許をあかす也、欲得慙麼事、須是慙麼人、既是慙麼人、何愁慙麼事の道理也▲米白也未と云は、又佛性をあきらめたりや、いまだしやと云に似たり▲自也未有篩在と云ふ、是又佛法をば、しり得たれども、いまださはやかならずなむと云様也、大満つえにて、白を打つこと、三下すと云ふも、師匠かさねて佛法を、もよをし、しめす心かと覺ゆ、六祖箕に入る米を、みたび簸る此時師資の道相叶と云つる時に、これ又のこる糟糠もなく、佛法を正傳すなむと心得ぬべし、是等は教家の心地、世間に佛法を談する姿也、今は不然、米白也未と云も、

白也未有飾在と云も、佛成佛すやとも云ひ、或坐禪作佛すやとも、埴豈鏡となることえてむやなむと云程のたけにて、確坊の習なれば、米の事をも箕の事をも云にてこそあれ、米の白き時をさとり、黒米は迷なむと、あしくわくる事なし、應無所住の文を聞しより、初發心して、二僧風靡の論せしとき、仁者心動と云、さとりもあらはれき、今は一向さとりの上の語也と可心得▲南嶽山無際大師段、此三乘十二分教、粗知れりとも云ひ、通利せりなむと云へば、三乘十二分教と、今の大道とを、無各別と心得合すべし、なむと云にてはなし、教の佛法は味然なし、大道を指示せよとなり▲恁麼也不得、不恁麼也不得、恁麼不恁麼總不得と云は、總不得に、とまるべからず、總得もあるべし、さてこそ恁麼の道理はのこらね▲地にたふるものは、依地をくと云ひ、因空起とも云程の詞也、又仁者動也動者動也と云程の詞なり▲佛量のみにかはるにあらすと云ふ、これは會不得なり悟不得なりと云はるなり、有限にあらすと云ふ、此有無は佛の上にく、有佛無佛、性相常然と云ふ、是は性常然、世間にも心得べし、相常然はいかなるべきぞ但性相を各別に談すればこそあれ、性相常然の詞不可違也▲六祖段、是什麼物恁麼來、この道は恁麼これ不疑也、不會なるがゆるるに、あるときに、恁麼來と不審したるにてなし、かみに恁麼して抽枝也とも、十方佛土中、唯一乘法なり、たとひ恁麼して葉落すとも、是法住法位、世間相常住也とあり、顯然の道理なり、是什麼物とあらむ、次の詞には説似一物即不中と可有かと覺れども、是什麼物なるがゆへに、萬物まことに必什麼物なると可參究、一物まことに必什麼物なると可參究、とあれば尤什麼物は疑者にはあらざる、恁麼來也と云、御詞そのいはれのがれがたし。恁麼

正法眼藏恁麼

爾時仁治三年壬寅二月二十六日在觀音導利興聖寶林寺示衆

清本無此與
△辨、那、在
下于字アリ

却還一字參

正法眼藏恁麼

填溝塞壑參却還一字

●雲居山弘覺大師者、洞山嫡嗣也、釋迦牟尼佛第三十九世法孫、洞山宗嫡祖也、佛道卷、揭示道、渾淪、本卷隨順世流布語、

●一日示衆云、欲得恁麼事、須是恁麼人、既是恁麼人、何愁恁麼事、謂欲得恁麼事、須是恁麼人、既是恁麼人、何愁恁麼事、此宗旨者、直趣無上菩提、且謂之恁麼、此無上菩提、爲體、即盡十方界也無上菩提、少許、可更盈溢於菩提、盡界、我等彼盡十方界中所有調度、由什麼知恁麼、謂身心共顯盡界、非我故知然也、身己非私命、則爲光陰所移、難暫停、紅顏去何國、尋之無蹤迹、所熟觀多往事、不可再逢著、赤心不住、片片往來、雖設使有實非滯吾我邊者、恁麼有無端發心者、自此心發、擲棄向來所、願聞所未聞、求證所未證、非偏私所爲、應知恁麼人故然、以什麼知恁麼人、即知由欲得恁麼事、而恁麼人也、既有恁麼人面目、不可愁今恁麼事、愁是恁麼事故非愁也、又不可驚恁麼事、恁麼、雖有驚怪恁麼、而更是恁麼、有不可驚恁麼也、是只不可佛量量焉、不可法界量量焉、不可盡界量量焉、只當既是恁麼人、何愁恁麼事、是故聲色、恁麼應恁麼、身心、恁麼應恁麼、諸佛、恁麼應恁麼也、本風雷辟歷已多劫、恁麼、光明恁麼新、七佛祖宗、全自己、火爐古鏡、是何身、
●譬恁麼會恁麼于因地倒者時、必因地起恁麼時、不怪因地倒也、有古昔道來、

一本作持扱
觀蓋不可疑

恁麼參註

西天道來，天上道來道，謂若因地倒，還因地起，離地求起，終無其理，謂道因地倒者，必因地起，不因地求起，不可更得也，而舉拈為得大悟端，為脫身心道，是故若問著，如何諸佛成道道理，謂如倒地者因地起，應參究之透脫向來，應透脫未上，應透脫正當恁麼時，大悟不悟，却迷失迷，被悟礙，被迷礙共是倒地者，因地起道理也，是天上天下道得，西天東地道得，古往今來道得，古佛新佛道得也，古昔西天天上道來道者，原出付法傳三及馬鳴大莊嚴論九中，大異今所引，而今所引如傳燈第一，各自往檢，宗祖立提，如恰坐不夜臺，何更接于舊耶，而今為二空少許道取，此箇四句，謂一時位，前後際斷也，宜以此意參究立提旨。

●此道得不更有道未盡，不有道虧闕也，然恁麼會而無更不恁麼會，則如不參究此言，直饒古佛道得，雖恁麼流傳，更古佛開著古佛道時，須有向上開著，雖未西天道取，不天上道取，更有道著道理也，謂因地倒者，若因地求起，經無量劫，不可更起，正因一活路得起也，謂因地倒者，必因空起，因空倒者，必因地起，若不恁麼，終不可有起，諸佛諸祖皆是也，若有人恁麼問，空之與地，相去幾許，恁麼問著，向彼應恁麼道，空之與地，相去十萬八千里，若因地倒，必因空起，離空求起，終無其理，若因空倒，必因地起，離地求起，終無其理，若未如是道取，佛道地空量未知，未見也，十萬八千里者，非異路程，律家喚錫杖號驅毒杖，云打露杖，非唯毒蛇蠅，驅逐三毒，打斷瘡漏，驅毒打露相去十萬八千里，一著落在露身露角，親友于我，親友于渠，於是乎隔。

●第十七代祖師僧伽難提尊者，因伽耶舍多是法嗣，有時聞懸殿鈴鐺，為風所吹，鳴問伽耶舍多，為風鳴耶，為鈴鳴耶，伽耶舍多言，非風鳴，非鈴鳴，我心鳴，僧伽難提尊者云，心亦什麼耶，伽耶舍多言，俱寂靜故，僧伽難提尊者云，善哉善哉，可嗣我道，自非子誰，終傳付正法眼藏，是非風鳴地學我心鳴，非鈴鳴時，學我心鳴，我心鳴雖縱恁麼而俱寂靜也，西天流傳東地，古代迄今日，此之因緣為學道標準，錯類多焉，伽耶舍多道取非風鳴，非鈴鳴，我心鳴者，能聞恁麼時，正當有念起，此念起謂心，此心念若無，爭緣鳴響，因此念因成閉，因可謂閉根本，而謂心鳴也，此邪解也，由不得正師力，如是，譬如依主鄰近論師釋，如是則非佛道，立學，依主隣近者，新譯家專用六離合釋二也，善梓于世，兩三本有之，有云，依主謂兵衛之太郎等，隣近謂京都，宇治等云云。

●然佛道嫡嗣學來，則無上菩提正法眼藏，之謂寂靜，謂無為，謂三昧，謂陀羅尼，道理則一法纒寂靜，則萬法俱寂靜，風吹寂靜，則鈴鳴寂靜也，所以道俱寂靜，道取心鳴，非風鳴，心鳴非鈴鳴，心鳴非心鳴也，自究辨親切，恁麼，更應只道，須謂風鳴鈴鳴吹鳴鳴鳴，何愁恁麼事故，非恁麼，因何關恁麼事，而恁麼也，何愁不愁也，何關猶言不繫也，不拘繫恁麼事故，非非又非非也，是故觸處脫落生涯者也。

●第三十三祖大鑑禪師未剃髮時，宿廣州法性寺，有二僧相論，一僧曰，幡動一僧曰，風動，如是相論往來不休歇，六祖云，非風動，非幡動，仁者心動，二僧聞之，速信受，此二僧自西天來，然則此道著風也，幡也，動也，共心焉，六祖則道取也，佛

己亥寫本作
仁者仁者一奈

祖如一心，即身外無餘故。恁麼更恁麼，莫錯莫錯。

●雖正今聞六祖道，而不知六祖道，況得道取六祖道得耶。為甚麼恁麼道，謂聞仁者心動道，而即道仁者心動，則道取仁者心動，不見六祖，不知六祖，非六祖法孫也。本正今聞曹谿大師，道非風動非幡動，仁者心動底，不遍參漢，謂風也幡也，本無情物，無有動意，而汝二仁者相論，即仁者心動，是無它故，為染污吾人曲耳也。是以如吾人染污聞取，道仁者心動，則道取仁者心動，是即不知大師道，風也幡也，共赤心片片，而親切仁者心動，然則測知風仁者心，幡仁者心故，仁者心動，非風幡動矣。於是進步非心動非幡動仁者風動，非心動非風動仁者幡動也，是即本光邪參也。汝等看乎禮拜得髓，信准子章，言非風幡心動信矣。

●今六祖兒孫，而道取六祖道，得六祖身體髮膚道取，則可恁麼道，謂仁者心動莫教可更道仁者動，為甚麼恁麼道，謂動者動故，由仁者仁也。既是恁麼人故，恁麼道也。本來無一物者，不重照破鏡參學也。身外無餘者，風幡心動動仁仁是喏。

●六祖昔者則新州樵夫也，窮山窮水，雖功夫青松下，截斷根源，而為什麼知從容明憲裡有照心古教。功夫截斷，樵夫三昧而已，故有而為以下語，道奈何不知也。而今有如此語者，點眼今不信佛。

●深雪慣誰，在市間經，非是所自待，非它勸。幼喪父長育母，不知繫此衣一顆珠，照破乾坤，劈頭四言，承前起後，在市以下，恁麼大信心，自舉唱也，非其自它共無因，一顆明珠繫祖師身衣之，照破恁麼乾坤法界。

佛家語

●忽自發明，棄老母而尋討知識，人希儀也。恩愛難輕，由重法輕恩，而棄恩也。是即有智若聞，則能信解道理也。謂智不學人非自發，智能流傳智，智即尋討智也。五百蝙蝠者，智自作身，更無身無心。五百蝙蝠，西域記第二十三云，罽羅都邏邑中，有窠塔波，羅漢化波爾尼仙後進之處，如來去世垂五百年，有大阿羅漢，自迦濕彌羅國，遊化至此，乃見梵志，捶訓稚童，時阿羅漢謂梵志曰，何苦此兒，梵志曰，令學聲明，業不時進，阿羅漢憇爾而笑，老梵志曰，夫沙門者，慈悲為情，感傷物類，仁今所笑，願聞其說，阿羅漢曰，談不容易，恐致深疑，汝願嘗聞波爾尼仙製聲明論，垂訓於世乎，波羅門曰，此之邑子，後進仰德，像設猶在，阿羅漢曰，今汝此子，即彼仙，猶以強識，習世典，唯談異論，不究真理，神智唐捐，流轉未息，尚乘餘善，為汝愛子，然則世典文辭，徒疲功績，豈若如來聖教，福智實滋，曩者南海濱，有一枯樹，五百蝙蝠於中穴居，有諸商侶，止此樹下，時屬風寒，人皆飢凍，聚積樵蘇，蘊火其下，煙燭漸熾，枯樹遂然，商侶中，有一賈客，夜分已後，誦阿毘達磨藏，彼諸蝙蝠，雖為火困，愛好法音，忍而不去，於此命終，隨業受生，俱得人身，捨家修學，乘聞法音，聰明利智，竝證聖果，為世福田，近迦賦色迦王與脇尊者，招集五百賢聖，於迦溼彌羅國，作毘婆沙論，斯竝枯樹之中，五百蝙蝠也，余雖不肖，是其一數，斯則優劣良異，飛伏懸殊，仁今愛子，不許出家，出家功德，言不能述，時阿羅漢說此語已，示神通事，因忽不現，婆羅門深生敬異，歎羨久之，具告隣里，遂放其子出家，以此看。

慈惠參註

三三五

●十千游魚者文本 舊金光明經第四流水長者子品 其文廣博 北涼曇讖譯及席譯云云。

●智親身故 雖非緣非因 而閉法即解也 非來非入 譬如東君逢春 智非有念 智非無念 智非有心 智非無心 況拘大小耶 況迷悟論耶 所謂不知佛法奈何 非從前聞取 則非慕非欣 而聞法輕恩忘身 有智身心 既非自己故使然也 之謂即能信解 不知幾回生死 有此智而輪徒塵勞 猶石蘊玉 不知玉蘊石 不知石蘊玉 人知之 人探之 是即所玉不期 所石不待 非石知見 非玉思量也 即如人之與智 不相知而道必為智所聞文 不傳宗旨雪中梅 打失眼睛真軼才 枯木龍吟知有智 獨體獅吼吞如來

巴亥寫本作 不由一蓋圖字 寫誤

靈草藥品

●有無智疑怪即為永失道 智非必有 智非必無 而有一時春松有 有秋菊無 此無智時 三菩提皆為疑怪 盡諸法皆疑怪 是時永失即為文 有智無智 其性非必當觀時節 之謂一時 無智一時 總無異法 唯是疑怪而已矣 故道永失即為 謂此箇永失 不從外來不從內涌 菩提諸法不向外去 非於內潛 而皆為疑怪 斯疑怪正當恁麼 永失全機耳 其為體者 疑怪恁麼運轉為作 疑怪當體 無真無俗 皆是永失 此是無性 則示永失即為 豈非三世不可得乎 試舉參而已 ●可所聞道 可所證法 併疑怪也 非我這界無所隱 非誰萬里一條鐵 雖恁麼抽枝 而十方佛土中 唯一乘法 雖恁麼葉落 而是法住法位 世間相常住 因既 是恁麼事 而有智與無智 日面與月面也文 非我這一條鐵 永失即為 盈溢全機

單傳正宗也 一切諸法 一併疑怪 則非自非它 不會藏通界 一條鐵萬里 萬里 遍界共亦如是 語脈翻身 則為自為它 豈有染污耶 故有雖恁麼乃至相常住 不能 語 雖恁麼恁麼 則非我非誰等是也 抽枝葉落 靈雲投機 偈言 三十年來尋劍客 幾回葉落又抽枝 自從一見桃華後 直至如今更不發 是也 然則知抽枝更狐疑也 葉落吐得狐涎半分也 而其劍未全不疑 而唯有一乘法 世間相常住 此之謂既是 恁麼事 於恁麼事 有智無智 藏身露影 故道日面月面 須不染汚

●恁麼人故 六祖發明也 遂即參黃梅山 而拜大滿禪師 投下行堂 晝夜確米 僅 經八箇月許 有時夜潑更闌 而大滿自潛入碓坊問六祖米白也未 六祖曰 白也未 有篩在 大滿杖打白三下 六祖入箕米三篋 是時謂師資道相契 雖自不知它不會 而傳法傳衣 正恁麼正當時節也文 不知不會碓坊裡 白也無篩杖白親 三下三篋 于此切 人箕米味是全身

●南嶽山無際大師 因藥山問 三乘十二分教某甲粗知 嘗聞南方 直指人心見性 成佛 實未明了 伏望和尚慈悲指示 是藥山問 藥山本為講者 三乘十二分教 則通利也 然如佛法無更味然 昔別宗未興 唯明三乘十二分教 為教學家風 今 人多鈍致立各各宗旨 度量佛法 非佛道法度文 今人以下 吾人命脈 參究君子 須不相錯

●大師云 恁麼也不得 不恁麼也不得 恁麼不恁麼總不得 汝作麼生 是即大師 為藥山道也 誠夫恁麼不恁麼總不得故 恁麼不得 不恁麼不得 恁麼謂恁麼也

恁麼參註

非有限道用、非無限道用、恁麼應參學不得、不得應問取恁麼、這箇恁麼及不得、非偏拘佛量也、會不得、悟不得也、恁麼謂恁麼也者、恁麼不恁麼、終不得以此語、釋承之有非有、二句、即不得也、這箇恁麼下、可知不染汚行李、

●曹谿山大鑑禪師、因示南嶽大慧禪師云、是什麼物恁麼來、此道、恁麼是不疑、不會故、是什麼物故、不疑、一二三四五、不會亦一二三四五、無邊際是也、一切諸法、觀面分明、之謂不疑、其法法底、究竟窮極、之謂不會、松不疑竹不疑、一多法法、皆是不疑、其一、法、自天何必固不會、是什麼物、親密耳、

●應參究萬物實必什麼物、應參究一物實必什麼物、什麼物非疑著、恁麼來也、什麼物者、物物無定形、山河大地日月星辰、譬如何國人、何姓、及生死去來自萬回師、

●正法眼藏恁麼應永己亥寫本

爾時仁治三年壬寅三月二十六日、在觀音導利興聖寶林示衆

寬元元年癸卯四月十四日書寫于侍者寮懷昇文

明和七年庚寅前六月二十五日下午在東羽秋田仙北郡駒形莊版見內邑釋堂山靈仙禪寺明憲下填溝塞壑參了矣回向 護法龍天善神冥助至恩慈云 本光杜多盟焚畔賜書

恁麼參註附錄

薦福雲下云直趣 恁麼、恁麼則都無別、脚足、我如是汝亦如是 此是不染汚恁麼、法法悉皆、

塵、染汚也 此土西天雲與水 什麼法、一一什麼、形色、響、何有、礙、礙、觸、處、解、脫、驚、嶺、月、光、少、林、藥、向、解、脫、底、即、今、在、斯、恁麼人作恁麼事 佛祖兒孫宜、効、佛祖、猶、歎、血、虎、起、屍、萬、里、無、寸、神、恁麼去

涉典錄

第二十九恁麼卷 ▲雲居恁麼 傳燈卷十七雲居章云、師謂衆曰、汝等師僧家、發言吐氣、須有來由、凡問事須、識好惡尊卑良賤、信口無益、傍家到處覓相似語、所以尋常向兄弟道、莫怪、不相似、恐、同學太多去、第一莫將來、將來不相似、八十老人出場屋、不是小兒戲、一言參差、千里萬里、難為收攝、直至敲骨打髓、須有來由、言語如鉗夾鉤鎖、相續不斷、始得頭頭上具、物物上明、豈不是精得妙底事、道汝知有底人、終不取次、十度擬發言、九度卻休去、為什麼如此、恐怕無利益、體得底人、心如臘月扇、口邊直得、醜出、不是汝強為、任運如此、欲得恁麼事、須是恁麼人、既是恁麼人、何愁恁麼事、學佛邊事是錯用心、假饒解千經萬論講得、天華落、石點頭、亦不干自己事、況乎其、餘有何用處、若將有限心識、作無限中用、如將方木返圓孔、多少差訛、設使攢花簇錦、事事及得、及盡一切事、亦只喚作了事、人無過人、終不喚作尊貴、將知尊貴邊著得恁麼物、不見從門入者非寶、捧上不成龍、知麼、因地而倒亦因地起、西域記云、世親菩薩初以小乘為業、兄無著託病而召世親、因開大教、謂云、及吾未死之前、讀吾所習經典、世親即讀華嚴、乃見毘盧法界普賢行海、

因生信悟，嘆曰：「可取利劍，斷吾舌根。」用明已讀小乘之失，兄止之曰：「如人因地而倒，亦因地起。昔日以舌毀於大乘，今可將舌以讚大乘。」遂入山，披覽大乘，造十地論、論成之日、大地徧震、光明洞然。傳燈錄卷一曰：「第四祖優婆塞多者，叱利國人也，亦名優波囉多，又名鄔波迦多，姓首陀，父善意，十七出家，二十證果，隨方行化，至摩突羅國，得度者甚衆，由是魔宮震動，波旬愁怖，遂竭其魔力，以害正法，尊者即入三昧，觀其所由，波旬復伺便，密持瓔珞，摩之於頸，及尊者出定，乃取人狗蛇三屍，化為華鬘，輕言慰喻，波旬曰：「汝與我瓔珞，甚是珍妙，吾以華鬘以相酬奉。」波旬大喜，引頸受之，即變為三種臭屍，蟲蛆壞爛，波旬厭惡，大生憂惱，盡已神力，不能移動，乃升六欲天，告諸天主，又詣梵王求其解免，彼各告言：「十力弟子，所作神變，我輩凡陋，何能去之。」波旬曰：「然則奈何？」梵王曰：「汝可歸心尊者，即能除斷，乃為說偈，令其回向曰：『若因地倒，還因地起，離地求起，終無其理。』波旬受教已，即下天宮，禮尊者足，哀露懺悔，迦多曰：「汝自今去於如來正法，更作燒害否？」波旬曰：「我誓回向佛道，永斷不善。」迦多曰：「若然者，汝可口自唱言歸依三寶。」云云。十七祖鈴鳴，傳燈錄第二卷十祖章出，依主隣近，華嚴經隨疏演義鈔第二十五曰：「六離合釋，一依主，二持業，三有財，四相違，五帶數，六隣近，謂一名之中有能所等互相混濫故，須明此六種之釋，復以依主等皆有離合之意故，云六離合釋。」如依主釋中以眼與識分，說為離，眼識通說為合，持業中離與識有財中，金剛與人相違中眼與耳帶數中五與五隣近中念與慧其意皆與此同，一謂所依為主，如言眼識，眼是所依為勝識，是能依為劣，將劣依勝故，名眼之識，如臣依主，能所相彰。

是為依主釋，識即持業釋也，二持謂，任持業謂業用，如說第八藏識，識是本體，藏是業用，攝用歸體，體能持用，藏即是識，故名藏識，體持業用，是為持業釋，三謂從他所有，以得其名，如言金剛，金剛本是護法之神，因執金剛寶杵，得金剛名，又如梵語，俱舍華言藏，藏有含藏之義，以其含藏文義，猶如世之庫藏能積聚財物，故名藏，將他名以顯，已是為有財釋，四謂，如說眼及耳等，體性各別，皆自為主，猶如水火不相隨順，兩別雙舉，故名相違釋，五謂法上度量，以數顯義也，如說五蘊，因數有五，帶起本數，即名五蘊，乃至二諦等法，無不皆然，體帶數量，故名帶數釋，六謂從隣近為名，如說四念住，本是以慧觀察身受心法，今云念者，慧即揀擇照了，念即明記不忘，以念與慧其義隣近故，隱慧之名，而言四念，所謂隱已從他也，又如意與識之類，皆然故名隣近釋，四念住即四念處，一觀身不淨，二觀心無常，三觀法無我，四觀法無我也，六祖壇經，委出五百編蝠，西域記第二十三曰：「罽羅都邏邑中，有窣塔波，羅漢化波爾尼仙後進之處，如來去世垂五百年，有大阿羅漢，自迦濕彌羅國遊化至此，乃見梵志，捶訓稚童，時阿羅漢，謂梵志曰：「何苦此兒？」梵志曰：「令學聲明，業不時進，阿羅漢愆爾而笑，老梵志曰：「夫沙門者慈悲為情，感傷物類，仁今所笑，願聞其說。」阿羅漢曰：「談不容易，恐致深疑，汝頗嘗聞波爾尼仙製聲明論垂訓於世乎？」波羅門曰：「此邑之子後進仰德，像設猶存，阿羅漢曰：「今汝此子即是彼仙，猶以強識，翫習世典，唯談異論，不究真理，神智唐捐，流轉未息，尚乘餘善，為汝愛子，然則世典文辭，徒疲功績，豈若如來聖教，福智實滋。」曩者南海之濱，有一枯樹，五百編蝠於中穴居，

有諸商侶、止此樹下、時屬風寒、人皆飢凍、聚積樵蘇、瀘久其下、煙燭漸熾、枯樹遂然、商侶中有一賈客、夜分已後、誦阿毘達磨藏、彼諸蝙蝠雖為火困、愛好法音、忍而不去、於此命終、隨業受生、俱得人身、捨家修學、求聞法音、聰明利智、並證聖果、為世福田、近迦膩色迦王、與脇尊者、招集五百賢聖、於迦溼彌羅國、作毘婆沙論、斯並枯樹之中、五百蝙蝠也、余雖不肖、是其一數、斯則優劣良異、飛伏懸殊、仁今愛子、不許出家、出家功德、言不能述、時阿羅漢說此語已、示神通事、因忽不現、婆羅門深生敬異、歎羨久之、具告隣里、遂放其子出家、十千游魚、北涼曇無讖譯、金光明經第四流水長者子品、初曰、佛告樹神、爾時流水長者、子於天自在、光王國內、治一切衆生無量、苦患、已令其身體平復如本、受諸快樂、以病除故、多設福業、修行布施、尊重恭敬是長者子、作如是言、善哉長者能大增長福業之事、能益衆生無量壽命、汝今真是大醫之王、善治衆生無量重病、必是菩薩善解方藥、善女天時、長者子、有妻名曰水空龍藏、而生二子、一名水空、二名水藏、時長者子將是二子、次第遊行城邑聚落、最後到一大空澤中、見諸虎狼狐犬、鳥獸多食肉血、悉皆一向馳奔而去、時長者子、作是念言、是諸禽獸、何因緣故一向馳走、我當隨後逐而觀之、時長者子遂便隨逐、見有一池、其水枯涸、於其池中多有諸魚、時長者子見是魚、已生大悲心、時有樹神、示現半身、作如是言、善哉善哉大善男子、此魚可愍、汝可與水、是故號汝名為流水、復有二緣、名為流水、一能流水、二能與水、汝今應當隨名定實、時長者子問樹神言、此魚頭數為有幾所、樹神答言、其數具足、

足滿十千、善女天、爾時流水聞是數、已倍復增益、生大悲心、善女天、時此空池為日所曝、唯少水在、是十千魚將入死門、四向宛轉、見是長者、心生特賴、隨是長者所至方面、隨逐瞻視、目未曾捨、是時長者馳趣四方、推求索水、了不能得、四顧望見有大樹、尋取枝葉、還到池上、與作陰涼、作陰涼已、復更推求是池中水、本從何來、即出四向、周徧求覓、莫知水處、復更疾走、遠至餘處、見一大河、名曰水生、爾時復有諸餘惡人、為捕此魚、故於上流懸險之處、決棄其水、不令下過、然其決處懸險、難補計、當修治、經九十日、百千人功、猶不能成、況我一身、時長者子速疾還反至大王所、頭面禮拜、却住一面、合掌向王說其因緣、作如是言、我為大王國土人民、治種種病、漸々遊行至彼空澤、見有一池、其水枯涸、有十千魚、為日所曝、今日困厄、將死不久、惟願大王借二十大象、令得負水濟彼魚命、如我與諸病人壽命、爾時大王即勅大臣、速疾供給、爾時大臣奉王告勅、語是長者、善哉大士、汝今自可至象厩中、隨意選取、利益衆生、令得快樂、是時流水及其二子、將二十大象、從治城人借索皮囊、疾至彼河、上流決處、盛水、象負馳疾走、還至空澤、池從象背上、下其囊水、瀉置池中、水遂彌滿、還復如本、時長者子於池四邊、彷彿而行、是魚爾時亦復隨逐、巡岸而行、時長者子復作是念、是魚何緣隨我而行、是魚必為飢火所惱、復欲從我求索飲食、我今當與、善女天、爾時流水長者子、告其子言、汝取一象、最大力者、速至家中、啓父長者、家中所有可食之物、乃至父母飲噉之分、及以妻子奴婢之分、一切聚集、悉載象上、急速來還、爾時二子如父教勅、乘最大象、往至家中、

白其祖父。說如上事。爾時二子收取家中可食之物。載象背上。疾還父所。至空澤池。時長者子見其子還。心生歡喜。踊躍無量。從子邊取飲食之物。散著池中。與魚食已。即自思惟。我今已能與此魚食。令其飽滿。未來之世。當施法食。復更思惟。曾聞過去空閑之處。有一比丘讀誦大乘方等經典。其經中說。若有衆生臨命終時。得聞寶勝如來名號。即生天上。我今當爲是十千魚。解說甚深十二因緣。亦當稱說寶勝佛名。時閻浮提中有二種人。一者深信大乘方等。二者毀訾不生信樂。時長者子作是思惟。我今當入池水之中。爲是諸魚說深妙法。思惟是已。即便入水作如是言。南無過去寶勝如來。應供正徧知。明行足。善逝。世間解。無上士。調御丈夫。天人師。佛。世尊。寶勝如來。本往昔時。行菩薩道。作是誓願。若有衆生於十方界。臨命終時聞我名者。當令是輩。即命終已。得上生三十三天。爾時流水復爲是魚。解說如是甚深妙法。所謂無明緣行。行緣識。識緣名色。名色緣六入。六入緣觸。觸緣受。受緣愛。緣取。取緣有。有緣生。生緣老死憂悲苦惱。善女天。爾時流水長者子。及其二子說是法已。即共還家。是長者子復於後時。賓客聚會。醉酒而臥。爾時其地卒大震動。十千魚。同日命終。既命終已。生初利天。既生天已。作是思惟。汝等以何善業。因緣。得生於此。初利天中。復相謂言。我等先於閻浮提內。墮畜生中。受於魚身。流水長者子。與我等水及以飲食。復爲我等解說甚深十二因緣。並稱寶勝如來名號。以是因緣。令我等輩得生此天。是故我等今當往。至長者子所。報恩供養。爾時十千天子。從初利天下。閻浮提。至流水長者子大醫王家。時長者子在樓屋上。露臥眠睡。是十千天子。以

十千真珠。天妙瓔珞。置其頭邊。復以十千。置其足邊。復以十千。置右脇邊。復以十千。置左脇邊。雨曼陀羅華。摩訶曼陀羅華。積至千膝。作種種天樂。出妙音聲。閻浮提中有睡眠者。皆悉覺悟。流水長者子亦從睡悟。是十千天子於上空中。飛騰遊行。於天自在光王國內。處處皆雨天。妙蓮華。是諸天子復至本處空澤池所。復雨天華。便從此沒。還初利宮。隨意自在。受天五欲。時閻浮提過是夜已。天自在光王。問諸大臣。昨夜何緣示現如是淨妙瑞相。有大光明。大臣答言。大王當知。初利諸天於流水長者子家。雨四十千真珠瓔珞。及不可計曼陀羅華。王即告臣。卿可往。至彼長者家。善言誘喚喚令使來。大臣受勅。即至其家。宣王教令。喚是長者。是時長者尋至王所。王問長者。何緣示現如是瑞相。長者子言。我必定知是十千魚其命已終。時大王言。今可遣人審實是事。爾時流水尋遣其子。至彼池所。看是諸魚。死活定實。爾時其子聞是語已。向於彼池。既至池已。見其池中。多有摩訶曼陀羅華。積聚成積。其中諸魚悉皆命終。見已即還白其父言。彼諸魚等悉已命終。爾時流水知是事已。復至王所。作如是言。是十千魚悉皆命終。王聞是已。心生歡喜。爾時世尊告道場菩提樹神善女天。欲知爾時流水長者子。今我身是。長者水空。今羅睺羅是。次子水藏。今阿難是。時十千魚者。今十千天子是。是故我今爲其授阿耨多羅三藐三菩提記。爾時樹神。現半身者。今汝身是。

涉典補記

國恁麼 ○恁麼△祖庭事苑、及玄鑑圖云、恁麼縱也、不恁麼奪也、梅膺祚釋云、恁女禁切、音賃、如此也、麼疑辭、又助聲○雲居示衆△傳燈十七、師章、示衆、殆三百字、今四句在其中○身已非私△傳燈師子尊者章云、扇寶王、仗劍問尊者曰、師得蘊空否、尊者曰、得、王曰、可我施頭、尊者曰、身非吾有、何恁於頭、王竟斬師首、白乳流高數丈○紅顏△楚辭云、朱唇皓齒、豐肉微骨、蛾眉紅顏只○イツクヘカ△一本作ニ、佳矣、前來往々、有イツクエ文、エ尙習俗、況へ乎、作ニ者、極雅古、後人寫誤也○往事△韓非子、慎君人云、春秋往事也○因地倒起△傳燈一、優婆塞多章云、若因地倒、還因地起、離地求起、終無其理、西域記云、世親初以小乘誦大乘、兄無著托病、召世親、因開大教謂曰、未讀而誦者、外道也、世親乃試讀華嚴因生信心、呀曰、可把劍斷舌以懺罪、無著曰、如人因地而倒、亦因地而起、以昔誦之舌、可讀今悔之道、遂入山披覽大乘、造十地論、論成之日、大地震動、光明璨然○十七祖、鐸鈴△見傳燈二、師章○寂靜△涅槃師子吼品云、一心寂靜、二身寂靜、曰心寂靜者、不生三毒也、身寂靜者、不著四衆事業不親近四衆也○依主近隣△華嚴隨演義章云、六離合釋、一依主釋、二持業釋、乃至六隣近釋、一謂所依爲主、如言眼識眼見所依爲勝、識是能依爲劣如臣依君、能所相依是爲依主釋、乃至六隣近釋、曰從近隣爲名、如說四念住、本是以慧觀察身受心法、今日、念者慧而卽揀擇照了、念卽明記不忘、以念與慧名、其義近隣、故隱慧之名、而言四念所謂隱已從他也、又如意與識之類、皆然故名近隣○廣州△廣皇與地八云、

廣東廣州府、禹貢揚州之南境、春秋爲南越、三國吳曰廣州、一統志七十九云、唐復置廣州總管府、天寶初、改州爲南海郡、乾元初復爲廣州○法性寺△一統志、七十九云、光孝寺、在府城之西北、舊爲乾明法性二寺、宋合爲一、改今名、慧能唐人、居廣之法性寺○仁者△維摩經、不思議品云、是華無分別、仁者自生分別、又出于普門品○風動心動△已出于禮拜得隨中○新州樵夫△一統志、八十一云、肇慶府、新興縣在府城南一百四十里、秦爲南海郡地、唐置新州、樵夫已出之○深雪△莊子、知北游云、汝齋戒疏淪、而心深雪而精神○在市間經△傳燈六祖章云、一日負新至市中、聞客誦金剛經、有所感悟○喪父養母△壇經、行由云、此身不幸、父早亡老母孤遺、移來南海、艱辛貧乏○一顆珠照破△林間錄云、茶陵郁山主、投機偈云、我有明珠一顆、久被塵勞封鎖、今朝塵盡光生、照破山河萬朵○棄恩△清信士度人經云、棄恩入無爲、真實報恩者○有智若聞△藥草品云、有智若聞、則能信受○五百蝙蝠△西域記二云、罽羅都邏邑中、有窰塔婆、羅漢化波彌尼仙後進之處也、佛滅後五百年、有羅漢、自伽濕彌羅國而至、見梵志誦誦雅童、時羅漢謂梵志曰、何苦兒乎、梵志曰、令學聲明、業不時進羅漢愆爾笑、梵志曰、仁何所笑、羅漢曰、談不容易、恐致深疑、汝嘗聞波彌尼仙、製聲明論、垂訓於世乎、梵志曰、此邑之子、後進仰德像設猶存、羅漢曰、今汝此子、卽是彼仙、翫習世典、不究真理流轉未息、尙乘餘善、爲汝愛子、世典文字、徒疲功績、豈若如來聖教、福智真滋、曩者南海之濱、有一枯樹、五百蝙蝠、於中穴居、有諸商人、止此樹下、時屬

風寒、人皆飢凍、聚積樵蘇、蓮火其下、煙燭漸熾、枯樹遂燃、商侶中、有一賈客、夜分已後、誦阿毘達磨藏彼諸蝙蝠、雖為火困、愛好法音、忍而不去、於此命終、隨業愛生、俱得人身、捨家修學、乘聞法音、並得聖果為世福田、近迦膩色伽王、與協尊者、招集五百賢聖於迦濕彌羅國、作毘娑沙論、斯並枯樹中之五百蝙蝠也、余雖不肖、其一數、以是知其優劣良異、飛伏懸殊、仁今愛子、不許出家、出家功德、言不能述、時羅漢說斯語已、示現神通忽不見、梵志深生敬異、歎羨久之、真告隣里、遂放其子出家○十千游魚△北涼譯、金光明經、流水長者品、今撮要云、爾時流水長者、見一池、其水枯渴、有十千魚、時長者生大悲心、兼得樹神告示、先取大樹枝葉、蔭涼池上、次至大王處借二十大象與大皮囊、盛水負象、渴充池中、又取家中飲食、散著池中、與魚食之、請一比丘、讀誦大乘方等經典、說十二因緣法、爾時十千游魚、同日命終、同生初利天、還至流水長者家、其十千天子、以十千真珠天妙瓔珞、諸天具、天華、供養流水、爾時流水、今釋迦是也○東君△爾雅云、日名東君、離騷篇名、注云、日神也○石蘊珠△文選陸機賦云、石蘊玉而山輝、水懷珠而川媚○無智疑怪△藥草喻品偈句○抽枝△劉畫觀量云、枳棘之生、數寸而抽枝、豫章之植、百尺而蔭柯、靈雲偈云、幾回葉落亦抽枝○有智無智△藥草品字、雜禘知之、魏志云、邯鄲淳、作曹娥碑、蔡邕題其背云、黃絹、幼婦外孫、齏臼、揚修見直下悟之、曹操行三十里、方解得、歎曰、有智無智較三十里○確米八月△傳燈五祖章云、師知是法器、乃呵曰、著槽廠去、能禮足而退、便入確房、服勞於杵臼

之間、晝夜不息、經八月也○米白未有餘△會元、五祖章云、晝夜、祖潛詣確房、問曰、米白也否、能曰、白未有餘、祖於確以杖三擊之○藥山問、三乘△此一則出于有時篇中○本為講者△會元、藥山章云、師年十七、依朝陽西山慧照禪師、出家納戒於衡岳希操律師、博通經論、嚴持戒律、○曹溪問南嶽△說似一物○義雲師著語云、直趣○又頌云、吾如是汝亦如是、此土西天雲與水、鷲嶺月光少林菴、恁麼人作恁麼事、恁麼事、小師、泉立運翁退受敬校訂 正法眼藏涉典續教卷第八

正法眼藏恁麼註解畢

△辨、持下制
云、大論二十
八明三陀羅
尼、名義集五
出其三陀羅
尼者、一聞持
陀羅尼、即是
名持、二分別
知陀羅尼、即
是義持、三入
音聲陀羅尼、
即是行持也、
然今古佛行持
二字不可爾
行佛行行佛行
也、持實相總
持也、以此觀
之、此篇無有
可辨、故不
註之、審細拜
覽究、蓋人人
自己行持、矣、

正法眼藏行持

行持

【義雲頌著】 第十六七行持 超佛越祖

順轉未休逆行藥、道先規矩與時新、覺雄斫額煙村外、十地三賢非比隣。

【面山述贊】 第十六十七行持 述云、行、即修行、持、即護持、所以修行護持發菩提

心也、夫發心修行菩提涅槃、如春生夏長秋收冬藏、若闕夏長、則餘三時豈可全哉、

行持之不可緩怠也可知焉、贊言 八大人覺、行持大綱、分之隔變、妙應無方、歷

祖規矩、諸佛憲章、永祖面目、露露堂堂、兒孫千歲順慈訓、九猿隊中鼻頭長、

【開解】 正法眼藏行事卷開解 ○修行護持と云ふこと其意は菩提道を失はぬ様に修行して究竟覺に至

るまで不退轉に護持するなり。

【那一實】 行持 那一實曰、作麼生是行持、大道通達也、佛々祖々勤修無量行持、依三人々各自行持、

現成するなり、故に行者佛行、行佛之威儀也、持者實相總持也、只箇不染汚之行持、隱顯存沒、恰

如環無端也、此篇我等が行持によりて諸佛の行持現成し、諸佛の大道通達する此道環の功德あり、

斷絶せざる故に、前後を不論、行持のある佛祖を示さるゝか、懷祥禪師書寫校正の時、前後順次に出

さば見者可易○大論二十八明三陀羅尼、名義集五出、其三陀羅尼者、一聞持陀羅尼、即是名持、二分

別知陀羅尼、即是義持、三入音聲陀羅尼、即是行持也、又華嚴經五十三出佛十一持、其第九行持、謂

如來往昔勤修一切修證妙行、無量無邊、恆不厭足、是名行持。

佛祖の大道、かならず無上の行持あり、道環して斷絶せず、發心修行、菩提涅槃、しばらくの間隙あらず、行持道環なり、このゆるるに、みづからの強爲にあらず、佗の強爲にあらず、不曾染汗の行持なり、この行持の功德、われを保任し、佗を保任す

【開解】 佛祖の大道に安住するには最上々の行持あり○道環は本出莊子其れを本として、肇法師の無明論にも出づ、環は無終中虛にして、是非の倚るべき無きを明す、今道は法、環は喻なり、道環してとは○無上の行持は、とふなれば、大道が連環して、無始無終間斷が無い、初發心より佛身に至る迄、かうしたものなり○發心……等は、春夏秋冬のごとく、一も缺てはならぬ、定つたこと、この四つ斗りならず、八相等もすなはち間斷罅隙が無い、これみな行事なり○他の強爲、他よりすゝめられて、無理にすること無、無理にするは、染汚になるゆるるにかう示す○手前に行持する功德が我れを保任する能行の我と所行の法と分れぬ。

【私記】 とは 佛祖の大道は渡驢渡馬なり、われらが喫粥了、洗盂、これ佛祖の大道なり、この喫粥し洗盂する、これ無上の行持なり、大道と行持と異名同體なり、涉典錄云、三藏法數卷四十三引華嚴經第五十三卷、出佛十一時、其第九行持、謂如來往昔、勤修一切殊勝妙行、無量無邊、恆不厭足、是名行持、と無上無邊際なり、道環は、方所にはあらざるなり、ゆるるに方所はみな道環なり、是非も、迷悟も、ことごとく道環にあらざることなし、ゆるるに得其環中、以應無窮といへり、道環は、

切忌道著なり、ものみな頭角を生ぜざるなり、このゆるるに機檢未動若爲顔、一點虛靈入道環といへり、なにはのこといたるまで、無上の行持にあらざることなきがゆるるに、道環して斷絶せずといへり、發心修行菩提涅槃、みな行持道環にあらざることなきをもて、しばらくの間隙あらざるなり、自佗の封疆を超越するがゆるる自佗の強度にあらずといふ、行持の云爲なるのみ、ゆるるに不染汚の行持なりといへり、われと佗と、ともに行持の道環に歸するがゆるるに、われを保任し、佗を保任すといへり

【御抄】 此行持の行の字、教行證の行にあらず、證を不待、ゆへに所詮以佛祖名行持也、道環とは始中終にかゝはらざる義なり、發心修行菩提涅槃と談るす事、豈も間隔なき道理なり。

【那一實】 道環、環圓成無端者、說文壁也、宏智和尚偈、機檢未動若爲顔、一點虛靈入道環。

その宗旨は、わが行持、すなはち十方の市地漫天みなその功德をかうぶる、佗もしらず、われもしらずといへども、しかあるなり、このゆるるに諸佛諸祖の行持によりて、われらが行持見成し、われらが大道通達するなり、われらが行持によりて、諸佛の行持見成し、諸佛の大道通達するなり、われらが行持によりて、この道環の功德あり、これによりて、佛佛祖祖、佛住し佛非し佛心し佛成して、斷絶せざるなり、この行持によりて、日月星辰あり、行持によりて、大地虚空あり、行持によりて、依正身心あり、行持によりて、四

△辨、て下割
云、環圓成無
端者、說文壁
也
△辨、強ヲ發
作ル其下割
云、異本作強

大五蘊あり、行持これ世人の愛處にあらざれども、諸人の實歸なるべし、過去現在未來の諸佛の行持によりて、過去現在未來の諸佛は現成するなり

【開解】 わが行持の功德を、十方市地漫天の有情無情、みな被る一人發心歸源十方虛空發心歸源と云ふ意、又一佛成……悉皆成佛と云ふも同じ○他向ふの市地漫天の法も不知、この方からも被むらんと不知して然るなり、菩薩の不招の勝友と作り、引道するも、諸佛の無縁の大悲と云も、みなこの道理で、無所得なるもの○日月の如くおれは世界を照すと思はず、此方も照さるゝとも思はず○このゆゑに諸佛の行持を順にいへば諸佛の行持の功德を蒙て我等が行持成す○逆にいへば我等が行持に……我等が行持が悪ければ諸佛の行持は今日に傳はらず○われらが行持に……上の順と逆とを一つに括て云、われらが行持によりて、彌勒下生まで道環して菩提道の斷へざる功德あり○この修行護持の功德によりて、諸佛も安住し、常住不滅なり、又佛非……佛向上を學し、佛也非なりと云も、この行持からあらはる、洞山僧問如何是れ向上の事、山曰非佛、これを雲門は佛也非也といはれた○佛成は佛成道と云ふと同じ○又廣くいへば修行力によりて日月等もあり○手前の行持が悪ければ、天地が暗くなる、亭主が無ければ家の火が消えたと云ふ道理○この行持は諸人の愛處……面白からぬ處なれども、實歸究竟の大切な處じや。

【私記】 とは わがは、行持にわがするなり、行持の漫天市地なりしらずしらすは、行持の親切なり佛祖の行持は、われらが行持なり」大道通達とは、彼此隔礙なきなり」われらが行持なるがゆゑに、開名謝滅して、不生頭角なり、ゆゑにこの道環の功德ありといへり」住非心成は、道環の功德なり、影室はいく、此外に佛行とも、佛坐とも、佛臥とも、佛身とも、佛口とも、佛鼻佛足とも、云はむが如し、ゆゑに諸法おさまらずと云ふことなきなり、と」諸法は、道環の功德にあらざることなきをもて、斷絶せざるなりといへり」その功德にもれざるを日月星辰以下にあかすなり」行持にのがることあたはざるを、愛處にあらざれども實歸なるべしといへり」三世の諸佛は、行持によりて現成するなり」

【御抄】 此我は行持の我なり。

是は諸佛諸祖と云も、我等と云も、同一體なるゆへに、如此、打ちがへて被釋なり、諸佛諸祖我等行持只一體、とりはなたるまじき道理か、如此入ちがへて云はるゝなり。

是は行持のうへの、佛々祖々、佛住佛非佛心佛成等の道理斷絶せずと云也。

日月星辰を行持と談ず、大地虛空行持也、乃至依正身心四大五蘊等皆是行持也と云なり。

過去の行持なるときは、全過去の行持なるべし、現在未來も如此、三世ともに行持なれども、過去諸佛の行持の時は、現在未來はかくるゝなり、是即行持の上の三世なるゆへに。

その行持の功德、ときにかくれず、かるがゆゑに發心修行す、その功德ときにあらはれず、かるがゆゑに見聞覺知せず、あらはれざれども、かくれずと參學すべし、隱顯存没に染汙せられざるがゆゑに、われを見成する行持、いまの當隱に、これいかなる緣起の諸法ありて行持すると不會なるは、行持の會取、さらに新條の特地に、あらざるによりてなり

【問解】 時にかくれず……修行は時にはよらず、手前の心に在る、冬じやから坐禪がなる杯と云ふ様なことでない、發心修行すれば、何時にもあらはる○又時にあらはれずとは、不藏を打反して云ふ、目で見られず、耳に聞かれぬものなり○あらはれざれども不藏とは、修行したとて、急に目前にあらはれるもので無けれども、修してゆけば、つひにかくさず、あらはるゝなり○なせに、この修行の功德は隱顯……にあづからぬものゆゑに○われを見成する行持、いま修行する當人の當行が、當隱其徳が目にも見へず、日用而不_レ知、これいかなる順縁逆縁の諸法によりて、修行すると不知不_レ會なれば○行持の會取……たとへば坐禪すれば、これ程の新條なことが目に見、特地にわざと珍しく出来たと云ふ様なことは無い。

【私記】 とは かくれず、あらはれず、發心修行し、見聞覺知せざる、ともに行持の功德なり、ゆるにあらはれざれどもかくれずと參學すべしといへり」參本はいく、其道不_レ隱有_レ不_レ會染汚修證、其道非_レ徑坦怪、故不_レ顯_レ根境所對、須_レ威儀眼礙若至行佛、若涉隱顯、則非_レ常住、即生滅法、若還隱顯、也是道環虛耳、此之爲_レ參學行持底焉」とわれらが四大の現成は、行持の全面なり」いまの當隱とは、いまも行持のいまなり、ゆるに下に行持のいまといへり、當隱の語に當顯をも具してみるべし、隱顯の當體すなはちこれ行持なり、しかあればいかなる縁起の諸法も、行持にあらざることなきがゆるに、不_レ會なるなり」ゆるはいかん、會取も行持なるがゆるに、打かはりたることにあらざるによりてなり」と徴して、決するなり」當隱の語奇なり」

【御抄】 此發心修行も、菩提涅槃を果に置いて、談する發心修行にはあらず、ゆへに隱顯存没にもかゝわらず、見聞覺知する人なきなり。

が影作、
△辨、元下割
云、異本作、無
誤元字乎
已に翻本作、
已の、
成翻本作、前

縁起は行持なり、行持は縁起せざるがゆるにと、功夫參學を審細にすべし、かの行持を見成する行持は、すなはち、これわれらがいまの行持なり、行持のいまは、自己の本有元住にあらず、行持のいまは、自己に去來出入するにあらず、いまといふ道は、行持よりさきに、あるにはあらず、行持現成するを、いまといふ、しかあればすなはち、一日の行持、これ諸佛の種子なり、諸佛の行持なりこの行持に諸佛見成せられ、行持せらるるを行持せざるは、諸佛をいとひ、諸佛を供養せず、行持をいとひ諸佛と同生同死せず、同學同參せざるなり、いまの華開葉落、これ行持の見成なり、磨鏡破鏡、それ行持にあらざるなし

【問解】 縁起は……譬へば善縁でも、惡縁でも、對_レ縁の法は、行持の功德なり、人に惡口せられ、或は輕賤せらるれば、罪が輕くなり、提婆達多是善知識なる道理あれば、順逆縁共に行持となる○行持は縁起せざる……八風吹不_レ動、對_レ縁不起、自己不變の修行護持、堅固の身心は、順縁にも逆縁にも動かぬもの○かの行持……上に云ふ、段々をみな指す、上如_レ是なる、廣大の行持は、今日の上に現成する、其れ外のこと無い、今の人人の行持なりと云ふて○我等が今日無_レ由斷_レ行持するから彼の大なる行持が現成すると元へかへる○行持のいまは……現成と云ふて、自己の本有とおしつけて有ることなしと云ふて、又○去來するものと、うろつくでも無い○行持よりさきにあるにあらずとは、

未發菩提心前にあるで無い○一日の行持を一月に及し、一月の行持を一年に及し、つひに無量劫成正覺までに及す、これ諸佛の種子なり、この行持は諸佛の現成なり、又諸佛を行持するのじや、それを行持せぬは、諸佛をいとひきらひ○諸佛を不供養なり、大般若理趣分に、發無上正等覺心、於諸如來廣設供養とある○花開……時に就ていへば、花開は春夏、葉落は秋冬なり、一切時行持の現成なり、手前の修行についていへば上に向て磨鏡上求菩提するも、又下に向ひ却來して破鏡光を晦し悟了同未悟なるも、みなこれ修行護持なり。

【私記】とは縁起は行持なるがゆゑに、行持は縁起せざるなり。參本いはく、坐禪箴、不對緣而照下云、此之照則非照了照、非靈照、不對緣爲照、有照不化緣緣是緣故、不對者、遍界不曾藏也、破界不出頭也、云云省略、以是參之行持遍界獨立、大悟參學、一切諸法、皆是大悟也、大悟豈一切諸法耶、若夫更進一步時、行持也縁起錯謬とかの行持とは、參本いはく、彼行持者、彼三世諸佛也、と自己の本有元住とは、外道の神我を計度するなり、自己といふものを一物つくねて、これは變動にわたらざる、無始より自住するものなりとおもへる僻見なり、ゆゑに下に行持よりさきにあるにはあらずといへり」外計は、自己を立てその自己より去來出入せしむるなり、餘はしるべし」

【御抄】縁起と云は、實にも行持なるべし、縁起を行持と談するゆゑに、如此云へばとて、又行持を縁起と不可談也。

今我等とさすは、行持の我也、非吾我。

打任は本有元住にかゝはると可云歟、然而今の行持のすがた、本有元住に不拘、ゆゑに自己に去來出入するにはあらずと云也、古今を超越する行持なるゆゑに。

所詮非行持、一法なき所を如此云也。

【那一寶】磨鏡、境經神秀偈曰、身是菩提樹、心如明鏡臺、時々勤拂拭、莫使惹塵埃、○破鏡、古尊宿錄卷五、華嚴靜禪師大悟却迷答語曰、破鏡不重照、落華難上枝。

このゆるゑに行持をさしおかんと疑するは、行持をのがれんとする邪心をおかさんがために、行持をさしおくも行持なるによりて、行持におもむかんとするは、なほこれ行持をこころざすににたれども、眞父の家郷に寶財をなげすてて、さらに佗國踰跼の窮子となる、踰跼のときの風水、たとひ身命を喪失せしめずといふとも、眞父の寶財なげすつべきにあらず、眞父の法財なほ失誤するなり、このゆるゑに行持はしばらくも懈倦なき法なり

【開解】このゆるゑに行持をいやがる邪心をおかすために、人見せにする行持もせぬには勝りて、これも行持なり、其れより立ち上て○行持にをむかんとするも、志するには似たれども、一念趣向すると云が、はや未跨船舷、好與三十棒で、眞父長者の財寶を捨て、他國に踰跼し、さまよふと云ふものじや、本より離れざる行持なるにをむくと云ふは、三十棒なり○踰跼の時……今迄はあらい風にもあてられぬ、長者子なれども、一念踏み迷ふて、餘處の風水にさまよふ、身命を失ふ程の目には違はねども、よく積りて見れば、三界導師の眞父の一乘寶相の財寶をすてると云はあるまじき道理なり、ゆるゑに一日の行持を太切にして、眞父の寶財を失誤せぬ様にあれとなり。

△辨、を下さしおくすなすニ作ル、割云、眞本なす二字作さしおく四字
△那、跼下割云、踰跼和語ニサマヨフ又ハウロタルト
△辨、子下割云、妙經信解品文
△辨、水下割云、風土欲水△辨、誤下するすべからずニ作ル、割云、眞本作するなり四字

【私記】とは、さしをくは、さしをきてつとめざるなり、影室いはく、是は何とあるも行持なるうへは、只いたづらに居たらむも行持なるべしと云ふ、邪心を多く人のおこすなり、其を邪心といましめらるるなり、いたづらに居も行持なればと云ふ心地を、しばらく猶これ行持を心ざすにたれどもとはあるなり、と「これは圖解くづれの、ものぐさのものなり、行持をさしをきて、懈怠懶惰ならんと擬するともがらば、われながらもさすがにやすからざれば、行持をのがれんとする邪僻をくろめんがために、へらすぐちに、行持をさしをくも行持なれば、ねるも、おきるも、行持にあらざるることなし、などいひほこるなり、これは似て非なることなり、いはゆるやぶれ大乘なり、しかあるに行持をさしをくも行持なりといへる詞の、しばらく行持の不二に似たるを、行持におもむかんとするはなほこれ行持をこころざすに似たりと、あたへて次にうばふなり」しかあれども行持は眞父の實財なるを、信の手なきがゆゑにとることあたはざれば、家卿に實財をなげすて、跨駢の窮子となるなり、これもと長者子なれども行持をのがれたるがゆゑにしかあるなり「風水はなほ活計といはんがごとし」邪家あるひはいふべし、跨駢の時節も、行持の外にあらざるがゆゑに、跨駢の正當、すなはち行持の全身本命なり、と「この僻見をおさへていはく、跨駢の活計たとひ身命を喪失するにいたらざるも、すでに眞父の實財を失誤して、逃避のやつれ相貌なり、まことに可憐者といふべし、この行持は眞父の實財なり、なげすつべきにあらず、しかるにおのれが懈怠懶惰によりて、實財は失誤するなり、あやまりといふべきのみ」影本いはく、他國跨駢の時節もまことに行持の外にはあらざれども、此時節には眞父の實財をば未得也、と「此一節文掩含多し、よくよく心をそらへてみるべし、參註きたらず、影室よし」

△那、蓋下割云、
精舎ト伽藍ヲ合シ
云也
△辨、に下割云、
異本作レ之ニ
◎編者云、本段以下
列次不同、諸本
對照表如左
(釋迦) (第二寶)
釋迦 迦葉 迦葉 迦葉 迦葉 迦葉 迦葉 迦葉
波栗 波栗 波栗 波栗 波栗 波栗 波栗 波栗
慧能 慧能 慧能 慧能 慧能 慧能 慧能 慧能
馬祖 馬祖 馬祖 馬祖 馬祖 馬祖 馬祖 馬祖
靈巖 靈巖 靈巖 靈巖 靈巖 靈巖 靈巖 靈巖
百丈 百丈 百丈 百丈 百丈 百丈 百丈 百丈
三平 三平 三平 三平 三平 三平 三平 三平
趙州 趙州 趙州 趙州 趙州 趙州 趙州 趙州
法演 法演 法演 法演 法演 法演 法演 法演
安智 安智 安智 安智 安智 安智 安智 安智
洞山 洞山 洞山 洞山 洞山 洞山 洞山 洞山
雲居 雲居 雲居 雲居 雲居 雲居 雲居 雲居
南嶽 南嶽 南嶽 南嶽 南嶽 南嶽 南嶽 南嶽
香嚴 香嚴 香嚴 香嚴 香嚴 香嚴 香嚴 香嚴
臨濟 臨濟 臨濟 臨濟 臨濟 臨濟 臨濟 臨濟
宣宗 宣宗 宣宗 宣宗 宣宗 宣宗 宣宗 宣宗
慧可 慧可 慧可 慧可 慧可 慧可 慧可 慧可
法演 法演 法演 法演 法演 法演 法演 法演
石頭 石頭 石頭 石頭 石頭 石頭 石頭 石頭

【御抄】 是は何とあるも、行持なるうへは只いたづらに居たらむも、行持なるべしと云、邪心を多人のをこすなり、其を邪心といましめらるるなり、いたづらに居も行持なればと云心地を、しばらく猶これ行持を心ざすにたれどもとはあるなり、他國跨駢の時節もまことに行持の外にはあらざれども、此時節は眞父の實財をば未得也、今の喩に尤相應せり。

【那一寶】 他國跨駢、妙經第二信解品大意。
慈父大師、釋迦牟尼佛、十九歳の佛壽より、深山に行持して、三十歳の佛壽にいたりて、大地有情同時成道の行持あり、八旬の佛壽にいたるまで、なほ山林に行持し、精藍に行持す、王宮にかへらず、國利を領せず、布僧伽黎を衣持し、在世に一經するに、互換せず、一盂、在世に互換せず、一時一日も獨處することなし、人天の閑供養を辭せず、外道の訕謗を忍辱す、おほよそ一化は行持なり、淨衣乞食の佛儀、しかしながら行持にあらずといふことなし

【開解】 領字は領納領受とつゞく○僧伽黎此に云合、亦云聚、色々あつめてあはせて作る袈裟のこと○云雜裁衣、一經とは一生を經るにつひに換へず、一衣一盂を用るのみなり○境界の質朴を示す○獨處することなきは說法教化を事とするなり○受閑供養、佛は食することいらねども、爲三人天種福、受供養、一化は一代教化と云ふこと。

石頭	安智	大智	支沙	長渡	芙蓉	大寂	天童
大智	支中	支沙	大渡	芙蓉	大寂	天童	
大智	支沙	長渡	芙蓉	大寂	天童		

【私記】とは、參本いはく、開供養者、猶言不相應、供養諸佛法、唯佛與佛事、人天貴結緣、胡爲供養眞、布僧伽黎緣、出大智度論第一卷、外道訕謗、如來示九惱、其中事也、共出與起行經等、と

【御抄】 段如文。

佛は一時一日も不獨處、開供養を辭せず、外道の訕謗を忍辱す、是を化導を爲先之故歟。

△辨、は下割
云、十二頭陀
事出三子十二
頭經又大品般
若文句大同
小異
頭陀經睡下
有來起二字
者、當作書區
△辨、名下、
僧泥沙者區
書區ニ作ル、
其下割云、異
本作僧泥者
書區
△辨、却下割
云、退也

第八祖摩訶迦葉尊者は、釋尊の嫡嗣なり、生前もはら十二頭陀を行持して、さらにおこたらず、十二頭陀といふは、一者不受人請、日行乞食、亦不受比丘僧一飯食分錢財、二者止宿山上、不宿人舍郡縣聚落、三者不得從人乞衣被、人與衣被亦不受、但取丘塚間死人所棄衣、補治衣之、四者止宿野田中樹下、五者一日一食、一名僧迦僧泥、六者晝夜不臥但坐、睡經行、一名僧泥沙者區、七者有三領衣、無有餘衣、亦不臥被中、八者在塚間不在佛寺中、亦不在人間、目視死人骸骨、坐禪求道、九者但欲獨處、不欲見人、亦不欲與人共臥、十者先食果蔬、却食飯、食已不得復食果蔬、十一者但欲露臥、不在樹下屋宿、十二者不食肉、亦不食醍醐、麻油不塗身、これを十二頭陀といふ、摩訶迦葉尊者、よく一生に不退不轉なり、如來

△辨、樹下二字ナシ
△辨、屋下割
云、屋又奧也
其中溫奧也
△辨、宿下割
云、異本作不
在樹下屋宿
△辨、あるひ
はノ四字ナシ
△辨、す下割
云、分林共坐
事出三子佛說
經

の正法眼藏を正傳すといへども、この頭陀を退することなし、あるとき佛言すらく、なんぢすでに年老なり、僧食を食すべし、摩訶迦葉尊者いはく、われもし如來の出世にあはずば、辟支佛となるべし、生前に山林に居すべし、さいはひに如來の出世にあふ、法のうるほひあり、しかありといふとも、つひに僧食を食すべからず、如來稱讚します、あるひは迦葉頭陀行持のゆるぎに、形體憔悴せり、衆みて輕忽するがごとし、ときに如來ねんごろに迦葉をめして、半座をゆづりまします、迦葉尊者如來の座に坐す、しるべし摩訶迦葉は、佛會の上座なり、生前の行持、ことごとくあくべからず。

【開解】 生前は一代の間と云ふこと〇乞食の法は、施物を四分而一分施飢者、一分施同行者、二分自受〇しかしながら、併てみな行持なり〇不受比丘僧……分錢財、四分の一を不受なり〇名僧迦僧泥は一日一食之梵語也この梵語無き本有り好し〇六者……臥すること一向に無し睡くなれば起て經行す〇三領衣は、僧伽衣と七條衣と五條衣となり〇十者……食前には菓子を食べ、飯食了ては菓子は食はず〇麻油……天竺の法香油を身に塗る。

【私記】 とは、此文、本經と不同、往檢すべし、此中、僧迦僧泥、沙耆(一作)區、これ梵語なるべし、其譯文等しるべからず、佗日可檢耳

【御抄】 段如文、迦葉頭陀と云是也、如文。

【那一寶】迦葉分牀共坐事、出佛說華手經及法鼓經。○十二頭陀事、出十二頭陀經又大品般若、文句大同小異。

第十祖波粟濕縛尊者は、一生脇不至席なり、これ八旬老年の辨道なりといへども、當時すみやかに大法を單傳すこれ光陰をいたづらにもらさざるによりて、わづかに三箇年の功夫なりといへども、三菩提の正眼を單傳す、尊者の在胎六十年なり、出胎髮白なり、誓不屍臥、名脇尊者、乃至暗中手放光明、以取經法、これ生得の奇相なり、脇尊者生年八十垂捨家染衣、域中少年、便請之曰、愚夫朽老、一何淺智、夫出家者、有二業焉、一則習定、二乃誦經、而今衰耄、無所進取、濫迹清流、徒知飽食、時脇尊者、聞諸譏議、因謝時人、而自誓曰、我若不通三藏理、不斷三界欲、不得六神通、不具八解脫、終不以脇而至於席、自爾之後、唯日不足、經行宴坐、住立思惟、晝則研習理教、夜乃靜慮凝神、綿歷三歲、學通三藏、斷三界欲、得三明智、時人敬仰、因號脇尊者、しかあれば脇尊者、處胎六十年、はじめて出胎せり、胎内に功夫なからんや、出胎よりのち、八十にならんとするに、はじめて出家學道をもとむ、託胎よりのち、一百四十年なり、まことに不群なりといへ

一本城作城請作請

△辨、知ヲ智ニ作ル

△辨、食下割云、異本作徒知飽食

△辨、者下割云、委出子付後、因緣經

ども、朽老は阿誰よりも朽老ならん、處胎にて老年なり、出胎にても老年なり、しかあれども時人の譏嫌をかへりみず、誓願の一志不退なれば、わづかに三歳をふるに、辨道現成するなり、たれか見賢思齊をゆるくせん、年老耄及をうらむることなかれこの生しりがたし、生か生にあらざるか、老か老にあらざるか、四見すでおなじからず、諸類の見おなじからず、ただ志氣を專修にして辨道功夫すべきなり、辨道に生死をみるに相似せりと參學すべし、生死に辨道するにはあらず、いまの人あるひは五旬六旬におよび、七旬八旬におよぶに、辨道をさしおかんとするは至愚なり、生來たとひいくばくの年月と覺知すとも、これはしばらく人間の精魂の活計なり、學道の消息にあらず、壯齡耄及をかへりみることなかれ、學道究辨を一志すべし、脇尊者に齊肩なるべきなり、塚間の一堆の塵土、あながちにをしむことなかれ、あながちにかへりみることなかれ、一志に度取せずば、たれかわれをあはれまん、無主の形骸、いたづらに徧野せんとき、眼睛をつくるがごとく正觀すべし

△辨、道下、にナは、死下、にナをニ作ル、割云、異本作に

△辨、志下割云、異本作一へに、こゝろさす

△辨、に下割云、強ノ字ノ和語ナリ

【開解】不屍臥、しかばねのやうに、よこねせざるなり○以輕法、取るは、かるく自由取るなり

○濫遠……濫は、まぎらかすこと、あとを清淨大衆の流類にまぎらかし、飽食することのみを知て、何にもできなかったことは有るまいと嘲けるなり○綿歷とは、綿の切れぬ如く年をへること○四見……一水四見不同なるごとく生も老も測難いから、少いの老ひたるのと云ふを論せず、法を求る志氣を専修すべし○辨道に生死あり、生死の中に辨道するで無い、辨道の中に生死あると見るべしとは、辨道の間には八千返の生死往來がこれ辨道の生死なり、生死の境界で辨道すると見るな○生來たとひいくばくの年月、六十七乃至百歳と覺知するとも、しばらく人間の精魂の活計じや、學道の消息に老若の差別は無い、塚間……この境界は塚間一堆の塵土の如し、其れを強に惜んで樂を仕たがるな○一志に度取……一志この身を度脱して取らずば誰か我れを憐ん、あはれむものは無い○無主の……この形骸は、五陰を集め四大を合して、しばらく結ぶ柴の庵りにて、獨體遍野なにもたのむ處は無い、こゝを眼睛を着け、正しく觀念すべし、こゝに露の身を嵐の山……の古歌を引く。

【私記】とは 四見すでにおなじからず等は、生非生等のさだむべからざるにいへり」參本いはく、四見已不同、生不生、老不老、乃至死不死等也、と辨道に生死をみるとは、辨道中に生死快便難逢なり、唯有辨道、無生亦無死の宗なり、辨道と生死とをならべてみるにはあらざるなり」生死に辨道するにはあらずとは、生死の上に辨道を談ずる僻見をさらはるゝなり、生也不道死也不道なり」影室いはく、又辨道の中にてこそ生死はすれ、生死の上にて今辨道するにはあらざれば生が生にあらざともいはるゝなり、と」無主の形骸いたづらに徧野せんとき眼睛をつくるがごとく正觀すべしとは、この形骸のむなしくなりて、山野にすてたらんを、目前にみるがごとく觀察すべしとなり」參本いはく、予敬三持一本行持卷、始自慈父章、至脇尊者同二世上本、自下次序、大殊別世本、曰第四真丹初

祖章、五二祖章、六第三十一祖章、七第三十二祖章、八南嶽大慧章、九洪州大寂章、十百丈大智章、十一大梅章、十二大潁大圓章、十三大潁大安章、十四大慈寰中章、十五趙州章、十六香嚴章、十七臨濟章、十八五祖山法演章、中接雲居鏡清三平大白山宏智等因緣、十九雪峰義存章、二十玄沙章、二十一長慶慧稜章、二十二芙蓉章、二十三先師天童章、如是次第、其中接收大異於七十五帖等、是以今由七十五帖列次、而朱指予之本列次、便所持禪和尚子云爾、と」脇尊者の縁西域記第二卷第十八

【御抄】段如文。
胎内六十年、出胎後八十年、都合一百四十年、實奇代事也、實年老耄及をうらむべからず、尤志氣を專修にして、辨道功夫すべき也、委見文。

六祖は新州の樵夫なり、有識と稱しがたし、いとけなくして父を喪す、老母に養育せられて長ぜり、樵夫の業を養母の活計とす、十字の街頭にして一句の聞經よりのち、たちまちに老母をすてて、大法をたづぬ、これ奇代の大器なり、拔群の辨道なり、斷臂たとひ容易なりとも、この割愛は大難なるべし、この棄恩はかるかるべからず、黃梅の會に投じて、八箇月ねぶらずやすまず、晝夜に米をつく、夜半に衣鉢を正傳す、得法已後、なほ石臼をおひありきて、米をつくこと八年なり、出世度人說法するにも、この石臼をさしおかず、希世の行持なり。

△辨、祖下、大師二字アリ、割云、異本無大師二字
△辨、なり下割云、異本此下初祖二祖がつて精蓋を舛創せず、難艸の繁務なし、および三祖四祖もまたかくのごとし、五

祖六祖寺院を
自神せず、青
原南嶽もまた
かくのごとし
トアリ

△辨、法下、
して二字アリ
△辨、リ下割
云、異本此章
次ニ大梅ノ章
アリ
△辨、尙下割
云、異本は字
ナシ

【聞解】 有識と稱しがたしとは、自體をいへば、八十生の知識なれども、今日樵父の表から云ふなり
○割愛大難……二祖斷臂は我身ひとりのこと、六祖のは母と云ふ恩愛の相手がある、これ大難なり。
【私記】 とは、參本いはく、此師一生、是石臼不退轉、と」
【御抄】 段如文。

江西馬祖坐禪することは、二十年なり、これ南嶽の密印を稟受するなり、傳
法濟人のとき、坐禪をさしおくと道取せず、參學のはじめていたるには、か
ならず心印を密受せしむ、普請作務のところには、かならず先赴す、老にいた
りて懈倦せず、いまの臨濟は、江西の流なり。

雲巖和尚は、道吾とおなじく藥山に參學して、ともにちかひをたてて四十
年わきを席につけず、一味參究す、法を洞山の悟本大師に傳付す、洞山は
く、われ欲打成一セツト片ニ、坐禪辨道スル、已二十ニ年なり、いまその道あまねく傳付
せり

【聞解】 懈倦……倦は當作倦、倦は倦也。

【私記】 とは、參學のはじめていたるとは、參學人の馬祖の會下に新到するなり」心印を密受せしむ
るとは、坐禪せしむるなり」いまその道あまねく傳付せりとは、そのみちあまねく天下に流布するな
り」

【御抄】 段如文。

【那一實】 雲巖道吾四十年不脇至席の事、年代の論をなす、雲巖二十歳の時誓を立てしよりと見れ
ば、六十歳に至まで四十年なり、故に廣録に四十年の辨道とあるなるべし。

雲居山弘覺大師、そのかみ三峯菴に住せしとき、天厨送食す、大師あるとき
洞山に參じて、大道を決擇してさらに菴にかへる、天使まだ食を再送して師
を尋見するに、三日をへて師をみることにえず、天厨をまつことなし、大道を
所宗とす辨寫の志氣、おもひやるべし。

【私記】 とは、大道を所宗とすとは、大道のみを宗として、餘縁にわたらざるなり」辨寫は、しおほ
せるなり。

【御抄】 段如文。

天厨送食せり、而大師洞山に大法決擇して後、天使師を尋見するに、經三日見師不得、是隔境界之故
也。

【那一實】 雲居三峯菴天供事、會元十三卷、雲居章云、師後結菴于三峯、經旬不赴堂、洞山問、
子近日何不赴齋、師曰每日自有天神送食、山曰我將謂、汝是個人、猶作這個見解、在、汝晚間
來、師晚至、山召膺菴主、師應喏、山曰不思善不思惡、是甚麼師、回菴寂然宴坐、天神自此竟尋
不見、如是三日乃絕。

見一本作覓
△辨、那、尋
見ナ尋覓ニ作
ル
△辨、し下割
云、異本此章
書嚴ノ章ノ次
ニ出ス

△辨、なりチ
てニ作リ其下
割云、異本作ニ
して又作ニナ
リ

百丈山大智禪師、そのかみ馬祖の侍者とありしより、入寂のゆふべにいたるまで、一日も爲衆爲人の勤仕なき日あらず、かたじけなく一日不作、一日不食のあとをのこすといふは、百丈禪師、すでに年老臘高なり、なほ普請作務のところ、壯齡と同勵力す、衆これをいたむ、人これをあはれむ、師やまざるなり、つひに作務のとき、作務の具をかくして、師にあたへざりしかば、師その日一日不食なり、衆の作務にくははらざることをうらむる意旨なり、これを百丈の一日不作、一日不食のあとといふ、いま大宋國に流傳せる、臨濟の玄風、ならびに諸方叢林、おほく百丈の玄風を行持するなり

【私記】 とは、しるべし

【御抄】 如文。

鏡清和尚住院のとき、土地神かつて師顔をみることをえず、たよりをえざるに
よりてなり

三平山、義忠禪師、そのかみ天厨送食す、大顛をみてのちに、天神また師をもとむるにみることをあたはず

【私記】 とは、しるべし。

【御抄】 段如文。

土地神不得見師顔不得便之故也。

是又天厨送食す是又得法之後不能求師、大顛は石頭の弟子なり、今の義忠は大顛弟子なり。

【那一寶】 大滂和尚此曰大安、號懶安、滂山第二世也、後住長慶、嗣法百丈、傳出會元、四傳燈九。

○趙州章旋轉飯食、如佛在世、不定置典座、衆各營義也。

△辨、同チ屎、
參チ學ニ、道
ヲ禪ニ作ル、
學下割云、異
本作參

後大滂和尚いはく、我二十年在滂山、喫滂山飯、厨滂山厨、不參滂山道、只牧得一頭水牯牛、終日露迴迴也、しるべし一頭の水牯牛は、二十年在滂山の行持より牧得せり、この師かつて百丈の會下に參學しきたれり、しづかに二十年中の消息おもひやるべし、わするるときなかれ、たとひ參滂山道する人ありとも、不參滂山道の行持は、まれなるべし

【聞解】 後大滂和尚……後字は大滂山にまぎれぬ爲に置くなり○喫滂山飯、厨滂山厨……なにも借りたものなし、皆反して仕まふた○不參滂山道は、不會不佛の行持なり。

【私記】 とは、參本いはく、不參滂山道者、一頭水牯牛、日夜出來、任運騰騰、騰騰任運耳と

【御抄】 段如文。

二十年之間在滂山、喫滂山飯、厨滂山厨、不參滂山、只牧得一頭水牯牛云云、是が今の行持の姿にてある也、所詮至極解脱したる詞也、不會佛法と六祖の被仰たる程の詞なり。

趙州、觀音院、眞際大師、從諗和尚、とし六十一歳なりしに、はじめて發心求道をころざす、瓶錫をたづさへて行脚し、遍歴諸方するに、つねにみづからいはく、七歳童兒、若勝我者、我即問伊、百歳老翁、不及我者、我即教佗、かくのごとくして南泉の道を學得する、功夫すなはち二十年なり、年至八十のとき、はじめて趙州城東觀音院に住して、人天を化導するこゝと、四十年來なり、いまだかつて一封の書をもて檀那につげず、僧堂おほきならず、前架なし、後架なし、あるとき牀脚をれき、一隻の燒斷の燼木を、繩をもてこれをゆひつけて、年月を經歷し修行するに、知事この牀脚をかへんと請するに、趙州ゆるさず、古佛の家風きくべし、趙州の趙州に住するこゝとは、八旬よりのちなり、傳法よりこのかたなり、正法正傳せり、諸人これを古佛といふいまだ正法正傳せざらん餘人は、師よりもかろかるべし、いまだ八旬にいたらざらん餘人は、師よりも強健なるべし、壯年にして輕爾ならん、われらなんぞ老年の崇重なるとひとしからん、はげみて辨道行持すべきなり、四十年のあひだ、世財をたくはへず、常住に米穀なし、あるひは栗子椎子をひろふて、食物にあつ、あるひは旋轉飯食す、まことに上古龍象の家

△辨、するノ
二字ナシ
△辨、す下割
云、出子趙州
錄行狀

風なり、懸慕すべき操行なり、あるとき衆にしめしていはく、爾若一生、不離叢林、不語十年五載、無人喚爾作啞漢、已後諸佛也不奈爾何、これ行持をしめすなり、しるべし十年五載の不語、おろかなるに相似せりといへども、不離叢林の功夫によりて、不語なりといへども、啞漢にあらざらん、佛道かくのごとし、佛道聲をきかざらんば、不語の不啞漢なる道理あるべからず、しかあれば行持の至妙は、不離叢林なり、不離叢林は、脱落なる全語なり、至愚のみづからは、不啞漢をしらず、不啞漢をしらせず、阿誰か遮障せざれども、しらせざるなり、不啞漢なるを、得恁麼なりときかず、得恁麼なりとしらざらんば、あはれむべき自己なり、不離叢林の行持、しづかに行持すべし、東西の風に東西することなかれ、十年五載の春風秋月しられざれども、聲色透脱の道あり、その道得、われに不知なり、われに不會なり、行持の寸陰を可惜許なりと參學すべし、不語を空然なるとあやしむことなかれ、入之一叢林なり、出之一叢林なり、鳥路一叢林なり、徧界一叢林なり

△辨、か字ナ
リ其下割云、
異本有ニか字

【聞解】 趙州の趙州に住する……上の趙州は人なり下趙州は州なり○前架は知事牀なり後架は襪子杯を着ける處○正法を正傳せぬ餘、人師よりかろく劣なり、未及三十八人は、師より強く丈夫な、其の強

く壯年の輕はずみなる、我等とふして老年の崇く重き尊體とひとしく肩を并べることにはならぬゆゑに、はげみて辨道するがよい○樵子……日本樵をしいとよめども、字書に無し樵はつちなり○日本に云ふしいは樵字なるべし○旋轉とは、施主の持ち來た物を轉じて、今日のを明日へ轉じて簡約して食する也○佛道のこゑを聞かぬ者には不語の不啞漢なる道理はない○不離叢林の措かぬ工夫で、一切を脱落するなり、其境界は全語なり、ゆるに餘したことはない○至愚の自己なる者は不啞漢の道理を知らず、師家も知せず誰も障ねどもしらせぬ、手前が愚なるゆるなり○不啞漢なる傳得恁麼にも不足無い境界と云ことをきかぬ、それ底は憐べき自己なり、東西の風に吹れて、東西し行く計りが遍參ではない、十年五年不離叢林なる工夫あれば、春風の聲、秋月の色を、手前に不_レ知とも、透脱する道あり、これは只聲色を透脱し、自由を得ると云ふことを、十年五年と云ふから、春と秋とをつかひ出し、聲色をいはん爲に、月と風とを面白あしろふた文章なり○其透脱の道法は、われに不知不_レ會で會すべき道理がない、知と會とを超た向上の境界なり○かうした難_レ有道理じやから、行持の寸陰を惜み不語にして居るは、空然で役に立ぬことじやと思ふべからず○今日不語にするは坐蒲團上が入_二叢林_一又出る行李で叢林は外にはない、又鳥道の諸縁を離れた、足下無私なる一叢林なり、又不語は遍界一叢林なる蒲上の行李じや。

【私記】とは、脱落なる全語とは、言端語端なり、一有二無の多種兩般も、しかしながら叢林の寂黙にあらざるなし、なんの言語の喧鬧かこれあらん「不啞漢は、不語の全面なり、至愚の身いかでこれをしらん、たれありてこれをしらすものあらんや」不啞漢なるを得恁麼なりときかす、得恁麼なりとしらすとは、不啞漢こそは、叢林不語の面孔なりときかす、しらするなり、不啞漢ならば、言音あるべしとおもへるは、不參學なり、ゆるにあはれむべき自己なりといへり「東西の風に東西することなかれとは、不語ならば黙なるべし、不啞ならば、語あるべしと、語にしたがひて迷惑することなかれとなり」十年五載の風月は、不語の當陽なるをもてしらするなり、こゝをもて聲色透脱の道ありといへり「透脱の道得なるがゆるに、不知不_レ會なり」つきひのゆくは行持のゆくなれば、愛惜すべき寸陰なり「徧界一叢林のゆるに不離なり」

【御抄】 段如文。

一生不離叢林の姿が、すなはち行持なるべし、佛道ならずば不語を行持と談事、更にあるべからず、啞漢とはをしなり叢林に住して不語なる姿が行持なる也、坐禪の當體即作佛也と云ふ程の義也、諸佛也不奈爾何とは、諸佛をも物ともせずと云心也、たとへば佛にもをとるべからずと云心地なり、又入之一叢林也、出之一叢林也、鳥路一叢林也、徧界一叢林也、と文、叢林と云へば、只一字の堂と思ふべからず、盡界叢林なるべし、是則行持なるべし是に出入共に行持也、只僧堂に衆僧の出入する義と許は不可心得也。

大梅山は、慶元府にあり、この山に護聖寺を草創す、法常禪師その本元なり、禪師は、襄陽人なり、かつて馬祖の會に參じてとふ、如何是佛と、馬祖云、即心是佛と、法常このことばをききて、言下大悟す、因に大梅山の絶頂にのぼりて、人倫に不群なり、艸菴に獨居す、松實を食し、荷葉を衣とす、かの山に小池あり、池に荷おほし、坐禪辨道すること三十餘年なり、人事たえて

逆流もある、それがみな随流去で無ければならぬ、この僧馬耳東風なる乎○摧殘……この一首全篇枯木に比して述る初二句は枯木不變心の境界世間に出る心無きを述ぶ○末二句は全體の朽木なるゆゑに樵者も不顧、又何の役に立たぬゆゑに野人の大工も尋ねぬ、かうした境界なれば世に出ても役に立ぬだ請待は御免あれとなり○一池荷葉のこの偈見へた通り○本國の、諸祖の本國高麗をいふ○こゝに古歌を引く「さみすつる山を浮世の人間は嵐や庭の松にこたえん」又「こゝもまた浮世の人の問ひたればそら行く雲を宿をもとめん」佛法あらまじと……あらまじとは當有と書す、俊明之考也○大意は貪名愛利の中にも佛法は有ると云て世縁を捨て兼るは愚見なり。

【私記】とは 卽是の宗をしては、非非の言語にあらざることしりぬべきのみ「這老漢惑亂人不少なり、あるひは卽是といひ、あるひは非非といふ、まことに丁期あるべからざるなり」梅子熟也は、ただ稱語とのみおもふべからず、楊花落盡をも放過すべからざるなり」その餘の言句工夫すべし」

【御抄】 段如文。

【那一寶】 大梅章二偈、一偈出傳燈七、一偈出會元三〇交割、交合也、割斷也、點對交割之義也、
一點對名與實、乃寫之新簿事○高麗迦智傳、出傳燈卷十。

五祖の法演禪師いはく、師翁はじめて楊岐に住せしとき、老屋敗椽して、風雨の敵はなはだし、ときに冬暮なり、殿堂ごとごとく舊損せり、そのなかに、僧堂ことにやぶれ、雪霰滿牀居不遑處なり、雪頂の耆宿なほ澡雪し、厖眉の尊年皺眉のうれへあるがごとし、衆僧やすく坐禪することなし、衲子投誠し

△辨、の、
ヲ山ニ作ル

△辨、項ヲ頭
ニ作リ其下割
云、異本作ノ項

て修造せんことを請ぜしに、師翁却之いはく、我佛有言、時當滅劫、高岸溪谷遷變不常、安得圓滿如意自求稱足ならん、古往の聖人、おほく樹下露地に經行す、古來の勝躅なり、履空の玄風なり、なんだち出家學道する、做手脚なほいまだおだやかならず、わづかにこれ四五十歳なり、たれかいたづらなるいとまありて、豊屋をこととせん、つひに不從なり、翌日に上堂して衆にしめしていはく、楊岐乍住屋壁疎、滿牀盡撒雪珍珠、縮却項暗嗟嘘、翻憶古人樹下居、つひにゆるさず、しかあれども、四海五湖の雲衲霞袂、この會に掛錫するを、ねがふところとせり、耽道の人おほきことをよろこぶべし、この道ここにそむべし、この語みに銘すべし、演和尚あるときしめしていはく、行無越思、思無越行この語おもくすべし、日夜思之、朝夕行之いたづらに、東西南北の風にふかるるがごとくなるべからず、いはんやこの日本國は、王臣の宮殿、なほその豊屋あらず、わづかにおろそかなる白屋なり、出家學道の、いかでか豊屋に幽棲するあらん、もし豊屋をえたるは、邪命にあらざるなし、清淨なるまれなり、もとよりあらんば論にあらず、はじめてさらに經營することなかれ、艸菴白屋は、古聖の所住なり、古聖の所愛なり、

一本神を下
有もて字

晩學したひ參學すべし、たがゆることなかれ、黃帝堯舜等は、俗なりといへども、艸屋に居す、世界の勝躅なり、尸子曰、欲觀黃帝之行於合宮、欲觀堯舜之行於總章、黃帝明堂、以艸蓋之、名曰合宮、舜之明堂、以艸蓋之、名曰總章、しるべし合宮總章は、ともに艸をふくなり、いま黃帝堯舜をもて、われらにならべんとするに、なは天地の論にあらず、これなほ艸蓋を明堂とせり、俗なほ艸屋に居す、出家人いかでか高堂大觀を所居に擬せん、慚愧すべきなり、古人の樹下に居し、林間にすむ、在家出家ともに愛する所住なり、黃帝は崆峒道人廣成の弟子なり、廣成は崆峒といふ巖のなかにすむ、いま大宋國の國王大臣、おほくこの玄風をつたふるなり、しかあればすなはち、塵勞中人なほかくのごとし出家人いかでか塵勞中人よりも劣ならん、塵勞中人よりも、にこれらん、向來の佛祖のなかに、天の供養をうくるおほし、しかあれども、すでに得道のとき、天眼およばず、鬼神たよりなし、そのむねあきらむべし、天衆神道、もし佛祖の行履をふむときは、佛祖にちかつくみちあり、佛祖あまねく天衆神道を超證するには、天衆神道はるかに見上のたよりなく、佛祖のほとりに、ちかつきがたきなり、南泉いはく、老僧修行

のちからなくして、鬼神に覩見せらる、しるべし無修の鬼神に覩見せらるるは、修行のちからなきなり

【聞解】 老屋は古ひ家のこといへに椽も敗壞するなり○雪頂鷹眉三十年の老たるを云ふ、この溟雪は堪忍ししんぼふしてすはると云ふ程のこと○皺眉は氣の毒なる顔つきのこと○履空の玄風……はきもの杯も、そこなひたる籠相なを穿くと云ふこと○做手脚……なすしかたと云ふこと○揚岐……前三句は、寺の疎なるゆゑに、雪の日送り寒き様子を云ふ○翻憶……打ち反して思ふてみれば、古人は樹下にさへ住居して、法を求めた、其れから見れば、寒いといへども、屋の中に居るは忍ばれるなり○この道心にそむべし……僧堂杯の破れたを世話にすれば辨道が純一成らぬから如し是に普請を不許也、今の人もこの道取や、この語を身心に銘じて、純一辨道すべし○行無越思……心に思ふ通りを、身に行ふから、身心一枚なり、ゆゑに身を樂にして居るものは、心も其通り怠るから、身心一枚に餘事を雜えず、辨通せよとの教へなり、風の吹ように、うろたへるな○堯舜と我等とは天地の違ひのみならず其の堯舜の高い堺でさへ艸蓋を明堂として居す○崆峒は山の洞、何にも無き處○天衆神道も佛祖の行履をふむ時は作祖に近づく道あり、又佛祖の天衆に送供せらるゝ尊貴を超れば、天衆近づくとあたはず、これ佛祖の行李の難し有知て忘るゝこと勿れ○南泉の公案を引くは修行太切にさせる爲に引く有道の先蹤……鬼神の拜し度いと云ふは有道の先蹤にあひあふなり。

【私記】 とは、溟雪は修行なり」參本いはく、佛言未檢と」做手脚は、作業なり」行無越思、思無越行は、行思の均等なるをいふ、言行相稱といはんほどなり」東西南北の風にふかるとは、鄭重の心なく、

でき次第なるをいふ」參本いはく、先師告_レ予、坦然集曰、演和尚示曰、衲子守_レ心城、奉_レ戒律、日夜思_レ之朝夕行之。○行行有_レ其始、兩成_レ其終、猶_レ耕者有_レ畔、其過_レ鮮矣、上巳春秋經左氏傳第十七卷末秒子大叔問_レ政於子產、子產曰、政如_レ農功、日夜思_レ之、思_レ其始而成_レ其終、朝夕而行之、行無_レ越_レ思、如_レ農之有_レ畔、其過_レ鮮矣、上巳以_レ是觀_レ之と」この玄風は、黃帝堯舜の玄風なり」向來の佛祖の下は、對辨してあかすなり、黃帝堯舜と、天衆神道と、はるかに比倫すべからず、しかあるにこの天衆神道なほ佛祖のほとりにちかづくことをえず、いはんや黃帝堯舜をや、黃帝堯舜は、世間の聖人なれども、なほ生死中の人なるがゆるに、塵勞中人といへり、しかるを出家人、この塵勞中人より劣ならん慚愧すべきにあらずや」南泉の下は、ちなみに無修なれば鬼神に覩見せらるゝに引證せり、ただ文のごとくみるべし、宗は天壤なり」

【御抄】 段如文、五祖は山名也、非五祖六祖事。

我佛有言、當滅劫高岸深谷遷變不常、安得圓滿如意自求稱足云云、是は古往の聖人、多露地樹下に經行す、而末代人豊屋を元として行道疎なる事をいましめらるゝなり。

是は行の詞を、行持の草子なるゆへに被引出也、行與思差別なき道理をのべらるゝ也打任は行は身上の所作、思は心意識の上に談之、爲破此邪念なり、行思共一法なる道理不可忘却。

【那一寶】 五祖演章、履空の玄風、前漢書に唐尊衣_レ敝履_レ空_レ以_レ瓦器_レ飯食_レ唐尊質素にて脚下の具も裸穿_レぬけたるを用ゆ、玄風古語に沐_レ浴_レ玄風_レと、榮華を不_レ事_レ氣高き風流と云ふ意○尸子、諸尸彙函第九云、尸子名_レ傲、魯人、秦相、商君師_レ之、尸子一書二十卷、則秦火之燼、支那僅存○廣成子事出_レ莊子四。

△辨、隱_レ子院
ニ作_レル、其下
割云、異本ニ
二處院字作_レ
隱
△辨、光上空

大白山宏智禪師正覺和尚の會に、護伽藍神いはく、われきく覺和尚この山に住すること十餘年なり、つねに寢堂にいたりて、みんとするに不能前なり、未之識也、まことに有道の先蹤にあひあふなり、この天童山は、もとは小院なり、覺和尚の住裏に、道士觀、尼寺、教院等を掃除して、いまの景德寺となせり、師遷化の後、左朝奉大夫侍御史王伯庠、因に師の行業記を記するに、ある人いはく、かの道士觀、尼寺、教寺をうばひて、いまの天童寺となせることを記すべし、御史いはく不可なり、此事非_レ僧_レ德_レ矣、ときの人おほく侍御史をほむ、しるべしかくのごとくの事は、俗の能なり、僧の德にあらず、おほよそ佛道に登入する最初より、はるかに三界の人天をこゆるなり、三界の所使にあらず、三界の所見にあらざることを、審細に咨問すべし、身口意および依正をきたして、功夫參學すべし、佛祖行持の功德、もとより人天を濟渡する巨益ありとも、人天さらに佛祖の行持に、たすけらるると覺知せざるなり、いま佛祖の大道を行持せんには、大隱小隱を論ずることなく、聰明鈍癡をいふことなかれ、ただながく名利をなげすてて、萬縁に繫縛せらるることなかれ、光陰をすこさず、頭然をはらふべし、大悟をまつことなかれ、大

字アリ其下割
云、異本無空
字。
△辨、ふ下割
云、れがふハ
きらふナラン
寫誤字

悟は家常の茶飯なり、不悟をねがふことなけれ、不悟は警中の寶珠なり、た
だまさに家郷あらんば家郷をはなれ、恩愛あらんば恩愛をはなれ、名あらん
ば名をのがれ、利あらんば利をのがれ、田園あらんば田園をのがれ、親族あ
らんば親族をはなるべし、名利等なからんも、またはなるべし、すでにある
をはなる、なきをもはなるべき道理あきらかなり、それすなはち一條の行持
なり、生前に名利をなげすて、一事を行持せん、佛壽長遠の行持なりいま
この行持、さだめて行持に行持せらるるなり、この行持あらん身心、みづか
らも愛すべし、みづからもうやまふべし

【聞解】 左朝奉……官名を三つあげる○大隱小隱論することなく……出入を論すること無いと云ふこ
と○不悟をねがふ、不悟は大迷のこと、大悟を超えた境界、故に警中の珠と云、大意は、大悟も中悟
も持たせぬ○一條の行持……有無共に離れたが一條の行持なり○いまこの行持は定めて過去より行じ
來る行持によりて行持するなり。

【私記】 とは 大悟不悟は、行持の功德莊嚴なり、なんぞ取捨することをえん「家常茶飯、警中寶珠
は、行持を異稱するのみ」われは名利なしとをもへる、これおほひなる重擔なるべし、無言の行に、
上座の老僧の老僧ばかりぞものほもをさぬと、いへるにおなじし、行持純一無雜なるには、有無とも
にはなるべし、あに一條の行持にあらざらんや、一事は、一條とおなじし、このとき佛法久住するが

ゆゑに、佛壽長遠の行持なりといへり「いまこの行持は、たれわれの行持なり、われわれが輕落の行
持なりといへども、さだめて行持に行持せらるるをもて、この行持あらん身心は、われなりとも愛敬
すべきなり」

【御抄】 段如文。

是は宏智禪師遷化之後、行業記の注に、道士觀、尼寺、教院等をやぶりて、今の景德寺となせり、其
を行業記に記せむとするを、今の左朝奉大夫侍御史王伯庠云可也、此事非僧德矣、仍不載行業記、此
御史を讀之、是俗能なり、非僧德也。

【那一寶】 大隱小隱事、大隱住朝市、小隱入丘樊、白居易が詩句也。

大慈寰中禪師いはく、説得一丈、不如行取一尺、説得一尺、不如行取一
寸、これは時人の行持おろそかにして佛道の通達をわすれたるがごとくな
るをいましむるにいたりといへども、一丈の説は不是とにはあらず、一尺の
行は一丈の説よりも大功なりといふなり、なんぞただ丈尺の度量のみなら
ん、はるかに須彌と芥子との論功もあるべきなり、須彌に全量あり、芥子に
全量あり、行持の大節これかくのごとし、いまの道得は、寰中の自爲道にあ
らず、寰中の自爲道なり

【聞解】 大慈環中……これは説と行とに、優劣は無けれども、行持の方から云ふときは如是あるなり

△辨、寸下割
云、師闡三法
百丈海

△辨、自下他
ニ作ル、其下
割云、異本作
自不可也

○はるかに……行持の大功德なるをいはば、丈尺のみならず、芥子と須彌との諸功がある、行持は須彌不三行持は芥子○須彌に全量あり……これから須彌も芥子も、共に無量にして、畢竟差異は無きを明す、須彌は須彌の全量、極大同小、芥子に全量ありて全量は無量極小同大○前の須彌と芥子との功德を論ずる處に、人が執着するをいやに思ふて如是示すなり、自爲道にあらず……寰中のお手前の爲に云ふではない、他爲道なり。

【私記】とは 説得も、行取も、一丈も、一尺も、ともに一子親得なり、絶比倫なるがゆるに不如といふ」説行の勝劣にあらざるがゆるに、一丈の説は不是とにはあらずといへり、つまりいはば、一尺の行も、一丈の説も、不是なることなし、ともに大功なりといふが、丈も一乘なるべし、尺も一乘なるべし、いはゆる従前汗馬、無人識、只要重論蓋代功なり、ゆるになんぞただ丈尺の度量のみならんといへり」須彌も芥子も大功なり、この大功なり、これを全量といふ、行持の大節といふべきのみ」參本いはく、大節猶大本也、其大本者、道謂一尺行則大一切於一丈説也、底是即之意也、説之與行、共離三丈尺、故道何止等、丈也尺也、天地懸隔、極小同大超越行持、謂之論功、於是乎知萬物自有功、當言用及處、芥子比極小、須彌亦比極大、於小大極、則亡勝劣、之謂全量、説行大節、言語道斷、非古來今也夫、道下非自爲道、自爲道也乎、有邪解焉、上寰中、一位長老乎、下寰中則法界量滅底是也、論如頭長頸短不屈尺寸也、説今行兮、婆和不能響と」説行寸尺は、寰中の舌頭にあらず、行持寰中の自爲道なり」

【御抄】 段如文。

説得一丈不如行取一尺、説得一尺不如行取一寸云云、此此詞を打任て心得には、一丈を説得するよりも、

一尺を行取するは、まさりたるやうに思付たり、今義は非爾、其故は一丈も行持の上に仕ふ、一丈一尺も乃至一寸も行持の上に談ずる尺寸なり、ゆへに勝劣高下の論に不可及、而今の草子に一尺の行は、一丈の説よりも大功也と云へば、猶勝劣あるにいたり、前後の參差にも聞たり、是は行持と云草子の上なるうへに、蹇一尺の行は一丈の説よりも大功也とは云へども、さればとて始終更勝劣淺深の義不可有、隨上に一丈の説は、不是とにはあらずと被釋分明也、又○行の位はあさく、證の位は深しと思へり、行證共只同たけ也、今の一丈一尺一寸等の詞に、此道理符合する也、又須彌與芥子、佛法には只一也と習也、打任は天地懸隔相違の喩となれり、須彌に全量あり、芥子に全量ありと云ふ此心地なり○この道得は寰中の自爲道にあらず、寰中の自無道也と云へり、此道得は寰中の自爲道計にあらず三世諸佛祖等の自爲道なるこの道理なるゆるに、又寰中の自爲道也とも、蹇いはるゝ也。

洞山悟本大師道、説取行不得底、行取説不得底、これ高祖の道なり、その宗旨は、行は説に通ずるみちをあきらめ、説の行に通ずるみちあり、しかあれば終日とくとくところに、終日おこなふなり、その宗旨は、行不得底を行取し、説不得底を説取するなり。

【私記】とは、これ行持高祖の道なり」説行の親切なるをもて、通ずるみちありといひ、とくとくところにおこなふといへり、説行の無罣礙なればなり」行取行不得底、説取説不得底、これなんぞ、すみやかにいへり」

【御抄】 是は説與行を各別に被説也、説の時は行はかくれ、行の時は説はかくるべし、一方を證する

△辨、リ下割
云、異本洞山
掌書居草大慈
寰中草末攝シ
テ別草ナシ

ときは一方はくらき道理なるべし、然而前に詞不可違也。

雲居山弘覺大師、この道を七通八達するにいはく、説時無行路、行時無説路、この道得は行説なきにあらず、その説時は一生不離叢林なり、その行時は洗頭到降雪峰前なり、説時無行路、行時無説路、さしおくべからず、みだらざるべし

△辨、前下割云、此文出于道得篇末

【聞解】 弘覺大師、この道を……この道とは、上の洞山の道を指す○説時は……説は、説の一時で、一生不離坐蒲上、なにも餘事を離へず○行時は通身行する全體全現で何も不言到雪峯前。

【私記】 とは、説路なく行路なきなり「ゆるはいかに、この説行の現成公案なるがゆるなり、ゆるに説行なきにあらずといへり」一生不離叢林、洗頭到雪峯前は、ともに行持を異稱するなり「餘物となさす、わがものとすべきなり、ゆるにさしおくべからず、みだらざるべしといへり」

【御抄】 段如文。

是又説行之心得やう、前に不可違也、所詮一生不離叢林、洗頭到雪峯前を以て、行持と談也、一生不離叢林事、趙州段に委載了、説時には行路なく、行時には説路なき也、然而説時なきにあらず、不離叢林の姿説時也、行路亦無きにあらず、洗頭到雪峯姿を以て行路とは談也。

【那一寶】 洗頭菴主、永平廣錄卷九、雪峯真覺大師會裡有一僧、上山頭、雜草卓菴、有時僧來問、如何是祖師西來意、菴主云、谿深杓柄長、僧歸舉似雪峯、峯云也甚奇怪、老僧自往、勸過始得、雪峯使侍僧持剃刀、共往見菴主、便云道得不剃汝頭、菴主洗頭、到雪峯前、雪峯便剃菴主頭。

△辨、之下割云、付法藏經第二、阿難示水老婦、我演佛、若人生百、不離生滅、法、不離生、一日而得解了之、文小異、二箇同一本共作用、△辨、死下割云、異本作同生同死

古來の佛祖いひきたることあり、いはゆる、若人生百歲不離會諸佛機、未若生一日而能決了之、これは一佛二佛のいふところにあらず、諸佛の道取しきたれるところ、諸佛の行取しきたれるところなり、百千萬劫の回生回死のなかに、行持ある一日は、譬中の明珠なり、同生同死の古鏡なり、よろこぶべき一日なり、行持が、みづからよろこばるるなり、行持のちからいまだいたらず佛祖の骨髓うけざるがときは、佛祖の身心をします、佛祖の面目をよろこばざるなり、佛祖の面目骨髓、これ不去なり如去なり如來なり不來なりといへどもかならず一日の行持に稟受するなり、しかあれば一日はおもかるべきなり、いたづらに、百歲いけらんは、うらむべき日月なり、かなしむべき形骸なり、たとひ百歳の日月は、聲色の奴婢と馳走すとも、そのなかに一日の行持を行取せば、一生の百歲を行取するのみにあらず、百歳の佗生をも度取すべきなり、この一日の身命は、たふとぶべき身命なり、たふとぶべき形骸なり、かるがゆるにいけらんこと一日ならんは、諸佛の機を會せば、この一日を曠劫多生にもすぐれたりとするなり、このゆるに、いまだ決了せざらんときは、一日をいたづらにつかふことなかれ、この一日は、をしむべき

紀一本作記

重寶なり、尺璧の價直に擬すべからず、驪珠にかふることなけれ、古賢をしむこと身命よりもすぎたり、しづかにおもふべし、驪珠はもとめつべし、尺璧はうることもあらん、一生百歳のうちの一日は、ひとたびうしなはん、ふたたびうることもなからん、いづれの善巧方便ありてか、すぎにし一日を、ふたたびかへしえたる、紀事の書にしるさざるところなり、もしいたづらにすごさざるは、日月を皮袋に包含して、もらさざるなり、しかあるを古聖先賢は、日月をしみ、光陰をしむこと、眼睛よりもをしむ、國土よりもをしむ、そのいたづらに蹉過するといふは、名利の浮世に濁亂しゆくなり、いたづらに蹉過せずといふは、道にありながら道のためにするなり、すでに決了することをおもふべし、また一日をいたづらにせざるべし、ひとへに道のために行取し、道のために説取すべし、このゆるにしりぬ古來の佛祖、いたづらに一日の功夫をつひやさざる儀、よのつねに觀想すべし、遲遲華日も、明窓に坐しておもふべし、蕭蕭雨夜も、白屋に坐してわするることなけれ、光陰なにしてかわが功夫をぬすむ、一日をぬすむのみにあらず、多劫の功德をぬすむ、光陰とわれと、なんの怨家ぞ、うらむべし、わが不修のしからしむるなるべし、われわれとしたしからず、われわれをうらむるなり、佛祖も恩愛なきにあらず、しかあれどもなげすてきたる、佛祖も諸縁なきにあらず、しかあれどもなげすてきたる、たとひをしむとも、自佗の因縁をしまるべきにあらざるがゆるに、われもし恩愛をなげすてずば、恩愛かへりてわれをなげすつべき云爲あるなり、恩愛をあはれむべくば、恩愛をあはれむべし、恩愛をあはれむといふは、恩愛をなげすつるなり

△辨、運々下、
爾々下制云、
ル

【開解】 若し人……阿難の語これは行と説とを分けて云ふこれは行の方なり、回生回死は、いきかはり死にかはり云ふこと○同生同死は、古鏡と同生同死すると云ふこと、古鏡は修證を借らぬ本覺なり、こゝではやはり行持の下、行持ある一日が、古鏡と同生同死なり、走じやに能く決了之行持するをよろこぶがよい○日月を皮袋に包含……包含と云ふは一時も外に不漏なり○光陰なにしてわが修行工夫は出きぬに先きへ過ぎ行くぞあらなさけな光陰や、わが工夫をぬすむなり○光陰とわれとはいかなる怨家ぞいや光陰に咎は無いわれが不修なるゆるに、われとわれと親からず自己を取りはなしにするを恨るがよい○佛祖も恩愛の父母なきにあらねども其れを投捨て法に入る、又佛祖も本は凡夫なれば諸縁なきに非ず、然れどもなげすて、來る佛祖とわれらとの違ひは捨ると不捨との違ひなり○たとへ惜むとも自他の因縁所生の法なれば恩愛が長くといゆるものでないから早く捨てらるゝと云ふ爲しはさがある、生者必滅會者定離で今日の恩愛は則日の哀別なり○ゆるに恩愛を憐み度くは恩愛を捨るがよい。

【私記】とは 諸佛機とは、一大事なり、涉典録引付法藏因緣經第二「これは一日の行持も、徒生浪死の多劫にすぐれたるに引き來れるなり」道取といふより、行取とつづけたるのみなり「同生同死は、たい生死なり、成文のゆゑにつづけたるなり」明珠古鏡は、ともに希有なるにたとふ「みづからよるこぶは、行持のちからなり」佛祖の面目は去來にわたらざれども、行持にあらざれば稟受することあたはず「光陰のわが工夫をぬすむかと、よくよくたづねみれば、光陰のぬすむにはあらず、わが不修のぬすめるなり、まことに光陰とわれと怨家にあらざるなり」今日のわれ、行持のわれとしたしからざるなり「因緣所生の法なれば、たれかつねあるものあるべき、會者定離のありさまなれば、われすてざれば、かれわれをすつべきなり」云爲は、道理といわんがごとし「餘はしるべし」

【御抄】 又若人生百歳、不會諸佛機、未若生一日而能決了之○此文は法句經文也、依此文阿難入定寂滅し給云云其故は或時此文を唱て、人のとをりけるを聞給へば、若人生百歳不見水老鶴、未若生一日、不能親見之、如此誦して過けるあひだ、阿難此誦するものをよび入て、此文は經文也、わたくしの詞不可入、あしく誦する也とて如經文なをされたりけるを、任阿難教誦しける程に、又或時先度あしく誦せしやうに唱て、過けるあひだ又よび入てなど先度をしへしまゝには不誦して、如本あしくは誦するぞと被仰ければ、先度御教訓の定に誦すれば僻事也、只如先度可誦と人の申之間、如此誦する也と答申けり、其時佛入滅し給事不久、是程に皆人邪見に墮せり、かゝらむ世に住して、無詮とて寂滅給云云。

【那一實】 若人生百歳、付法藏因緣經二、阿難示水老鶴徒一曰、汝當聽我演佛偈、若人生百歳不_レ解_レ生滅法、不如_レ生一日而得_レ解_レ了_レ之、文小異。

南嶽大慧禪師、懷讓和尚、そのかみ曹谿に參じて執侍すること十五秋なり、しかうして傳道受業すること、一器水瀉一器なることをえたり、古先の行履もとも慕古すべし、十五秋の風霜、われをわづらはすおほかるべし、しかあれども純一に究辨す、これ晩進の龜鏡なり、寒爐に炭なく、ひとり虚堂にふせり、涼夜に燭なく、ひとり明窓に坐する、たとひ一知半解なくとも、無爲の絶學なり、これ行持なるべし、おほよそひそかに貪名愛利をなげすてきたりぬれば、日日に行持の積功のみなり、このむねわするることなかれ、説似一物即不中は、八箇年の行持なり、古今まれなりとするところ、賢不肖ともにこひねごふ行持なり

【私記】 とは 八箇年は、行持の年月なり「一物の不染汚なることこれを、即不中といふ」
【御抄】 段如文。

香嚴の智閑禪師は、大瀉に耕道せしとき、一句を道得せんとするに、數番つひに道不得なり、これをかなしみて書籍を火にやきて、行粥飯僧となりて、年月を経歴しき、のちに武當山にいりて、大證の舊趾をたづねて、結艸爲菴し、放下幽棲す、一日わづかに道路を併淨するに、礫のほどばしりて、竹に

△辨、併淨ナ
併淨ニ作り、

下割云、具本作併
△那、淨下割云、ハキステル掃除ナリ

あたりて聲をなすによりて、忽然として悟道す、のちに香嚴寺に住して一盂一衲を、平生に不換なり、奇巖清泉をしめて、一生偃息の幽棲とせり、行跡おほく本山にのこれり、平生に山をいでざりけるといふ

【開解】 行粥飯僧……行あるく大衆に粥飯を引きて給侍することなり。

【私記】 とは 文しるべし」

【御抄】 段如文。

磔のほとばしりて竹にあたりて、聲をなすによりて、忽然として悟道するは此禪師事也。

【那一實】 香嚴章行粥飯僧、行歩也、亦監察巡る意、衆僧の座を見てまわり、粥飯を給侍する、故に行粥飯僧と云意。

臨濟院、慧照大師は、黃檗の嫡嗣なり、黃檗の會にありて三年なり、純一に辨道するに、睦州陳尊宿の教訓によりて、佛法の大意を黃檗にとふこと三番するに、かさねて六十棒を喫す、なほ勵志たゆむことなし、大愚にいたりて大悟すること、すなはち黃檗睦州、兩尊宿の教訓なり、祖席の英雄は、臨濟徳山といふ、しかあれども徳山いかにしてか臨濟におよばん、まことに臨濟のごときは、群に群せざるなり、そのときの群は、近代の拔群よりも拔群なり、行業純一にして、行持拔群せりといふ、幾枚幾般の行持なりともおも

△辨、槩下三字ナシ割云、具本與黃檗三字有リ
△辨、樹下割云、具本作松

△辨、とナにニ作ル、△其下割云、具本作と

ひ擬せんとするに、あたるべからざるものなり、師在黃檗與黃檗栽杉松、次、黃檗問師曰、深山裏栽許多樹作麼、師曰、一與山門爲境致、二與後人作標榜、乃將鋏拍地兩下、黃檗拈起拄杖曰、雖然如是、汝已喫我三十棒了也、師作噓噓聲、黃檗曰、吾宗到汝大興於世、しかあればすなはち得道ののちも杉松などをうるけるに、てづからみづから鋏柄をたづさへけるとしるべし、吾宗到汝大興於世、これによるべきものならん、栽松道者の古蹤、まさに單傳直指なるべし、黃檗も臨濟とともに栽樹するなり、黃檗のむかしは、捨衆して大安精舎の勞侶に混迹して、殿堂を掃灑する行持あり、佛殿を掃灑し、法堂を掃灑す、心を掃灑すると行持をまたず、ひかりを掃灑すると行持をまたず、裴相國と相見せし、この時節なり

【開解】 行業純一にして……臨濟の行業は、純一にして、行持拔群なり、幾般の行持なると思量せんと擬するに、ながくどふも凡見ではかぞえられぬ○喫我三十棒了は、また有爲の働きが止め、無爲の處の缺て居るから、三十棒のとがあるなり○しかあれば、臨濟は手づから鋏柄を携えてうへらるゝ、これによりて黃檗の宗風大に興る、境界は高くは持てるものなれども、下く持てぬものじや、達道の人には高き時は毗廬を超へ、下き時は奴兒婢兒にもなるなり○栽松道者の跡を單傳して如是なるなり○裴相國と相見時は高僧什麼處の商量あり○行持をまたず……日用の掃灑がやはり心地を掃灑すること

じやけれども其れを待たず内外身心一枚のゆゑに。

【私記】 とは 深山裏栽樹、一與二與、拍地兩下、拈起拄杖、ともに行持の莫涯徹底なり、ゆゑに汝我三十棒といへり」作嘘嘘聲は、猶有者箇在なり」到汝大興於世は、吾宗の通天徹地なり、これ作嘘嘘聲を證明するなり」心とひかりとは、分別なり、心光を掃灑する直下行持の現成なるをもてまたぬといへり、行持の不染汚なるがゆゑなり」

【御抄】 如文。

陳尊宿の教訓に依て、佛法の大意を黃檗に問に、三番するに、一番に二十棒づ、都合六十棒を與き、勵志たゆむ事なし、大愚にいたりて大悟する事も、すなはち黃檗睦州兩尊宿教訓によりて也、黃檗與臨濟問答文につぶさなり。

△辨、唐上制云、唐以上ノ文異本ハ後漢山章次ニ別章ニ出ス
△辨、唐下の字アリ
△辨、那、みでナ即てニ作ル

唐宣宗皇帝は、憲宗皇帝第二の子なり、少而より敏黠なり、よのつねに結跏趺坐を愛す、宮にありてつねに坐禪す、穆宗は宣宗の兄なり、穆宗在位のとき、早朝罷に、宣宗すなはち戯而して龍牀にのぼりて、揖群臣の勢をなす、大臣これを見て心風なりとす、すなはち穆宗に奏す、穆宗みて宣宗を撫而していはく、我弟乃吾宗之英胄也、ときに宣宗としはじめて十三なり、穆宗は長慶四年晏駕あり、穆宗に三子あり、一は敬宗、二は文宗、三は武宗なり、敬宗父位をつぎて、三年に崩ず、文宗繼位するに一年といふに、内臣謀而これを

△辨、叔ヲ叔ニ作ル、其下制云、異本作ノ叔
△辨、唐下開字アリ△那、の閉ニ字アリ
△辨、參下制云、異本作ノ登

易す、武宗即位するに、宣宗いまだ即位せずしてをひのくににあり、武宗つねに宣宗をよぶに癡叔といふ、武宗は會昌の天子なり、佛法を廢せし人なり、武宗あるとき宣宗をめして、昔日ちちのくらゐにのぼりしことを罰して、一頓打殺して、後華園のなかにおきて、不淨を灌するに復生す、つひに父王の邦をはなれて、ひそかに香嚴禪師の會に參じて、剃頭して沙彌となりぬ、しかあれどもいまだ不具戒なり、志閑禪師をともとして、遊方するに廬山にいたる、因に志閑みづから瀑布を題していはく、穿崖透石不辭勞、遠地方知出處高、この兩句をもて、沙彌を釣佗して、これいかなる人ぞとみるとするなり、沙彌これを續していはく、谿澗豈能留得住、終歸大海作波濤、この兩句をみて、沙彌はこれつねの人にあらざとしりぬ、のちに杭州鹽官齊安國師の會にいたりて、書記に充するに、黃檗禪師、ときに鹽官の首座に充す、ゆるゑに黃檗と連單なり、黃檗ときに佛殿にいたりて禮佛するに、書記いたりてとふ、不著佛求、不著法求、不著僧求、長老用禮何爲、かくのごとく問著するに、黃檗便掌して、沙彌書記にむかひて道す、不著佛求、不著法求、不著僧求、常禮如是事、かくのごとく道しをはりて、又掌すること一掌

△辨、細下割云、異本作三說、説細ノ四字
發一本作廢
△辨、發ヲ與ニ作リ、其下割云、異本作廢
△那、す下割云、王室中否而再興謂之中興、出祖廢事死
△辨、那、即後ノ二字ナシ

す、書記いはく大蟲生なり、黄檗いはく、這裏是什麼所在、更說什麼麤細、また書記を掌すること一掌す、書記ちなみは休去す、武宗ののち、書記つひに還俗して即位す、武宗の廢佛法を發して、宣宗すなはち佛法を中興す、宣宗は即位在位のあひだ、つねに坐禪をこのむ、未即位のとき、父王のくにをはなれて遠地の谿澗に遊方せしとき、純一に辨道す、即位ののち、晝夜に坐禪すといふ、まことに父王すでに崩御す、兄弟また宴駕す、をひのために打殺せらる、あはれむべき窮子なるがごとし、しかあれども勵志うつらず、辨道功夫す、奇代の勝躅なり、天眞の行持なるべし

【問解】 敏點は二字共にかしこしとよむ○心風は心の上ることを云ふ、醫書にある○吾宗之英胃……宗は一家之所尙也、胃は總領子のこと、「瀑布……瀧水の石に激して向ふへつ」と落るを瀑布と云ふ、岩に傍て落る水簾と云ふ○穿石……この二句、表むきは瀑布のこと述べ、裏には此人の身上を譽て、走して向ふの器量を動して、みるなり、表文相は知れたこと、裏の心は、○穿岸……この一句は大衆と共に一切の作務等を仕て苦勞することも辭退しいやがらぬと云ふ○地遠……其人の心地は、遠く奥深ふして常ならぬ人じやから、いかさまこれは出處の氣高ひ人と知たと云ふ意なり○溪澗……この二句前の答に、よく合ふて、しかも宗意あり、一切の諸縁に繫留せられず、終に佛法の大海に入り、大波を起して、度生すべきと云ふ意見えたり○不著佛求……維摩經の文○常禮如是とは、佛

を禮すると云ふて何ぞ用が有て禮するで無い、能禮所禮性空寂にして常に如是禮すると云ふ意也○天眞の行持とは、天子なれば、誰れも辨道のこと杯を教へはせぬ、これ天眞なり。

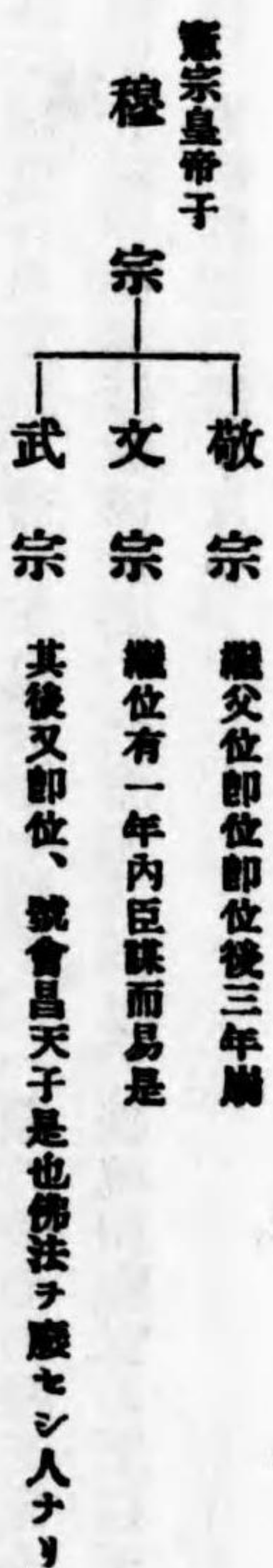
【私記】 とは 常禮如是事のひくとくところには、不著佛法僧求なるべし、まことに一常の霹靂なり」餘はしるべし」

【御抄】 如文。

心風也とは物狂也、と云ふ心なり○沙彌閑禪師を爲友、遊方するに廬山にいたるに、志閑沙彌を心みむとて瀑布を題していはく、穿岸透石不辭勞、遠地方知出處高、此兩句を以て沙彌をみむとする也、沙彌是を續していはく、溪澗豈能留得住、終歸大海作波濤、見此兩句沙彌是非常人と知之○黄檗とくに、佛殿にいたりて禮佛するに、沙彌いたりていふ、不著佛求不著法求、不著僧求長老用禮何爲、如此問著するに黄檗便掌して沙彌書記にむかひて道す、不著佛求不著法求不著僧求、常禮如是事、此道しをはりて、又掌する事一掌す、書記いはく太蟲生也、是は風性常住無所不周底と問しに、和尚重て扇を仕し程の道理也○黄檗いはく遮裏是什麼所在、更說什麼麤細、また書記を掌する事一掌す、書記ちなみに休去す、武宗ののち書記つひに還俗して即位す。

唐憲宗皇帝 | 穆宗 長慶四年宴駕
宣宗

武宗即位時召宣宗、昔日父位登事を罰す、一頓打殺而置後花園中、灌不淨復生す、終父王の邦を離て竊登香嚴寺閑禪師會成沙彌、然而未具戒也、後杭州鹽官の所に至て書記になり又黄檗于時杭州の首座也、黄檗與書記隣單なり。



△辨、山字ナ

△那、し下割
 云、莊子濠
 雪而精神深
 意ハ洗也潔白
 △辨、むにチ
 み三作り、其
 下割云、異本
 作むに
 △辨、那、二
 下字ナナシ、

雪峰山、眞覺大師、義存和尚かつて發心よりこのかた、掛錫の叢林、および行程の接待、みちはるかなりといへども、ところをきらはず、日夜の坐禪おこたることなし、雪峰草創の露堂堂にいたるまで、おこたらずして坐禪と同死す、咨參のそのかみは、九上洞山、三到投子する希世の辨道なり、行持の清嚴をすすむるには、いまの人おほく雪峰高行といふ、雪峰の昏昧は、諸人とひとしといへども、雪峰の伶俐は、諸人のおよぶころにあらず、これ行持のしかあるなり、いまの道人、かならず雪峰澡雪をまなぶべし、しづかに雪峰の諸方に參學せし筋力をかへりみれば、まことに宿有靈骨の功德なるべし、いま有道の宗匠の會をのぞむに、眞實に請參せんとするとき、そのたよりも難辨なり、ただ二十三十箇の皮袋にあらず、百千人の面面なり、おのこの實歸をもとむ、授手の日くれなんとす、打春の夜あけなんとす、あるひは師の普説するときは、わが耳目なくして、いたづらに見聞をへだつ、耳目そなはるときは、師また道取をはりぬ、耆宿尊年の老古錐、すでに拊掌笑呵呵

辨、割云、異本有十字

靈命ハ身、一本作ニ身命ハ

のとき、新戒晚進のおのれとしては、むしろのすゑを接するたより、なほまればなるがごとし、堂奥にいらざると、師決をきくときかざるとあり、光陰は矢よりもすみやかなり、露命は身よりもろし、師はあれどもわれ參不得なるうらみあり、參せんとするに師不得なるかなしみあり、かくのごとの事、まのあたり見聞せしなり、大善知識、かならず人をしる徳あれども、耕道功夫のとき、あくまで親近する良縁まれなるものなり、雪峰のむかし、洞山にのぼれりけんにも、投子にのぼれりけんにも、さだめてこの事煩をしのびけん、この行持の法操あはれむべし參學せざらんばかなしむべし

【開解】 行持の清嚴……清淨嚴密の行事○昏昧は諸人とひとし……悪い方からいへば諸人とひとし、これは面白き文法なり、悪いことは諸人に一等、善いことは諸人と不同なれば、諸人より伶俐なるに極た○澡雪奇麗に潔白なこと○筋力……骨折りて精出すこと○宿有靈骨……一生計りのことでない宿住より靈骨の具り來るなり○宗匠の會とは、宗旨にたくみなる知識會下と云ふこと○眞實に請參……これより辨道について師學相逢因縁の難遇なることを述ぶ○三十二人の人のみならず、百千人の面々が何れも修行とあれば、實歸を求むるに、師家より授手し教へらる日はくれ易くして修行難、辨學者の打春し修證する夜は明け易く光陰がはやく移りて修行に暇なし、師家の普説する時は、學者に見聞する耳目が無く、學者に見聞の耳目あるときは、師家の道取が仕まひになる、これ因縁時に逢ふことの

難きを云ふ○着宿の表て向きは、巖相な古ひ錐の様なれども、内證に人を刺す處の骨格ありて、むざとよりつけぬ、尊體が法を説て拈掌する時、新戒のおのれ學人の手前では、法を説かるゝ筈の末にも接する便りまれなるが如く、よりつかれぬ、法に因縁がうすければかうじや○已下雪峰のむかしと云ふまで師家と學人と函蓋合する良縁のまれなるを述べ、其證據に雪峯を引く○さだめて……雪峯の修行路には、この事煩上に段々云ふ處の難辨の事をしのびこらへられたであらふ、この雪峯の行持に親切な法の色の不變、操をあらはれみ愛するがよい、又この様に參學せぬは悲むべきこと也。

【私記】とは 二三十のみにあらず、百千人なりとは、實參のたよりえがたきをつよくいふなり」日のくれ夜のあけるは、參學のときのすぎやすきなり」授手打春は、師學の因縁なり、くれなんとす、あけなんとすとは、すぎやすきをいふ、ゆるにあるひはの下に、難値難遇をとけり」老古錐の拈掌呵は、師家の授手なり」席末を接するなほまれなり、いはんや入室をや」正師に親近すること希なり」あひあふことのかたきことをも經歷したるならんといへるを、この事煩をしのびけんといへり」この行持の法操は、雪峯をさす」餘はしるべし」參本いはく、義雲古佛編次等、分上下卷、上則十六章、是爲上卷」と又いはく、經豪師鈔、有再三說解、而太省略、莫錯莫錯」と又いはく、若人生百歲、原出付法藏因緣經第二、云云同涉典 錄所引其師者、所謂水老鶴也、而今所引、出於傳燈及正宗記等僧伽難提尊者傳、其略曰、師與大衆、至山舍、一童子持圓鑑、直到師前、師問汝歲幾許、曰、百歲、師曰、汝歲尚幼、何言百歲、曰、我不會理、正百歲耳、師曰、汝善機乎、佛言若人生百歲、不會諸佛機、未若生一日、而能決了之、云云往檢、今引諸茲、固所出付法藏因緣經第二阿難章、及其餘傳記二與四句、作不解生滅法、而得解了之、今茲文、自是緣別轉換所引、莫錯認定盤星」と

380
12
642

終